

2016 年度

日本と中国の小学校における異文化間交流  
一日中の漢字題材の視点を踏まえた共同授業実践から一

千葉大学大学院  
人文社会科学研究科  
博士後期課程  
陳 卓君

## 目次

初出論文一覧 .....	4
序章 はじめに .....	6
1 異文化間教育における研究対象.....	10
1.1 日本における異文化間教育の研究対象について .....	10
1.2 ドイツにおける異文化間教育の研究対象について .....	13
2 異文化間教育における研究対象の拡大 .....	16
2.1 異文化間教育の対象の拡大の理由 .....	16
2.1.1 江淵の議論について .....	16
2.1.2 異文化に接触できるか否かの区別について .....	21
2.2 異文化間教育と国際理解教育の区別について .....	22
2.3 異なる文化集団の「相互作用」 .....	24
2.4 近隣諸国における文化の「相互作用」 .....	26
2.5 文化間の「相互作用」の視点をもって行う小学校の教育活動.....	29
3 日中小中学校における国際交流活動に関する研究.....	33
3.1 中国における国際理解教育 .....	33
3.2 中国の小中学校における国際交流活動の課題 .....	38
3.3 日中小中学校の間の国際交流活動について .....	45
3.4 日中小中学校の間で互いに理解・交流の必要性.....	47
3.4.1 日本と中国の交流に関する考察 .....	47
3.4.2 現時点の日中関係に関する調査 .....	50
3.4.3 小学校における日中間文化理解の必要性と課題.....	54
4 漢字と日中の異文化理解.....	58
4.1 中国における漢字の歴史と発展.....	58
4.2 日本における漢字の歴史と発展.....	61
4.3 漢字の特長 .....	63
4.3.1 共通性と相違性という二重性.....	63
4.3.2 日中間で理解しあう動き－漢字に焦点を当てて.....	69
5 日中小学校における漢字に関する教育 .....	72
5.1 中国の小学校における漢字に関する教育.....	72
5.2 日本の小学校における漢字に関する教育.....	76

5.3	まとめ	78
6	インターネットや情報通信の到達点	79
6.1	中国におけるインターネットの発展状況	79
6.2	日本における通信情報技術活用の国際交流学習	83
6.3	通信技術を利用した交流授業の配慮点	86
7	異文化間交流授業の開発	89
7.1	漢字の創造活動のインスピレーション	89
7.2	授業プログラムの開発	94
7.2.1	目的	94
7.2.2	方法	95
7.2.3	授業プログラムの準備・構造	95
7.2.4	授業プログラムの計画書	99
8	授業プログラムの実施	102
8.1	日本側の実施状況	102
8.1.1	第一時間目指導案	102
8.1.2	第二時間目指導案	109
8.1.3	第三時間目指導案	112
8.1.4	第四時間目指導案	117
8.1.5	第五時間目指導案	120
8.2	中国側の実施状況	125
8.2.1	第一時間目	126
8.2.2	第二時間目	129
8.2.3	第三時間目	133
9	授業全体の考察	136
9.1	授業の前後での相手に関する意識	136
9.2	漢字への意識の変化	140
9.3	文化間の「相互作用」の教育活動の有効性	141
9.4	課題	142
10	漢字の活用の在り方	146
10.1	漢字とアンチバイアス教育	146
10.2	漢字を作る活動と創造	147
11	研究の課題	152
11.1	文化間「相互作用」の限界	152

11.2 その他.....	154
12 終章.....	156
12.1 これまでの道のりと本研究の成果.....	156
12.2 展望.....	157
謝辞.....	160
資料・参考文献.....	161
付録1 実践授業のアンケート調査表（中国側）.....	167
付録2 実践授業のアンケート調査表（日本側）.....	175

## 初出論文一覧

本論文の章の初出は以下のとおりである。

序 章:書き下ろし

第 1 章:書き下ろし

第 2 章:書き下ろし

第 3 章:陳卓君 (2015)「中国の小学校における漢字交流授業の開発」藤川大祐編『社会とつながる学校教育に関する研究 (3)』(千葉大学大学院人文社会科学研究所プロジェクト報告書 第 293 集)、pp.27-36 (査読なし論文) を加筆修正している。

第 4 章:陳卓君・土田雄一 (2015)「日中小学校における国際理解教育の授業開発」『千葉大学教育実践研究』第 18 号 (千葉大学教育学部附属教員養成開発センター)、pp.35-46 (査読なし論文) のうち筆者執筆分についてを加筆修正している。

第 5 章:陳卓君 (2014)「中国の小学校における漢字教育に関する考察—漢字政策及び教材の視点から—」藤川大祐編『社会とつながる学校教育に関する研究 (2)』(千葉大学大学院人文社会科学研究所プロジェクト報告書 第 277 集)、pp.7-13 (査読なし論文) を加筆修正している。

第 6 章:陳卓君 (2013)『中国の重慶における国際交流の開発—情報通信技術を利用した試行的な取り組み—』平成 24 年度千葉大学大学院教育学研究科修士論文を加筆修正している。

第 7 章:書き下ろし

第 8 章:陳卓君・土田雄一 (2015)「日中小学校における国際理解教育の授業開発—漢字文化の学習を通じた道徳教育のアプローチ—」『千葉大学教育実践研究』第 18 号 (千葉大学教育学部附属教員養成開発センター)、pp.35-46 (査読なし論文)

のうち筆者執筆分についてを加筆修正するとともに、陳卓君（2015）「中国の小学校における漢字交流授業の開発」藤川大祐編『社会とつながる学校教育に関する研究（3）』（千葉大学大学院人文社会科学研究所プロジェクト報告書 第293集）、pp.27-36（査読なし論文）の内容を加え、さらに陳卓君（2016）「国際親善の視点での道德教育における協同学習を通じた創造力の育成：小学校における『漢字作り』授業の考察から」『グローバル人材育成教育研究』第3巻第2号（グローバル人材育成教育学会）、pp.41-49（査読あり論文）を加え、加筆修正している。

第9章：陳卓君・土田雄一（2015）「日中小学校における国際理解教育の授業開発—漢字文化の学習を通じた道德教育のアプローチ—」『千葉大学教育実践研究』第18号（千葉大学教育学部附属教員養成開発センター）、pp.35-46（査読なし論文）のうち筆者執筆分についてを加筆修正するとともに、陳卓君（2015）「中国の小学校における漢字交流授業の開発」藤川大祐編『社会とつながる学校教育に関する研究（3）』（千葉大学大学院人文社会科学研究所プロジェクト報告書 第293集）、pp.27-36（査読なし論文）の内容を加え、さらに陳卓君（2016）「国際親善の視点での道德教育における協同学習を通じた創造力の育成：小学校における『漢字作り』授業の考察から」『グローバル人材育成教育研究』第3巻第2号（グローバル人材育成教育学会）、pp.41-49（査読あり論文）を加筆修正している。

第10章：陳卓君（2016）「国際親善の視点での道德教育における協同学習を通じた創造力の育成：小学校における『漢字作り』授業の考察から」『グローバル人材育成教育研究』第3巻第2号（グローバル人材育成教育学会）、pp.41-49（査読あり論文）を加筆修正している。

第11章：書き下ろし

終章：書き下ろし

## 序章 はじめに

筆者は15歳頃の時2002年、筆者の故郷である中国の重慶市で開催されたサッカーの日本対イラン戦を観戦した。試合中、観客のほとんどがイランチームを応援し、「日本隊去死！」（日本チーム死ね！）という声も聞こえた。さらに、日本チームを応援する日本人数名が、中国人から暴行を加えられた。このとき、筆者は日本及び日本人に対して悪口を吐き、理性を失って暴力に至る中国人が多数存在するということを初めて感じた。そして、次のような疑問が心に浮かんだ。

「たとえ両国間で対立があるとしても、なぜこれほどまでに日本のことを嫌うのだろうか。」

筆者は大学時代に、日本語についての講演を聴く機会があった。講師は「現代、中国で使われている多くの言葉の中には、日本から導入されたものが多く存在している」と話していた。筆者は小学校から高等学校における中国の国語の授業で、中国語や漢字を勉強することを通して、中国語及び漢字の起源と発展についての具体的な知識を勉強したことはなかった。そのため、中国語の中に日本から導入されたものがあると考えたことは一度もなく、中国語はすべて中国人が作ったものだと思っていた。今回の研究の中で、筆者が資料を調べたところ、漢字が日本に渡来したのは古く、諏訪（2006）によれば、「漢字が日本に渡来したのはかなり古く、一説によると後漢の頃であったが、その頃は日本の文化水準は文字として受け入れるところまで高まっていた。しかし、律令制度が成立以降、特に、朝鮮半島や中国からの渡来人の多くは、成熟していない日本人に替わって多くの書を残し、文字文化の開発と創造に寄与した」<sup>1</sup>ということである。また、山口（1996）によると、「後漢の光武帝から奴国王に賜った金印には、漢字が刻されています。（中略）三世の女王卑弥呼には、長文の詔書が下されています。倭人のなかには、こうした文章に精通し、さらに答謝の文章を作ることのできた役人がいたことでしょう。また魏志倭人伝には、倭国の地名や人名を、当時（三世）の音にしたがって、漢字でうつしています」<sup>2</sup>ということである。そして、唐の時代、日本にもうまく使用できるように、遣唐使が漢字を研究し、改善した。漢字は確かに日本の文化や日常生活などの方面に大きな影響を与えたが、それはただ古代の話であった。時代が変わるとともに、日本と中国の国情も変わった。近代になり、日本は中国よりも早く欧米諸国から西洋文明を取り入れ、大

<sup>1</sup>諏訪共香「異文化コミュニケーション:漢字の発達と社会文化的遺伝子」、龍谷大学『龍谷大学国際センター研究年報』第15号、2006年、p.182。

<sup>2</sup>山口修『日中交渉史—文化交流の二千年』東方書店、1996年、p.23。

量の新しい漢字の単語を創った。そのため、日本から中国へ、漢字を用いた文化の逆輸出が行なわれた。史(2000)は、中国における日本語からの漢字語を、「(1) 漢字の意味を使用した漢字語。(2) 漢字の意味を使わず、形だけを借りた漢字語。

(3) 日本語を中国語に音訳する詞」<sup>3</sup>に分類している。日本から輸入したこのような言葉は、日常用語として中国で幅広く使用されている。

大学卒業後、筆者は日本に留学した。留学してから、漢字が使われる場面を多く見てきた。たとえば、日本の書道では漢字を書くことが多い。また、テレビでは、高学歴芸人などの出演者に一般教養や入学試験の問題を出題するクイズ番組があり、漢字をテーマとした問題も多く出題されている。日本漢字能力検定協会では「今年の漢字」という活動も実施されている。

以上のようなことから、「本当の日本の姿を中国人はどのくらい知っているのか」、「中国人は自国の漢字文化についてどのように理解しているのか」という疑問が湧いてきた。中国は、経済発展の初期段階で、国民の生活レベルや国内総生産が重視されていたが、国民の文化教養に対しては重視されていなかった。しかし最近、経済発展を続ける中で、文化についても重視されるようになってきた。日本でも隣国である中国との文化交流への関心が高まっている。このような時にこそ、両国に人々が「日本のこと」と「中国のこと」を同時に知ったり理解したりできる方法を考える必要があるのではないだろうか。

そこで、筆者は修士課程における「中国の重慶における国際交流の開発—情報通信技術を利用した試行的な取り組み—」<sup>4</sup>という研究の中で、国同士が互いに良好な関係を築くために重要なのは、直接に外国の人や物事と接触し、自分の目できちんと確認し、外国と自分自身のことを同時に知ることであるという意識を持ち、日本の小学生と中国の小学生をつなぐ国際交流授業を行った。具体的には、二つの国のビデオ鑑賞—興味を持ち—楽しく生活について交流・学習(する)という学習のデザインを工夫し、四時間で構成された次のようなカリキュラムを作成した。一時間目は「中国・重慶<sup>5</sup>、日本・千葉について知ろう」、二時間目は「『学校の1日』の発表の準備をしよう」、三時間目は「『学校の1日』を発表しよう、

<sup>3</sup>史有為『漢語外来詞』商務印書館、2000年、pp.172-177。(原文は中国語、引用者が翻訳した)

<sup>4</sup>陳卓君『中国の重慶における国際交流の開発—情報通信技術を利用した試行的な取り組み—』平成24年度千葉大学大学院教育学研究科修士論文、2013年。

<sup>5</sup>重慶は、東経105°17′-110°11′、北緯28°10′-32°13′にあるチベット高原と長江中下流平原の間の過渡地帯に位置し、また、重慶を中心とする古い巴渝エリアは巴渝文化の発祥地である。人口は約3000万、一つの中国の古い工業基地であり、自動車とオートバイ、化学と医薬品、建築建材、食品及び観光という五つの支柱産業を拡大し、情報工程、生物工程、環境保護工程を代表としてハイテク産業の発展を加速している。重慶市人民政府「重慶概況」、<http://jp.cq.gov.cn/aboutchongqing/> (2016年9月30日最終確認)

相手の質問に答えよう」、四時間目は「ショータイムと一緒にやりたいことをやろう」である。授業は全て無料通話アプリケーション Skype を用いて両国の学校を中継して行った。この交流授業を通して互いの学校生活などについて知ることにより、両国の小学生の国際交流についての興味を高めることができ、授業の有効性が示された。しかし、修士課程で行った授業の課題として、授業計画や扱う内容が、表面的であることが指摘された。たとえば、授業では日本には寿司や桜が好きな人が多いことや、神社が多いことなどを取り上げたが、なぜ日本人は寿司や桜が好きなのか、なぜ日本には神社が多いのか、ということまでの背景をより深く理解することで、中国と日本とが今後どのように理解し合い、交流していけば共存できるかということについても、考えることができるようにしたいと思うようになった。そのための新たな授業プログラムを生み出していく必要があると考える。

筆者が修士論文で行った日本と中国の子ども同士の間で理解を促進する研究は、異文化間教育の研究として検討される必要がある。異文化間教育とは異文化間教育学という学問分野で扱われている営みであり、「異文化間教育とは、二つ以上の相異なる文化の狭間で展開する教育ないし人間形成の過程・活動を意味している」<sup>6</sup>と定義されている。異なる文化集団の子どもたちの相互理解を促進しようとする意図的教育活動は、現在、異文化間教育の重要な内容となっている。こうしたことより、筆者が修士論文で行った国際交流活動は、異文化間教育として検討されるべきものだと言える。

異文化間教育学とは、多民族社会を強調し、単一文化社会や、多文化社会がまだ形成されていない地域の子どもたちが明確には含まれていないと考えられる。また、日本と中国のような文化属性が近い国の間での異文化間教育の在り方の研究が不足している、以上の理由で異文化間教育を扱う必要がある。なお、異文化間教育について詳しい内容は第1章で述べる。

そこで本研究では異なる文化集団の子どもたちの相互理解を促進するため、その意識と関連する異文化間教育の理論構造を把握し、学校現場について考察し、授業実践を開発する。このような日本と中国の共通の文化を用いる授業設計は、文化属性が近い子どもたちの間の教育活動のモデルとすることを目指す。

以上の内容を考えて、本研究全体を、以下のように構成する。

第1章では、異文化間教育の研究の対象について概観する。第2章では、異

---

<sup>6</sup>佐藤郡衛『異文化間教育—文化間移動と子どもの教育—』明石書店、2014年、p.18。

文化間教育の対象を拡大する理由を述べる。第3章では、日本と中国の小中学校における国際交流活動に関する活動を調査し、問題点や成果をまとめる。また、日中関係の相互認識を調べ、中国と日本の小学校段階の国際交流の重要性を明らかにする。第4章では、日本と中国の漢字の歴史や発展を整理し、二つの国の漢字の字形の特徴を分析する。また、日本と中国の漢字の共通点と相違点、またその中の関連性を明らかにする。さらに、漢字を教材として日中間の小学校で交流することの長所を整理する。第5章では、中国と日本の小学校における漢字の教育を概観し、特に漢字に関する政策の視点から課題を明らかにする。第6章では、情報通信技術の発展状況を調査し、特に情報通信技術を用いた教育方法や教育実践を調査し、分析する。第7章では、異文化間教育授業プログラムの開発、その授業プログラムの準備や構造を明らかにする。第8章では、授業プログラムの実施状況について説明する。第9章では、授業全体の視点から、日本と中国それぞれで行った授業の考察を行い、またその結果を比較・分析し、授業の有効性や課題を明らかにする。第10章では、研究実践を踏まえて漢字における異文化間教育の問題について再検討を行う。第11章では研究の課題をまとめる。第12章では、文献研究と実践研究の方法と成果をまとめ、展望を述べる。

## 1 異文化間教育における研究対象

世界的規模の国際化の進行とともに、モノや情報だけでなく、ヒトも国境を越えて移動することが増え、異民族・異文化との接触の機会が増大した。たとえば、日本の場合、1960年代から、生まれ育った国ではない国に暮らす子どもたちや海外での生活を経験し帰国する子どもたちが増加した。このように、複数の異なる文化を経験しながら成長する青少年が増えている。日本においては、生まれ育った国ではない国に暮らす子どもたちを「海外子女」と呼び、海外での生活を経験し帰国する子どもたちを「帰国子女」と呼ぶことがある。1960年頃より、このような青少年に関する問題を研究する教育が、日本において「異文化間教育」と呼ばれるようになった。

これまでの異文化間教育における研究対象まず検討しよう。特に、日本とドイツの二つの国において「異文化間教育」(Interkulturelle Erziehung)という呼び方が使われており、研究も盛んである。そのため、これから日本とドイツを中心に異文化間教育の研究対象について考察していく。

### 1.1 日本における異文化間教育の研究対象について

日本では、1960年代から企業の海外進出に伴い、日本以外の国で暮らす子どもたちや海外での生活を経験し帰国する子どもたちが増加した。こうした子どもたちを対象とする教育は当時、「異文化間教育」とは呼ばれず、「海外・帰国子女教育」と呼ばれた。「海外・帰国子女教育」に関する研究の始まりを特定するのは難しいが、後に異文化間教育学会の会長に就任する江淵(2007)によれば、「桐朋教育研究所が行った「在外邦人子弟・子女の教育に関する研究(その一 帰国後の教育問題)」(『桐朋教育研究所所報』八号、一九六五)が、その最初であったと考えられる」<sup>7</sup>。江淵(2007)は、「日本における新しい教育問題として、『海外・帰国子女教育問題』が知られるようになったのは、一九六〇年代に入ってからである。第二次世界大戦後の経済復興を経て、企業・商社・銀行などの海外進出が進展するようになった時期と対応している。七〇年代に入ると、海外に駐在する社員が急増し、その子どもの教育問題が広く社会的に認識されるようになった」<sup>8</sup>と述べている。このように、海外・帰国子女に対する教育に関する研究は1960年代から現れ始めたということが通説である。しかし、1960年代より前に異文化に関わる教育に関する研究が全くなかったとは言えない。

<sup>7</sup>江淵一公『異文化間教育研究入門』玉川大学、2007年、pp.45-46。

<sup>8</sup>同上、p.41。

1960年以前の日本の状況をみてみよう。

たとえば、江原（2007）<sup>9</sup>によれば、1877年に朝鮮（当時）の釜山では1876年の日朝修好条規に基づき、はじめて日本専管居留地が設置された。これを契機として、同年、釜山に日本人教育機関が設立された。また、1880年に中国の上海にも日本人教育機関が設立されている。当時の日本は「植民主義期」にあり、朝鮮や中国における日本人に対する教育は、「海外子女教育」ではなく「在外子弟教育」、「移植民教育」などと呼ばれた。呼び方は様々であるが、海外に住んでいる子どもたちに教育をするという状況は同じであり、現在の異文化間教育の一部の内容と一致していると考えられる。また、シンガポール日本人学校のホームページ<sup>10</sup>によれば、1912年には、シンガポールで日本人学校が作られている。当時、この学校は「日本人学校」とは呼ばれず、「補修校」と呼ばれた。この学校は海外に住む日本人のために創立した学校であることから、海外子女を対象とする教育実践は少なくとも1910、1920年代から始まったと考えられる。さらに、タイのバンコクにある泰日協会学校（バンコク日本人学校）<sup>11</sup>は1926年に設立されており、当然ここでの教育は海外子女を対象とした教育であった。

以上のように、1870年代以降、海外子女に対して特別な教育がなされるようになっていた。そしてこれらの教育が異文化間教育の端緒となったと考えられる。なお、この年代の異文化間教育の研究対象は主に海外在住の子どもたち、すなわち海外子女であった。

1960、1970年代になると、海外子女のみならず、帰国子女も教育問題の対象として認識されるようになった。1960年代は、日本の経済、政治、文化諸分野における国際活動の活発化に伴って、海外・帰国子女は大幅に増加し、こうした子どもたちに対する教育は社会的な問題となっていた<sup>12</sup>。当時の主な研究対象は、母国を離れて海外で生活する子どもたちや海外から帰国した子どもたちであった。

その後、1981年、江淵らにより異文化間教育学会が設立された。この学会の趣旨は、「異質な文化の接触によって生ずるさまざまな教育の問題を学問対象と

---

<sup>9</sup>江原裕美「日本における外国人受け入れと子どもの教育—ブラジル人を中心に—」帝京大学第2外国語部会『帝京大学外国語外国文学論集』第14号、2007年、p.21。

<sup>10</sup>シンガポールの日本人学校について、以下のアドレスを参考にした。「シンガポール日本人学校沿革史」、<http://www.sjs.edu.sg/history>（2016年9月30日最終確認）

<sup>11</sup>以下のアドレスを参考にした。「バンコク校概要」、<http://www.tjas.ac.th/bkkgaiyo>（2016年9月30日最終確認）

<sup>12</sup>この部分の内容について以下の文献を参考にした。前出、佐藤『異文化間教育—文化間移動と子どもの教育』p.48。

して取り上げ、その研究を促進しようとするところにあります」<sup>13</sup>とされている。そして、異文化間教育に関連している領域の研究者や実践者たちはこの学会に結集するので、本格的な海外・帰国子女のような教育問題に関する研究の体系化や概念化はここから試みられたのである。また、『異文化間教育』という学会誌第1号には、海外・帰国子女に関する研究だけではなく、在日留学生を対象とする研究も扱われている。

1990年代の研究に関して、佐藤（2014）は、「日本の学校に就学する外国人の子どもは、在日韓国・朝鮮人をはじめとした定住外国人の子どもたちだが、一九九〇年代には、教授言語である日本語が全く話せない子どもが急増し、こうした子どもたちを対象にした研究が展開されるようになる」<sup>14</sup>と述べている。つまり、1990年代において、異文化間教育の対象に外国人の子どもが加わった。さらに、1990年代において、異文化間教育の研究は、外国人の子どもたちを中心としていたことがうかがえる。しかし実際には、この時代より前の1890年代前後にも外国人の子どもたちを対象とする教育に関する研究がすでに現れている。

たとえば、朝鮮では、1876年の日朝修好条規に基づき、出移民が現れるだけではなく、江原（2007）は「他方、入移民についてみると日本人の朝鮮半島進出、続く韓国併合で土地を追われた朝鮮人が1880年代から次々に来日するようになる。また中国人は開国当初から欧米人の使用人などとして少数ながら来日していた」<sup>15</sup>と述べている。このような朝鮮人や中国人の子どもたちが日本で受ける教育についての問題も当然現れていた。その具体的な問題の例として、江原（2007）は「朝鮮人の処遇については、『内鮮一体』『一視同仁』と言われた。しかし実際には朝鮮人労働者は日本人労働者と差別され、苦境の中で暮らしており、民族のことはや名前、文化は奪い去られたのであった」<sup>16</sup>と述べている。

以上のような背景を踏まえれば、1890年代前後が、政府による外国人教育の始まりであったと言える。

2000年以降の異文化間教育が対象とする範囲と研究の状況を概観しよう。現在、異文化間教育の研究領域について、学会のホームページには、「本学会においては、例えば、海外・帰国子女教育、外国語教育、外国人への日本語教育、在

---

<sup>13</sup>「異文化間教育学会の趣旨」、異文化間教育学会ホームページ  
<http://www.intercultural.jp/about/index.html>（2016年9月30日最終確認）

<sup>14</sup>前出、佐藤『異文化間教育—文化間移動と子どもの教育』p.21。

<sup>15</sup>江原裕美「日本における外国人受け入れと子どもの教育—ブラジル人の場合を中心に—」帝京大学第2外国語部会『帝京大学外国語外国文学論集』第14号、2007年、P.20。

<sup>16</sup>同上、P.22。

日外国人子弟教育、教育・研究の国際交流(教師、学者、学生の派遣や留学)、海外移住者の教育、国際理解教育、異文化間教育担当者の教育訓練の制度・方法、諸外国における多文化・多言語教育、異文化適応、異文化間教授＝学習過程、二言語教育(バイリンガル教育)、アイデンティティ、異文化間コミュニケーション等、諸問題に関する論理的・実践的な研究が進められています<sup>17</sup>と記述されている。このように、異文化間教育の研究は大変多岐にわたっている。

しかし、異文化間教育の研究対象は、海外・帰国子女から外国人の子どもたちへと拡大しているが、このような特別な対象を主な研究対象としているとすることは変わらない。

## 1.2 ドイツにおける異文化間教育の研究対象について

日本の異文化間教育は自国の子どもたち(海外に暮らす子女と帰国した子女)という対象を出発点としていたのに対し、ドイツの異文化間教育はドイツで暮らす外国人子女を対象として始まっている。中山ら(2001)は、「第二次大戦後、外国人労働者や難民の流入によりドイツの外国人数は著しく増大した」<sup>18</sup>と述べている。また、1964年、ドイツの常設文部大臣会議は「外国人子女のための授業」という勧告を発表した<sup>19</sup>。この意味で、ドイツの異文化間教育研究は、最初は「外国人教育」であった。生田(1996)は、「外国人教育学の特徴は、『外国人の子どもにはドイツ語能力などが不足している』という欠損的発想による補償教育、適応・同化、文化的アイデンティティを重視の3点にまとめることができる」<sup>20</sup>と述べている。

ドイツの研究者H・マールブルガー(Helga marburger)(1991)<sup>21</sup>によれば、1980年代、ドイツでは当時の「外国人教育」に対する反省や批判が始まった。中山ら(2001)によれば、H・マールブルガーによる主な批判の内容は以下であった。

### (1) 「外国人教育」が、外国人生徒を言語面や行動面で「欠損」したものと

<sup>17</sup>前出、異文化間教育学会ホームページ。

<sup>18</sup>中山あおい・山田容子「ドイツー異文化間教育の背景と実践」、天野正治・村田翼夫『多文化共生社会の教育』玉川大学出版部、2001年、p.244。

<sup>19</sup>この部分の内容について中山ら(2001)の文献を参考にした。同上、p.246。

<sup>20</sup>生田周二「ドイツにおける異文化間教育の諸相ー多文化社会への不安と展望ー」鳥取大学教育学部附属教育実践研究指導センター『鳥取大学教育学部教育実践研究指導センター研究年報』第5号、1996年、p.12。

<sup>21</sup>Helga, Marburger. Von der ausländerpädagogik zur interkulturellen erziehung, Schule in der multikulturellen Gesellschaft: Ziele, Aufgaben und Wege interkultureller Erziehung, Frankfurt am Main: IKO-Verl. f. Interkulturelle Kommunikation, 1991:23-30。

みなし、ドイツ人生徒と同じようにさせるために、その不足を補おうとする特別の教育であり、最終的には外国人生徒を区別したり、周辺に追いやることにつながる。

- (2) 外国人問題の経済的、政治的、歴史的な条件を除外して、外国人生徒のかかえる問題を個人の問題と見なすこと。
- (3) 教育対象からドイツ人が外されていること。<sup>22</sup>

以上を受け、中山ら（2001）は様々な研究者の見解を踏まえ、その批判について「これらの見解から、文化的に多元な社会においてドイツ人生徒も外国人生徒も含めたすべての構成員が『共生』するために、偏見などの『障害を除去』し『他の文化』を互いから学び合うという異文化間教育の構想が浮かび上がる。また、それが学校教育のみならず共同体という広い視野からとらえられている点が注目される」<sup>23</sup>と述べている。これらの批判を契機とし、ドイツは「外国人教育学」から「異文化間教育学」に転換し、「異文化間教育」が登場した。

1990年代、ドイツでは、異文化間教育の対象と内容が拡大された。中山ら（2001）は、「また、冷戦の終結とともにロシアや東欧に移住していたドイツ人とその家族、いわゆる帰国移住者（Aussiedler）がドイツに帰還していることも、ドイツ社会の多様さを増す一因となっている。（中略）そのような状況で、外国人生徒や帰国移住者の子どもたちをドイツの学校に編入するための教育措置が必要となる一方で、彼らのもたらす「異文化」といかに向き合うかという問題が生じている」<sup>24</sup>と述べている。1996年10月、ドイツの常設文部大臣会議は「学校における異文化間教育」という勧告を発表した。この勧告は、中山ら（2001）によれば、異文化間教育の内容について「異文化間教育は『諸教科を網目状に結合する、問題に方法づけられた、行為的な学習という教授学原理に従う』とあり、社会科やドイツ語、外国語以外にもさまざまな教科によって取り込まれるべきとされている」<sup>25</sup>とされる。また、「それ<sup>26</sup>は、すべての生徒における、人間らしさ（Humanität）の倫理的原則と、自由と責任、連帯と諸国民の理解、民主主義と寛容といった諸原理に義務づけられた考え方や行動様式の発展を要求する」<sup>27</sup>

---

<sup>22</sup>前出、中山ら「ドイツ—異文化間教育の背景と実践」pp.249-250。

<sup>23</sup>同上、p.250。

<sup>24</sup>同上、p.244。

<sup>25</sup>同上、p.251。

<sup>26</sup>「それ」は、異文化間教育を指す。

<sup>27</sup>江原武一『多文化教育の国際比較—エスニシティへの教育の対応』玉川大学出版部、2000年、p.135。

と江原（2000）がまとめている。

この勧告の内容を踏まえて、ドイツにおいて異文化間教育の実践が次々に行われるようになった。

たとえば、郭（1999）は、科目ごとの教育方法について、「1、歴史教育では、異なる視点から事件の発生を明確にし、世界史側面に焦点を置く。2、地理教育について、文化的要因により形成された地域の状況について検証する。3、政治面と生活面との対立に対して、社会科教育は多様な解決方法および文化の制約をさぐるべきである。4、宗教や倫理教育は、世界の宗教の共通性と差異性の学習を重視する。5、その他、たとえば数学について、各計算文化の起源および文化の多様性を明らかにする。音楽、芸術教育は作品の表現の仕方や背景、解釈についての理解を支援する」<sup>28</sup>と述べている。また、教師に対する要求について、江原（2000）は、「授業および授業外において、教師は外国人との交わりにおける模範機能を要求される。外国人生徒もドイツ人生徒も、同じ仕方で、価値評価、信頼、慈しみを体験しなければならない」<sup>29</sup>と述べている。つまり、ドイツの異文化間教育は、各教科など、多方面で実践されるものであることがわかる。ドイツの異文化間教育は、学習者が相手との相違点を認め、「異質」に対して寛容になる能力を育成することを目指す。そして、社会の複雑な国際化の過程を背景にした自文化の個別性という文化的制約を超えて、異文化接触におけるダイナミズムを経験し、人間性・人権や民主主義といった普遍的な次元へと学習者を導くことが必要とされていることがわかる。これらの目標や教育実践から見ると、ドイツは移民や外国人が多く、多民族・多文化社会の国家の属性が強いため、ドイツにおける異文化間教育は、単純に帰国などの指導ではなくて、もっと広い範囲を対象とする異文化間教育である。

---

<sup>28</sup>郭雯霞「試述德国異文化間教育的展開」『山西大学師範学院学報』第3期（総第48期）、1999年、p.61。（原文は中国語、引用者が翻訳した）

<sup>29</sup>前出、江原『多文化教育の国際比較—エスニシティへの教育の対応』p.137。

## 2 異文化間教育における研究対象の拡大

### 2.1 異文化間教育の対象の拡大の理由

日本とドイツにおける異文化間教育の研究対象から見ると、今までの異文化間教育は、基本的に複数の文化を経験した子どもたちと、多民族・多文化社会における子どもたちを対象としている。しかし、異文化間教育の対象はもっと広げられる必要がある。異文化間教育の対象が広げられる必要がある理由について、以下の二つの議論から述べる。

#### 2.1.1 江淵の議論について

はじめに、異文化間教育においてよく引用される江淵（1997）の議論を検討しよう。江淵（1997）は、異なる文化との接触の仕方という現象から「文化転換型」「文化交差型」「文化分離型（異文化回避型）」「相互作用型」という異文化間教育の四つ類型を整理した。以下、江淵（1997）の類型について述べる。

一つ目は「文化転換型」である。江淵（1997）は「『文化転換型』異文化間教育は、ある文化のもとである年齢まで育った後、別の文化に移動して異なる教育を受ける子どもたちや青少年の場合に特徴的な異文化間教育の形態である」<sup>30</sup>と述べている。たとえば、帰国子女は別の国の文化を身につけて育てられた後、母国に移動し、また新たな文化環境の中で教育を受ける。「文化転換型」の教育対象は主に海外・帰国子女、留学生であり、また「カルチュア・ショック」「文化変容」などの概念は、「文化転換型」の教育対象に関連している問題を分析・考察する上で有用な概念である。

二つ目は「文化交差型」である。「文化交差型」は、子どもたちや青少年が自分の所属する集団の文化と社会的主流文化をほぼ同時に学び、複合的な文化形態の中で成長する類型である。たとえば、在外日本人の場合、江淵（1997）は「（前略）在外日本人のための教育施設である補習授業校のような、いわゆる『ウィークエンド・スクール』（土曜学校・日曜学校）にも通い、在留同胞人のネットワークによって営まれる各種の行事や活動への参加等を通じて母国の情報を獲得し、その言語的、文化的影響を多少とも受けながら育つという形になっていることが多い」<sup>31</sup>と述べている。「文化交差型」の教育対象は、主に移民子女や少数

<sup>30</sup>江淵一公『異文化間教育学序説—移民・在留民の比較教育民族誌的分析（第2版）』九州大学出版会、1997年、p.42。

<sup>31</sup>同上、p.45。

民族の子どもたちである。

三つ目は「文化分離型（異文化回避型）」である。「文化分離型（異文化回避型）」は、子どもたちや青少年は異文化を持つ社会に“移行”しながらも、異文化との交流・接触を回避する形態である。また、「文化分離型（異文化回避型）」の教育の対象は移民（特に永住志向の移民）、少数民族および宗教的な理由から他の文化集団との接触を拒否している自律的、閉鎖的なエスニック・コミュニティの児童・生徒である。

四つ目は「相互作用型」である。「相互作用型」は“意図的”または“計画的”に創り出された相互作用であり、異なる民族集団の間の相互理解を促進する異文化間教育の形態である。江淵（1997）によれば、「文化転換型」「文化交差型」

「文化分離型（異文化回避型）」は「（前略）いずれの場合も、個人がそれまでに内面化した文化と新しい文化的環境との間における、積極的あるいは消極的な、何らかの形の相互作用関係（葛藤・摩擦、共存・調和、統合、あるいは回避など）において展開する点である」<sup>32</sup>と述べている。しかし、異文化間の接触において、必ず積極的あるいは消極的な相互作用関係が発生するとは言えない。たとえば文化分離型（異文化回避型）の一例として、東南アジアの主要都市には、日本人会などの組織がある。このような組織の下子どもたちは外国の文化に接触する環境があまりなく、日本の学校と同じような学習環境で成長し、日本で学ぶ子どもたちと同様の内容を学習している。こうした子どもたちは異文化にほとんど接触しておらず、積極的な相互作用も、消極的な相互作用も、どちらも行っていない。

また、江淵（1997）は「相互作用型」を第四類型として選び出した理由について、日本の異文化間教育の研究においては、異文化理解教育・国際理解教育への関心が高いことを挙げている。こうした教育はアメリカの「多文化教育」における、計画的に異なる文化集団の子どもたちの相互理解を促進するという特徴を参照している。アメリカ、カナダ及びオーストラリアのような多文化社会の地域ではこうした教育は「多文化教育」とされている。このような地域においては、人口構成・民族の多様性のみではなく、出身国が異なるという意味でも、文化的背景には多様性がある。このような国の「多文化教育」では、「移民の子どもたちの教育」の研究から始まっており、「海外子女・帰国子女の教育」を出発点とした日本、「外国人教育」を出発点としたドイツにおける異文化間教育とは違っている。つまり、「多文化教育」と「異文化間教育」の一つの相違点は、社会的

---

<sup>32</sup>同上、p.48。

背景である。「多文化教育」は、移民国家の視点から発展してきた。しかし、中国や日本などは移民国家ではなく、国民の構成は相対的に安定しているので、ここでの異文化に関わる子どもへの教育は「異文化間教育」の視点から取り扱うべきと考えられる。佐藤によれば、「多文化教育」は「異文化間教育」と区別されるもので、「異文化間教育」は「多文化教育」の成果を取り入れて発展した。

多文化教育は、多様性という特徴を持っている。江淵（1994）は「『多文化教育』は英語の“multicultural education”の訳語であるが、この“multicultural education”という語は、“ethnic studies”[（単一的または並行的）民族研究]、“multiethnic education”[多民族教育]、“intercultural education”[異文化間（相互理解）教育]、“bilingual/bicultural education”[二言語・二文化教育]等々、多様な関連用語を含む、きわめて包括的な言葉である」<sup>33</sup>と述べている。これらの語は用いられる文脈によって相互に重複したりずれたりしていると考えられる。また、バンクス（1995）は、「多文化教育は、あらゆる社会階級、人種、文化、ジェンダー集団出身の生徒たちが、平等な学習機会をもてるように学校や他の教育機関をつくり変えるための教育改革運動である」<sup>34</sup>と述べている。そして、異文化間教育の内容の中には、「異質な複数の文化の共生」がある。佐藤（2014）は「異文化間教育学でも、多文化が共生する公正な社会をどのように構築するかという課題を追求しており、（中略）さまざまなカテゴリーによって共存する多様な文化を尊重し、より公平な社会的処遇を求める動きもみられる」<sup>35</sup>と述べている。以上のように、多文化教育は新しい移民国家（カナダ、アメリカなど）で行われ、異文化間教育は歴史的に長い国家（ドイツ、日本）で行われている。多文化教育と異文化間教育は、異なった社会背景の下で現れた教育理論である。しかし、現代のグローバル化の発展に伴い、人々は国境や宗教を越えて同じ社会で生活するようになっているため、多文化教育も、異文化間教育も、多文化共生という同じ課題に直面している。現在、異文化間教育は「社会的公正さ」の視点も含んでおり、多文化教育の内容と異文化間教育の内容は一部共通している。

ここまで論じてきた江淵（1997）による異文化間教育の四類型は、表1のように整理される。

<sup>33</sup>江淵一公「多文化教育の概念と実践的展開—アメリカの場合を中心として—」日本教育学会『教育学研究』第61巻第3号、1994年、p.223。

<sup>34</sup>Banks, J.A. & Banks, C.A.M. Curriculum Theory and Multicultural Education, Handbook of Research on Multicultural Education, New York: Macmillan, 1995:6。（原文は英語、パイチャゼ、スヴェトラナが翻訳した。）翻訳文出典：パイチャゼ、スヴェトラナ「多文化教育の意義についての再考察」北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院『国際広報メディア・観光学ジャーナル』第12期、2011年、p.82。

<sup>35</sup>前出、佐藤『異文化間教育—文化間移動と子どもの教育』p.187。

表 1 異文化間教育の四類型

	意味	研究対象
文化転換型	ある文化のもとである年齢まで育った後、別の文化に移動して異なる教育を受ける子どもたちや青少年の場合に特徴的な異文化間教育の形態。	海外・帰国子女、留学生
文化交差型	移民子女や少数民族の子どもたちは自分の所属する集団の文化と社会的主流文化ほぼ同時に学ぶ。“交差”する形になる異文化間教育の形態。	移民子女、少数民族の子ども
文化分離型 (異文化回避型)	子どもたちや青少年は異文化を持つ社会に“移行”しながらも、異文化との“交差”による直接接触を回避する形態。	移民（特に永住志向の移民）、少数民族
相互作用型	“意図的”または“計画的”に創り出された相互作用であり、異なる民族集団の間の相互理解を促進する異文化間教育の形態。	文化を異にする集団に所属する子どもたち

以下、異文化間教育の四類型の教育の対象について考察する。「文化転換型」「文化交差型」「文化分離型（異文化回避型）」より、「相互作用型」の方が、教育の対象の範囲が広い。「文化転換型」「文化交差型」「文化分離型（異文化回避型）」では、教育の対象が限定されている。「相互作用型」では、少数民族や移民などの人々を含むだけでなく、社会的に多数者・マジョリティとされている人々も含まれている。ただし、前述したように、その「相互作用型」の異文化間教育はアメリカの「多文化教育」における、計画的に異なる文化集団の子どもたちの相互理解を促進するという研究内容を参照している。すなわち、その「相互作用型」の異文化間教育は、多文化社会という前提の下にある。つまり、「相互作用型」の研究対象は、多文化社会の地域の子どもたちである。

## (2) 異文化間教育の研究対象

江淵（2007）によると、異文化間教育の研究の主な対象としては、次のような三つの範疇の人々（子どもたち）がいる。

- (1)移民、在留民、難民など
- (2)多民族国家の少数民族
- (3)一般の子どもたち<sup>36</sup>

ここでは、一般の子どもたちも、研究対象と考えられている。そして、一般の子どもたちについて、江淵（2007）は、「何らかの意味で異文化とのかかわりが問題となる日本の一般の子どもたちの教育も、当然その視野のなかに入れる必要がある」<sup>37</sup>と述べている。江淵（2007）は、「現在は外国人や異文化との接触とは無縁に近い暮らしをしている子どもたちでも、親の都合で突然外国暮らしの身になったり、将来、外国人と協力して仕事や事業に取り組むことになる可能性は少なくない。（中略）そこでは、世界の諸文化を知り、異民族の人々と協力しあうことが生存のための不可欠の条件となる」と述べている。つまり、ここで指す「一般の子どもたち」の意味は、人間形成の途上にあるすべての子どもたちであると考えられる。

一方、江淵（2007）によれば、異文化間教育の研究には二つの異なる性格が含まれている。その二つの性格について、江淵（2007）は「その第一は、異文化間教育は人間形成の文化的過程（a cultural process）という事実・事象の次元にかかわる記述概念であり、その意味で、異文化間教育の研究はまず事実・事象を科学的に解明する研究としての性格をもっているということである。（中略）第二は、異文化間教育は単なる記述概念ではなく、何らかの意味で異文化とのかかわりをもつ意図的・実践的教育活動の範疇ないし形態（a model of educational activity）の次元を含んでいることである」<sup>38</sup>と述べている。これに基づけば、移民、在留民、難民など多民族国家における少数民族を対象とする研究は、いずれの場合も、文化の移動や異文化の体験、異文化への接触という行動に関する問題を解明するため、事実・事象を科学的に解明する研究としての性格をもっている。一般の子どもたちには文化の移動や異文化の体験、異文化への接触という行動に関する問題がまだ発生しておらず、しかも、一般の子どもたちのために「異文化間相互理解・相互作用」の機会を作るような意図的な教育活動が現在、異文化間教育の重要な課題であるので、実践的な性格を持っている。すなわち、異文

---

<sup>36</sup>前出、江淵『異文化間教育研究入門』pp.16・17。

<sup>37</sup>前出、江淵『異文化間教育研究入門』p.17。

<sup>38</sup>前出、江淵『異文化間教育研究入門』p.18。

化間教育における一般の子どもたちを対象とする研究は理論的な範疇に属する研究があまりなく、常に具体的な教育活動の位置にあり、実践研究として進められている。

### 2.1.2 異文化に接触できるか否かの区別について

異文化間教育の対象を広げる必要がある理由を明らかにするため、子どもたちが異文化に接触できるか否かの区別をする必要がある。

異文化に接触できる子どもたちとは、すなわち日常生活の中、たとえば学校の中で異文化と出会う機会がある子どもたちを指す。こうした子どもたちは、多文化社会や多民族社会の環境で成長している場合が多い。また、こうした子どもたちを対象とする異文化間教育の研究は、異文化間教育と関連している多文化教育、外国語教育などの研究領域の中にも常に登場する。

たとえば、アメリカの「多文化教育」における、計画的に異なる文化集団の子どもたちの相互理解を促進するという研究内容がある。アメリカには、アメリカインディアンや黒人およびヨーロッパからの移民がいる。他にも、メキシコ、キューバ、プエルトリコ、ヒスパニック、ベトナム難民、フィリピン、中国、韓国など、さまざまな諸国からの流入も多い。独立当初、アメリカにおける民族構成は、白人が多数を占めていた。しかし現在、アメリカにおける民族構成は、白人が圧倒的多数でなくなっている。しかも、近年における著しい人口変動によって、白人中心の既存の思想・社会づくりには限界が来ていると言える。たとえば、アメリカの雑誌『Politico』<sup>39</sup>によれば、2010年、アメリカにおける5歳から17歳までの白人の割合は55%のみである。そのため、アメリカの子どもたちは様々な人種、民族が混在する社会で成長するのであり、異文化の体験、異文化に接触する機会が多い。このような多文化社会において、「民族・人種の共生」、「文化の共生」という意識を育成することが必要である。このため、異なる文化集団の子どもたちの相互理解を促進する「異文化間相互理解・相互作用教育」計画はアメリカの「多文化教育」の一環として非常に重視されている。

他方、異文化に接触できない子どもたちとは、単一文化とみなされがちな社会で成長し、日常生活の中で、文化の移動や異文化の体験、異文化への接触という機会がない子どもたちのことである。こうした子どもたちは、単一文化の環境で

---

<sup>39</sup>Politico 雑誌はアメリカの政治メディアに関する雑誌である。人口のデータは以下のアドレスを参考にした、  
<http://www.politico.com/magazine/story/2014/11/10-maps-that-explain-the-next-election-113002> (2016年11月30日最終確認)

成長している場合が多い。

たとえば、中国の場合、中華人民共和国が成立して以来、国民の構成はあまり変わらない。多くの地域の子どもたちは外部の異文化と直接接触する機会がない。しかし、現在、国際的なつながりがますます緊密になっている。現在、世界の一部の子どもたちは異なる文化に接触することができないが、社会の発展に伴い、彼らは将来、様々なカルチャーショックを受ける可能性が高いと考えられる。異なる文化と出会う時、彼らが子どもの頃に異文化に関する知識や能力を獲得していない、もしくは異文化体験活動に参加したことがないならば、おそらく将来、偏見・差別あるいは閉鎖的心理が助長されてしまうだろう。こうした問題は平和な社会を構築することに対して非常に大きな障害になるはずである。より極端なこととしては、子どもたちがずっと閉鎖的な思想の環境の下で成長すれば、排外主義（外国や異なる文化について排斥する思想傾向）の価値観を形成する可能性が高くなる。異文化に接触できない子どもたちであっても、広い視野を持ち、お互いに尊重する能力を育成する必要がある、異なる文化間の関連や摩擦についてもさらに深く理解する必要がある。したがって、彼らはもっと、異文化間教育を受ける必要がある。彼らには異文化間教育を受ける機会が与えられるべきである。

また、異文化間教育の研究は日本、ドイツ、アメリカなどの先進国で行っているため、先進国の子どもたちは異文化間教育に関する知識や体験を受ける機会が多い。このような意図的、計画的な教育活動は、発展途上国、特に経済的に発達していない地域の子どもたちにも必要があるので、異文化間教育の対象はより拡大する必要がある。

## 2.2 異文化間教育と国際理解教育の区別について

次に、多文化社会の地域に住んでいない子どもたちを含む一般の子どもたちにとって、異文化間教育はどのようなことであるのかを検討する。また、一般の子どもたちを対象とする異文化間教育と国際理解教育との違いを検討していく。

これまで、異文化間教育は異なる文化に接触できない子どもを含まず、特定の子ども（海外から帰国した子ども、外国人の子ども、少数民族の子どもなど）や多文化社会における子どもたちを研究対象として限定されがちであった。しかし、グローバル化が進む中で、子どもたちは自分の国や地域のような内部環境・社会の異文化を理解・体験するだけでなく、外国の文化環境や社会も互いに理解・体験することが重要となっている。我々は、こうした子どもたちのために、異文化と出会う機会を創る必要がある、意図的、計画的に教育活動を工夫しなければな

らない。

このような考え方は、国際理解教育の考え方と類似している。実際、異文化に接触できない子どもたちを対象とする研究は実践研究として進められているが、主に国際理解教育や異文化理解教育の諸活動に関して行われている。

本来、異文化間教育は多文化教育や国際理解教育といった研究分野とも深い関係を持っている。国際理解教育のあり方について、魚住（1995）は「国際理解教育は、主権国家の集合体としての国際社会を前提に他国理解や異文化理解、国際関係理解等の学習を通じて、諸国民、諸国家間の平和、友好、協力および人権の国際的保障をめざす教育であること」<sup>40</sup>と述べている。これによれば、国際理解教育の基準は「国家」であり、「国家」という視点から「相互理解・尊重」、「相互交流」ということが強調される。

また、「文化」を基底として考えている異文化間教育と比べて、国際理解教育の方がさらに広く、文化理解という領域だけでなく、地球環境、エネルギー問題、人口問題など、地球規模の領域から外国語能力の基礎や表現力まで、さまざまな領域に拡大されている。

これまで日本でも、国際理解教育は、学習指導要領にも明記され、国際理解教育の活動も積極的に実践されている。中国の場合でも、少なくとも一部の地域においてこうした教育活動が実施されている。しかし国際理解教育という考え方のみでこうした教育を進めてよいのであろうか。異文化間教育の視点を取り入れる必要はないのだろうか。

異文化間教育は、「相互作用」を重視しており、互いに関わる中でそれぞれが変容することを求めている。このことは、異文化間教育と国際理解教育との考え方との大きな違いである。

すなわち、国際理解教育は言わば、基本的に自分たちの文化も、相手の文化も変わらないという前提のもとで、相手のことについて理解しようという教育である。そのため、たとえば、日本や中国（の多くの地域）の文化が（実際には多文化的であっても）単一文化とみなされがちだ。そして、国際理解教育では、一方的な「国際理解」が中心であり、双方向的な相互作用の研究はまだ不十分である。この問題についての具体例は本章の5節で論じる。

特に日本と中国の関係においては、相互理解と言っても、過去の歴史においても現在においても緊張関係を維持しているので、互いに理解することには限界が

---

<sup>40</sup>魚住忠久『グローバル教育:地球人・地球市民を育てる』名古屋:黎明書房、1995年、pp.96-97。

ある。これまで、国際理解教育や異文化理解教育などの諸活動は不十分であった。このため、日本と中国の子どもたちには、むしろ単に理解するというだけで終わるわけではなく、互いに作用・影響しているということを意識してもらう必要がある。

さらに言えば、日本や中国の子どもたちは、単一文化の環境で成長しているので、自分たちの文化が他の文化と影響し合っているということが意識されにくく、相互作用なき理解に留まりやすい。このため、単一文化とみなされがちな社会における異文化間教育のあり方として、双方向的な「相互作用」、つまり自分たちの文化が他の文化と影響し合っているという内容核心をする教育活動を展開する必要がある。

### 2.3 異なる文化集団の「相互作用」

前節にて、異文化間教育の研究において日本と中国の子どもたちがどのような立場に置かれているのかを考察した。また、単一文化とみなされがちな社会である中国と日本の異文化間教育のあり方として、双方向的な「相互作用」教育活動を展開する必要があることを明らかにした。相互作用を進めるような異文化間教育を日本と中国の間でより広めるべきだと考えられる。このため、「相互作用」というような異文化間教育について検討しなければならない。さらに、これから双方向的な「相互作用」教育活動を作り出すため、日本と中国に適応される「相互作用」に関連している理論を論じる必要もある。

慶応義塾大学新聞研究所（1972）は、「われわれは相互作用を『対象 X に関する行為者 A、B 間の交換で、少なくとも行為者の一方においては意図的であるような交換』と定義する<sup>41</sup>と述べている。このような一般の定義から見ると、普段の「相互作用」は、異文化間教育学の「相互作用型」と同じように、「意図的」である必要があり、意図的であることなしには相互作用は成立しえないといえよう。「相互作用」は領域（医学、物理学、薬学など）によって意味も多少異なっているが、「互いに影響し合う」という意味は共通している。国と国の間の場合、「相互作用」という言い方より、「国際交流」や「相互影響」などのほうがよく使用されているが、「相互作用」も「相互影響」も英語では *interaction* に対応するので、両者は互換的に用いられると考えられる。

そして、二つの国の「相互影響」の視点から考えると、政治面、文化面、経済

---

<sup>41</sup>慶応義塾大学新聞研究所『コミュニケーション行動の理論—インターディシプリナリー・アプローチ』慶応通信、1972年、p.7。

面などで「相互影響」が体现している。「相互影響」「相互作用」は、各国の政治、経済、科学、文化などの発展に役に立つだけでなく、各国の国民の間に相互理解や尊重、友好関係を築く土台にもなっている。つまり、二つの国の子どもたちにとって、その二つの国の間の「相互作用」「相互影響」の事象を学習すると、互いの理解や尊重に関する効果がより得られると考えられる。

一方、文化面から見ると、ある国の文化発展は、必ず他の集団との間に文化交流を行い、文化の影響、補充、浸透により互いの文化を受け、融合していると考えられる。日本と中国という二つの文化集団の「相互作用」を体现する例として挙げられるのは、古代から近代まで、一衣帯水の東アジア隣国の文化の交流である。日本と中国の交流の歴史は長く、西暦 57 年（中国の漢朝、日本の弥生時代）、倭国王が、後漢の光武帝より金印を賜わった時に始まるとされる。そのあと、文化の交流も活発に行われてきた。古代の日本は、文字、飲食、哲学、宗教などの分野で中国の文化の影響を受けてきた。近代になり、中国は封建社会の末期を迎えた。日本も当時の徳川幕府が似た状況にあった。しかし、その後、日本と中国の国情は全く異なることとなった。李（1999）は、「近代になり、交流の傾向がついに逆転したのは、清政府の腐敗と保守により、中国が徐々に帝国主義者の半植民地に転落したときである。その時、日本は明治維新によって、西洋に学び、民族の独立を保ったばかりではなく、世界資本主義者の列強の仲間になったことと密接な関連があると考えられている。（中略）当時の中国人は日本訪問、調査、留学、訳書、雑誌編集など様々な文化交流の形で、日本の政治、経済、思想、文化、科学技術などを勉強し、中国社会の近代化に重大な影響を与えた」<sup>42</sup>と指摘している。このため、近代から日本文化が中国に逆輸入され始める。そして現代になり、日本と中国の各領域において、このような「相互作用」や「相互影響」は絶えない。むしろ世界の科学や技術の発展に伴い、我々の交流手段や交流の内容も増加しており、その結果、このような相互作用は一層強くなっている。現代、中国では、先に発展した国としての日本の各方面を勉強する風潮がまた継続している。

特に、本研究で取り上げる日本と中国の漢字は、古代から現代まで継続している「相互作用」や「相互影響」の一つの例である。日本と中国の漢字の発展や交流については、第 5 章で論じる。

しかし、国レベルにおける「相互作用」という言葉の使い方は、相互作用論の

---

<sup>42</sup>李素楨『日中文化比較研究』文化書房博文社、1999年、pp.196-197。

体系においては例外的であり、「相互作用」は基本的に小さい集団に限定される。たとえば、ある日本の小学校で、アジア系や欧米系などの子どもたちが学校で出会った後の学校生活の中での「相互作用」、また教師と少数民族の子どもたちの「相互作用」など、対面の状況が多い。それについて、近藤（1998）は「相互作用論の経験的研究は小集団を扱ったものが多く、全体社会を問題にしたものが少ない」<sup>43</sup>と述べている。さらに、いままでの研究者は小規模の集団における相互作用を研究しているが、その多様な相互作用を超えて全体社会と別体系の社会との相互作用に関する問題点を触ることが少ない。したがって、本研究でも、多文化社会において異なる文化集団間の「相互作用」を述べるのではなく、マクロな視点から、より広い大きい集団間（両国の間など）の「相互作用」を論述していく。

#### 2.4 近隣諸国における文化の「相互作用」

異なる文化集団の間を関係を理解する時、政治、経済などさまざまな領域から、「相互作用」を認識することが必要である。国同士の関係においても「相互作用」について認識する必要がある。国レベルにおいて「相互作用」の一つの表現は、文化的共通性を持っていることと考えられる。「共通性」については、地理的に近い国々において文化を共有したり類似した文化を築いたりしていることが多いと考えられる。地理的に近いところは、一つ文化圏を形成しやすく、文化的共通点も多くなると考える。

たとえば、中国と日本や韓国などの近隣諸国は歴史的に文化の交流がなされており、一つの文化圏を形成している。宗教（儒教、仏教など）、食文化（米、箸など）、文字（漢字、主に中国と日本）、哲学（陰陽五行説、八卦説など）などの領域の共通性が非常に高い。しかしこの千数百年の間、この文化圏の国々の間には、時代によって差が出て、それぞれに独自性も生み出されてきた。それと同時に、相手国の文化に対して優越感を持ったり、劣等感を感じたり、誤解が生じたりすることも起きている。このように自分の文化を基準にして、ほかの文化を評価するといったような、自分を中心とした考え方のことは、「自文化中心主義」と言う。

自文化中心主義について、石井ら（2013）は「文化を論じるとき、たとえば先進国の研究者が発展途上国の文化を研究しようとする、そこには無意識的に

---

<sup>43</sup>近藤敏夫「相互作用と社会（1）：相互作用論の社会概念」佛教大学社会学部『社会学部論集』31号、1998年、pp.49-50。

しろ研究者自身の出身文化を相手文化より上であるとする見方が見え隠れすることがある」<sup>44</sup>と述べている。研究者だけでなく、児童生徒が異文化について学び、理解しようとするときにも、自分の文化がほかの国と比べて優れていると考える可能性がある。石井ら（2013）は、この問題について、「どの文化にもそれぞれの存在理由があって、当該地域ではそれなりの最適な文化が創り出されているのであり、だからこそ、それぞれの文化は互いに対等であるという文化相対主義的な考え方をすることが求められる」<sup>45</sup>ということ述べている。これを受け漢字文化について自文化中心主義の視点から論じる。

漢字は古代中国の漢民族が発明した文字である。また、漢字は中国に広がった後、近隣諸国（日本、朝鮮、ベトナムなど）にも伝わっていった。漢字は、各国に非常に大きな影響を及ぼした。韓国語や日本語も漢字の影響を受け、幅広く普及していった。それに伴って、引き起こされた各国の多様な文化事象や発展を記録することができる。また、その他の影響は、東アジア社会の共通の言語の媒体は漢字であり、儒学や仏教など漢文化と関連する文化内容を記録し、伝播していた。つまり、漢字という文字は共通のコミュニケーション手段となっている。こうした経緯は、ラテン文字（ローマ文字）と類似している。ラテン文字はもともとギリシア文字から発展し、古代ローマ帝国で通用していた文字である。ラテン文字はヨーロッパ各国に広がり、同質的文化圏を形成していった。現在の英語、ドイツ語、スペイン語など言語は、すべてラテン文字の影響を受けている。もともと発信源であったローマ帝国はすでに滅亡したが、現在その地域はいくつもの国に分かれており、ラテン文字は共通の文化遺産として残っており、文化的優越感はありませんと考えられる。漢字文化の発信源であることから、中国では漢字に関して優越感があるという可能性がある。たとえば中国では、日本や韓国が漢字文化の受け手であるとする事例が確認できる。しかし現在、中国は日本語で新たにつくられた漢字を逆輸入している。史（2000）は、中国における日本語由来の漢字語を、「(1)漢字の意味を使用した漢字語。(2)漢字の意味を使わず、形だけを借りた漢字語。(3)日本語を中国語に音訳する語」<sup>46</sup>に分類している。日本から輸入したこのような言葉は、中国で日常用語として幅広く使用されている。したがって、中国の漢字文化と日本や漢字文化圏の国々の漢字文化はお互いに対等であるという文化相対主義的な考え方が求められる。

---

<sup>44</sup>石井敏・久米昭元『異文化コミュニケーション研究法 テーマの着想から論文の書き方まで』有斐閣ブックス、2013年、p.5。

<sup>45</sup>同上。

<sup>46</sup>前出、史『漢語外来詞』pp.172-177。（原文は中国語、引用者が翻訳した）

西洋の地中海文化圏を取り上げよう。地中海は、アフリカ、アジア、ヨーロッパの三大陸に囲まれた広大な内海である。地中海周辺の地域では数千年にわたって高度な人間活動が展開された。地中海文化圏はについて、山中（1994）は「この地中海地域はそれ以前にも文明が栄え、現在にもその痕跡をわずかにとどめている。ローマ人が「マーレ・ノストルム（われわれの海）」と呼んだこの内海を西洋文明の発祥の地、またそれぞれの時代においてさまざまな文化が融合して新たな文化が形成されたるつぼとして論じるのは刺激的なことである」<sup>47</sup>と述べている。古代においては、ローマ人、フェニキア人、ギリシア人、エジプト人が活躍し、地中海文化圏を形成した。たとえば、現在シリアの北海岸の地域は、西暦2000年前、フェニキア<sup>48</sup>人が住んでいた。フェニキア人は地中海の各地方を結んでいた。新（1973）によれば、「それらのセム人のうちでも、シリアの北海岸に住んでいたフェニキア人は、前2千年紀から多く海岸に都市国家をつくり、レバノン杉で作った舟を利用して海上貿易と商業と行ない繁栄した。（中略）フェニキア人の支配下にはいった地方には、キュプロス、マルタ、西部シチリア、サルデーニャ、コルシカ、北アフリカの全海岸、南部スペインなども含まれ、有名なカルタゴの建設は前814年と伝えられる。このような事実を背景に、地中海東海岸のフェニキア系の文化が、北アフリカの海岸や西地中海に伝播開花することになった」<sup>49</sup>ということを記述している。つまり、地中海各国はフェニキア系文化の影響を受け、発展していた。

地中海という地域は、芸術文化や風俗習慣から見ると、近隣諸国間の「相互作用」という特徴が体現されている。しかし、社会的な観点から見ると、この地域は南北に分かれている。北のほうはヨーロッパ共同体の国々、南のほうは「第三世界」という発展途上国の国々である。それぞれの経済発展やイデオロギーの度合いが異なっており、その上石油の生産や分配など問題があるので、民族間の対立や国家間の対立も深刻になっている。これらの問題について、人種差別的態度を捨て、生活様式および歴史を認識しなければならないことが重要である。こうしたことを踏まえれば、異文化を尊重するため、文化の相互影響・作用という点も重視しなければならない。

---

<sup>47</sup>プイグ・オリベス J・PUIG OLIVES J・山中和樹「地中海文化圏の諸問題について:社会学的考察」新潟産業大学『新潟産業大学人文学部紀要創刊号』、1994年、p.143。

<sup>48</sup>現在のシリア・レバノン沿岸付近にフェニキア人が建てた都市国家群の総称。前8世紀以降、ギリシャの台頭によって衰退し、前64年、ローマに併合された。以下のアドレスを参考にした、<https://kotobank.jp/word/%E3%83%95%E3%82%A7%E3%83%8B%E3%82%AD%E3%82%A2-123160>（2016年9月30日最終確認）

<sup>49</sup>新規矩男『古代地中海美術』学習研究社、1973年、p.15。

以上の内容を踏まえ、どこの国でも、近隣諸国との文化の「相互作用」について理解することが非常に重要であると言える。本研究では、教育の実践的活動の視点から、近隣諸国間における文化の「相互作用」を考察する。

## 2.5 文化間の「相互作用」の視点をもって行う小学校の教育活動

相互理解を促進する教育活動は、各国の教育現場において見られるが、近隣諸国の文化の「相互作用」の視点から実施する教育活動の数は少ない。本研究では小学校の段階を取り上げ、特に小学校高学年の子どもたちにふさわしい文化事象や学習方法を提案し、授業プログラムを開発する。

また、小学校高学年の子どもたちの特徴について、文部科学省は「9歳以降の小学校高学年の時期には、幼児期を離れ、物事のある程度対象化して認識することができるようになる。対象との間に距離をおいた分析ができるようになり、知的な活動においてもより分化した追求が可能となる」<sup>50</sup>と述べている。つまり、子どもたちは、ある単純な事象を分析・整理することができるということである。異文化学習は、子どもたちの認知面にとって有効である。そして、小学校段階の子どもたちは、一般的には、経験的に異なる集団の人たちとの交流や異なる文化の体験がない子どもたちが多いと考える。子どもたちが意識しやすい身近な地域における具体的な異文化事象を通して、自分の国と近隣諸国との文化の交流そのもの、つまり文化間の「相互作用」を考察し、文化交流の実態をとらえる学習をする必要がある。このため、本章では、近隣諸国の文化間の「相互作用」の視点と小学校の教育活動を結びつけ、それに関する先行研究を把握していく。

先行研究としては、日本の小学校における社会科や総合的な学習の時間の中で、異なる集団の間の相互理解を促進する教育活動が散見される。総合的な学習の時間や社会科の具体的な内容について、永田ら（2006）は、「総合的な学習の時間の異文化理解に関わる学習では、食べる、着る、祭りをするなどの異文化体験が学習の中心となり、このような実体験を通して、児童が興味を持ったことを調べる学習へと発展している。社会科でも実体験の活用は重視されているが、対象地域の文化の特色や日本と比較して共通点や相違点を把握した後に、発展学習として実体験が活用されている」<sup>51</sup>と述べている。具体的な内容を挙げるのであれば、

---

<sup>50</sup>文部科学省「子どもの徳育の関する懇談会『審議の概要』 3.子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題」

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/053/shiryo/attach/1282789.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/053/shiryo/attach/1282789.htm) (2016年9月30日最終確認)

<sup>51</sup>永田成文・夏著揚・増山稔「小学校の異文化理解学習における実体験の効果—日本の近隣諸国の食文化を事例として—」三重大学教育学部附属教育実践総合センター『三重大学教育実践総合セン

中国と日本のラーメンの共通点や相違点の学習という内容は、文化間の「相互作用」に近いと考えられる。

では、近隣諸国の文化の「相互作用」の視点から行われている小学校の教育活動の実施状況はどうだろうか、以下で、日本の小学校現場について取り上げる。

日本の隣国といえば、韓国、北朝鮮、中国（香港、台湾など含む）、ロシアが該当する。それらの国の中で、ロシアは、東アジア文化圏に所属しておらず、文化的な共通性はほかの隣国と比べて少ないと考えられる。日本では、同じ文化圏に所属する韓国・北朝鮮や中国との交流授業があるが、文化間の「相互作用」という点を強調する教育活動はまだ少ない。先行研究として、比較的の研究されている数が多い、日本における近隣諸国の「食文化」に関する教育活動を取り上げる。

まず、近隣諸国の「食文化」に関する研究として、二つの資料を分析する。一つ目は、永田ら（2006）の「小学校の異文化理解学習における実体験の効果—日本の近隣諸国の食文化を事例として—」である。この教育活動は日本で実施された異文化理解学習である。基本的な方法原理は、小学校社会科の視点から検討されている。例として、永田ら（2006）は「小学校社会科における一般的な異文化理解学習では、対象国と日本の文化を比較し、日本と異なる文化の認識に重点がおかれている。このような学習では、対象国と日本の文化の交流実態がとらえにくい。日本と近隣諸国の文化の交流実態をとらえるために、国と国との視点からではなく、同じ文化圏という視点から文化の共通点や相違点を把握する」<sup>52</sup>と述べている。つまり、「同じ文化圏内での交流と変容」を中心概念として授業が開発されている。具体的な内容としては、中国から日本に伝わったラーメンを事例とし、同じ文化圏として日本と中国でどのようなところが似ているのか（一般的共通性）、どのようなところが異なっているのか（地方的特殊性）を記述、説明、判断する。学習過程は「食文化の交流」、「ラーメンの一般的共通性と地方的特殊性のイメージ」、「ラーメンの地方的特殊性の発見」、「ラーメンの地方的特殊性の考察」、「各地域の食文化の尊重」という五つの部分の内容を構成する。学習活動から見ると、ラーメンの試食、中国と日本それぞれのラーメンのよさの発表などが行われている。その学習活動の成果と課題について、永田ら（2006）は「また、このような異文化理解学習における実体験の効果として、食文化の交流に対する関心が高まり、地方的特殊性を踏まえた思考も深まったが、実体験の活

---

ター紀要』第26号、2006年、p.19。

<sup>52</sup>同上、p.20。

動そのものに生徒の関心が向くために、地域性を踏まえた食文化の交流実態の認識や意識が弱くなることを実証的に示したことである」<sup>53</sup>と述べている。つまり、このような教育活動そのものに対する関心・意欲は高まるが、同じ文化圏内での食文化のつながりに対する認識は高まらなかった。学習過程から見ると、この授業では「食文化」に関するつながり、たとえばラーメンの一般的共通性やラーメンは中国から伝わったという内容はあるが、食文化という視点から中国と日本とが互いに交流していた歴史の内容にはあまり触れていないと考えられる。また、授業最後のまとめ段階では、それぞれの食文化を尊重するということが強調されている。

近隣諸国の「食文化」に関する研究の二つ目として、日本国際理解教育学会と公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）共同企画、大津（2014）編の「日韓中につくる国際理解教育」を取り上げよう。この教育活動は日本、韓国、中国という三つの国の小中学校で実施された異文化理解学習である。この教育活動では、食文化の「普遍性と地域性」、「混合性と変容性」、「共通性と多様性」という三つの「キーコンセプト」を設定し、食文化の中の「麺料理」と「米」を学習している。「共通性と多様性」の例としては、「例えば、麺は、中国で発達し、中国各地だけではなく、周囲の国や地域に伝播し、韓国ではそば粉の麺、冷麺となったし、日本では、饅頭として受容され、うどんやそば、素麺になった」という内容を述べている。この教育活動には、『『ラーメン』単元の開発と実践—中国の小学校、韓国の中学校での実践』『『コメ』単元の開発と実践—日本の中学校での実践』という二つの単元があり、三つの「キーコンセプト」の観点から食文化について調べて比較し、それに対する尊重・理解の態度を育成する。たとえば「ラーメン」の単元は、「文化理解」「相互依存」という学習領域・カリキュラム開発の視点から、「食文化としての麺料理（麺の起源と歴史、発展、創造など）」、「三カ国の麺料理の同じところ違うところ」、「ラーメンの食べ方」という三つの内容で構成されている。「コメ」の単元は、「文化理解」「歴史認識」という学習領域・カリキュラム開発の視点から、「世界の主食について知ろう」、「コメについて知ろう」、「日韓中の米料理、食事マナーと食具をまとめてみよう」という三つの内容で構成されている。しかし、この教育活動に対する具体的な分析やまとめは不足しており、たとえば、「ラーメン」の単元は日韓中の参観者による相互の評価の内容のみが参考とされ、「コメ」の単元は授業最後に実施したレポートを通じ

---

<sup>53</sup>同上、p.24。

てまとめられており、子どもの授業前後の態度や知識への理解などにおける変化を把握することはできない。概して言えば、日本の小学校において近隣諸国の文化間の「相互作用」に関する教育活動はまだ少ない。また、近隣諸国の文化間「相互作用」の有効性を証明するために、現時点中国及び日中間の国際交流活動の状況を把握することが必要である。次章では、現在の日中小学校の国際交流活動に関する事例を分析・検討し、日中小学校における国際交流の活動を詳述する。

### 3 日中小中学校における国際交流活動に関する研究

#### 3.1 中国における国際理解教育

前述したように、中国の国際交流活動は、主に国際理解教育の理論や政策から発展しているものである。しかし、国際理解教育の視点のみでは十分な国際交流活動は行えない。単に理解して終わるのではなく、異文化間の視点から互いに作用・影響していることを意識して国際理解教育を行う必要がある。このため、中国における国際理解教育および国際交流活動について不足している点を具体的に明らかにしなければならない。

まず、具体的な国際交流活動を考察する前に、中国の国際理解教育の発展状況を把握することが必要である。

1978年の改革・開放路線以降、高度経済成長期にある中国は、世界各国に注目されており、国際的影響力もますます増大してきた。このような影響を受け、国際コミュニケーション能力と国際的な視野を持つ人材を育成することが中国の学校現場でも要求されている。そのような時代の流れの中で、国際理解教育を研究する研究者も多く現れるようになった。中国における国際理解教育の萌芽について、王ら（2010）は、「1999年1月、北京教育学院の倪伝栄院長と李晶教授が東京で第4回アジア太平洋地区国際理解教育研究会に参加した。彼らは帰国後、学内に研究委員会を発足させて、中国での国際理解教育の研究を行い、青少年の国際理解意識、『地球村』の一公民としての素質を積極的かつ自主的に培うことを呼びかけたのであった」<sup>54</sup>と述べている。近年、中国では国際理解教育に関する理論的研究の試みがなされるようになり、国際理解教育の概念について検討されている。劉（2006）は、「国際理解教育とはある文化に属する人々に対する、さまざまな国家・文化及び国際組織に関する教育実践活動である。その教育は主に学校の教育カリキュラム、課程及び実践活動によって実践され、家庭文化やマスコミなどの社会教育手段で展開される」<sup>55</sup>と述べている。そして秦（2014）は、国際理解教育の概念に関する研究や実践を概観し、中国で使われている国際理解教育の概念は主に六つの領域を内包していると指摘している。具体的には、「整理すると、『民族文化理解、異文化理解、人権教育、平和教育、環境教育、国際交流の実践能力』という6つの方面に分けられる」<sup>56</sup>と述べている。しかし、

<sup>54</sup>王遠美・李晶「北京市実施国際理解教育的回顧与思考」北京教育学院『北京教育学院学报:社会科学版』第24卷第2期、2010年、p.50。（原文は中国語、引用者が翻訳した）

<sup>55</sup>劉洪文「国際理解教育的定義内涵初探」江西青年職業学院『江西青年職業学院学报』第16卷第2期、2006年、p.17。

<sup>56</sup>秦莉「中国の経済発展地域における国際理解教育の現状と課題:蘇州市工業園區における調査を中

国際理解教育の理念をめぐる議論や、内容・方法に関する提案はあるものの、それらが実際にどのように実践されているのか、その実態を明らかにする研究はまだ少ない。

一方、学校現場において、国際理解教育が次第に重要視されるようになってきている。特に、1993年2月に中共中央国務院は「中国教育改革と発展綱要」<sup>57</sup>（日本語：中国教育改革と発展の綱要）を発表し、従来の応試教育（受験での合格をめざし教科書中心の詰め込みをする）から素質教育（思想品德、文化科学、身体、心理、審美などの素質を全面的に発達させる）に転換することを示した。この改革の動きに関わって、陳（2010）は「国際理解教育は民族の素質を高めることを目標としている『素質教育』と共通する総合的な特質を持っているため、それを『素質教育』の体系に入れる。（中略）国際理解教育は『単なる徳育智育』ではなく、『国際理解に関連する価値観と能力の整合的な素養』を養成することを目標としている」<sup>58</sup>と述べている。その後、国際理解教育は三つの形態を通して実践が開始されている。その三つの形態について、蔡（2010）はまず「第一の形態は、既存の教科、特に社会系教科や外国語などの中で、教科目標の一部として国際理解教育の内容を導入した、いわゆる『浸透教育』の形で行われている『発散型』の国際理解教育である」<sup>59</sup>と述べている。それは、学校の中で国際理解教育を行う際の主流となっているのが現状である。しかし、この形態では、教授内容が各教科の中で分散してしまうため、国際理解教育を集中して行うことが難しい。また、教授活動については従来の伝統的な教授方法の影響を受けやすいなどの問題点が指摘されている。

また、蔡（2010）は「第二の形態は、2001年の基礎教育課程改革によって、子どもたちの活動や体験を重視する領域として小学校3学年から高校の3学年まで新設された『総合実践活動』の中で行われている『集中型』の国際理解教育である」<sup>60</sup>と述べている。

---

心に」平成26年奈良女子大学博士論文博課甲第564号、2014年、p.45。

<sup>57</sup>中華人民共和国教育部「中国教育改革と発展綱要」、  
[http://www.moe.gov.cn/jyb\\_sjzl/moe\\_177/tnull\\_2484.html](http://www.moe.gov.cn/jyb_sjzl/moe_177/tnull_2484.html)（原文は中国語、引用者が翻訳した）  
（2016年9月30日最終確認）

<sup>58</sup>陳愛苾「我国青少年国際理解教育的実施策略」北京教育学院『北京教育学院学報:社会科学版』第24巻第2期、2010年、pp.54-55。（原文は中国語、秦莉が翻訳した）

<sup>59</sup>蔡秋英「中国における国際理解教育の現状と課題—小学校教科『品德と社会』を中心として—」  
広島大学大学院『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部第59号、2010年、p.88。

<sup>60</sup>同上、p.88。

表2 「総合実践活動」の学習の内容（国際理解教育と関連のテーマ）<sup>61</sup>

領域	具体的な例
自然環境問題	・ 水土流失・気候の影響・植生被覆・水資源の状況・ゴミなど総合的な環境問題など
社会問題及びその歴史と現実	・ 世界文化遺産・中国と世界の経済及び文化生活など
伝統文化	・ 中華文化と世界各民族の文化など
地球的課題	・ 地球的課題とその課題解決のための情報技術、メディアなど

表2を見ると、「総合実践活動」には自然環境問題、社会問題やその歴史と現実、伝統文化、地球的課題などといった国際理解教育関連の内容が含まれていることがわかる。

そして、蔡（2010）は「第三の形態は、地方や学校の中で国際理解教育関連のカリキュラムを開発し、更に「国際理解」という教科を新設して行われている「特殊型」の国際理解教育である」<sup>62</sup>と述べている。すなわち、第3の形態の国際理解教育は専門的な教育課程である。

以上が、三つの形態について蔡（2010）が紹介した内容である。その中で、第3の形態は、全国の小中学校のカリキュラムを国家カリキュラム・地方カリキュラム・学校カリキュラムの3段階に分け、地方や学校に一定のカリキュラム設定の自由度を与えたものである。たとえば、北京市、上海市、広州市など急激に沿海部大都市に成長した地域は国際化に伴う教育を行う必要性を強く感じていたため、いち早く国際理解教育を推進し始めた。

そして、北京市の国際理解教育について、蔡（2010）は「礼儀の国、中国の絵、医学、京劇などといった中国文化的理解に関する内容が所々で含まれていることが見て取れる。ここから、愛国主義、自国理解中心、国情(国家の政治、経済、文化などの事情)理解などが中心とし、中国の伝統を重んじていることがうかがえる」<sup>63</sup>とまとめている。

<sup>61</sup>蔡（2010）の「小学校における『総合的実践活動』の教材開発領域」という表より作成。同上、p.88。

<sup>62</sup>同上、p.89。

<sup>63</sup>同上、p.89。

さらに、これらの三つの形態以外に、授業中の活動の実施には制約が多いため、授業以外で多様な活動を実施するという形態もある。たとえば、劉（2012）は、「中国無錫市新区旺庄実験小学校では、『学校内の文化環境を国際的な雰囲気にする』『課題研究を新しく作り、教育実行力を高める』『教師全体の素質を高める』『共同研究、交流を深め、国際的空間を拡大する』」<sup>64</sup>という四つの目標に向けて国際理解教育を実施していると述べている。秦（2014）は「そのうち『共同研究、交流を深め、国際的空間を拡大する』という点については、主に『韓国、シンガポール、イギリスなどの海外の学校との協定交流を広める』、『毎年教師と生徒を組織し、イギリス、シンガポール、韓国などへの訪問を行い、海外の教育資源に触れ、自国の文化も広め、互いの文化を融合し、国際的視野を広げる』、『定期的に無錫にある韓国人学校と交流活動を実施し、イギリスの小学校とインターネットによる交流をし、無錫で韓国の生徒の留学を受け入れ、また、生徒たちの活動を開放的に行なう』という内容である」<sup>65</sup>と述べている。これによれば、一部の地域の学校現場では、「対外交流」を重視し、国際理解教育の実践や活動は積極的に実施している。

しかし、国際理解教育は沿海部や発達している地域のみで展開される教育ではない。国際理解教育を中国のより広範囲へ広げるために、研究者らは世界に共有される国際理解教育の理念と中国の具体的な国情や伝統文化などを結びつけ、国際理解教育モデルやカリキュラムの構築を試みている。その一例を表3に示す。

この表3からわかるように、カリキュラムには平和教育、命の教育、国内の少数民族理解の教育、海外に対する基礎理解の教育などに加え、中国的特色として国民統合を目的とする愛国教育の内容も含まれている。

しかし、国際理解教育の理念をめぐる議論や、内容・方法に関する提案はあるものの、それらが実際にどのように実践されているのか、その実態を明らかにする研究はまだ少ない。たとえば、蔡（2010）では、実際に教育現場でどのように国際理解教育が実施されてきたのかについて明らかにされていない。さらに、中国における国際理解教育の普及・発展と地域性との関連、およびその歴史的変遷などについてもほとんど触れられていない。

<sup>64</sup>劉芸「小学開展国際理解教育的探索和实践」山東出版集團『新校園:學習』第4期(總第240期)、2012年、p.41。(原文は中国語、引用者が翻した)

<sup>65</sup>前出、秦「中国の經濟發展地域における国際理解教育の現状と課題:蘇州市工業園區における調査を中心に」p.45。

表3 中国の国際理解教育カリキュラムの構造<sup>66</sup>

構造	目的	主要内容
A 国際理解教育の基礎	異なる文化に対する理解と尊重の態度を育成し、「地球市民」意識と国際的資質を育てる。	・人と交流する基本的技能・世界の基本問題（平和と発展問題、生態環境問題など）・国際機構と平和の維持・多文化共存・世界の相互依存関係・国際交流と協力
B 中国の事情と特徴	民族の自尊心と誇りを持ち、自国文化の理解に基づいて、他国の人々と仲良く平等に交流し、民族の平等意識と団結協力の精神を持つようにする。	・中国の国情・中国の伝統文化及び世界文化における役割・近年における中国の国際的地位の上昇・中国と世界各国の交流と協力
C 学習方法	自尊心を持つとともに、全面的に発達した人格を形成し、世界を正しく認識して、地球的問題を正しく分析し解決する能力を高めるようにする。	・教授活動において、新課程標準で提唱している自主的学習、探求学習、協同的学習などを取り入れる
D 学校と地域の連携	各地域の特徴に結び付け、子どもたちの現実生活と密接に関わる問題や課題を取り上げ、実際の生活の中で国際理解を体験することを重視する。	

国際理解教育の現状について述べてきたが、中国は国土も広く、発展レベルも不均衡でグローバル化への取り組みも地域ごとに異なるため、国際理解教育の実施にも大きな地域差が生じてくるのがわかる。鄭ら（2010）は、「近年、国際理解教育を展開している学校は、北京、上海、深圳などの沿海や東部の都市の学校である。これらの都市は経済が発達し、国際的な交流が頻繁に行われ、文化活動も活発で、教育環境が良い」<sup>67</sup>と述べている。上海などの地域は昔から地理

<sup>66</sup>前出、蔡「中国における国際理解教育の現状と課題—小学校教科『品德と社会』を中心として—」p.90。

<sup>67</sup>鄭彩華・呂傑昕「我国中小学国際理解教育実践研究概述」上海教育科研出版社『上海教育科研』、2010年、p.51。

的条件に恵まれていて、外国から人が来たり、上海の人が外国に行ったりと、交流がしやすく、国際交流が順調に進んでいる。しかし、他の地域、特に貧困地域の子どもたちについては、国際交流が盛んとは言えず、国際理解教育も実施できていないという事実がある。こうしたことを踏まえ、より多くの子どもたちが国際交流の活動に参加することができ、地域間の国際交流に関する格差を縮小する方法を考える必要があるのである。

### 3.2 中国の小中学校における国際交流活動の課題

次に、中国における国際理解教育の視点の下での国際交流活動の課題を明らかにするため、中国の小中学校の国際交流の現状を取り上げる。

まず、国際交流の概念について、佐藤(2003)は「国際交流は、国家を単位として国益と外交政策の一環として展開される国レベルの交流活動から、民間が活動主体となる民際レベルの国際交流へとその裾野は広がってきている。国際交流の担い手の多様化と同時に、活動内容もまた多様化している」<sup>68</sup>と述べている。国際交流という活動は、国から個人に至るまで普及し、また交流の方法や内容が多様である。そして、交流の対象によって、交流の方法や内容も異なると考えられる。たとえば、日本における国際交流について、佐藤(2003)は「高等学校段階の国際交流は1990年代以降急速に広まっており、海外への留学、研修旅行、修学旅行などが普及してきた。また、小・中学校における国際交流は、子ども同士の作品交換、在日外国人学校・外国の学校・日本人学校との交流、インターネットによる交流、姉妹校交流、地域在住の外国籍の人との交流など多様な形で行われるようになってきている」<sup>69</sup>と述べている。この点については、中国も類似している。中国の小中学校における国際交流について、徐ら(2003)は、「国外の小中学校と姉妹校(連携校)関係を結び、学校に合うような国際交流を展開する。定期的に優秀な教師を国外へ送って、参観や見学及び学術訪問を行わせている。交換留学制度を作り、海外の子どもたちを中国に招き、中国文化を理解してもらおう」<sup>70</sup>と述べている。ここから見ると、小中学校段階の国際交流の形は大体同じであるが、中国においては「在日外国人学校・日本人学校との交流」のような形では行われていない。その理由について、やはり全体的に中国の小中学校の教育現場は、国際交流についてあまり重視しないのだと考える。このため、ここで中

<sup>68</sup>前出、佐藤『国際化と教育—異文化間教育学の視点から—』p.83。

<sup>69</sup>同上、p.84。

<sup>70</sup>徐輝・王静「国際理解教育研究」西南大学『西南師範大学学报(人文社会科学版)』第29巻第6期、2003年、p.89。(原文は中国語、秦莉が翻訳した)

国の小中学校における国際交流の現状について詳述する。

秦（2014）は、政治の中心地である北京市と地方都市における国際交流の実施状況について調査し、2013年2月から4月までの間、北京市、鄭州市、蘇州市の三都市の学校にインタビューを行っている。このインタビューについて、秦（2014）は「各市における調査対象の学校の選定については、教育関係雑誌に国際理解教育の実践が紹介されている学校や、国際理解教育への取り組みが教育関係者の間で評価されている学校に直接、電話等で調査依頼し、承諾が取れた学校を対象とした」<sup>71</sup>と述べている。

まず、秦（2014）が調査した北京市の6校の内2校では、国際交流活動を行っていた。その内一つの中学校は、「また、海外の学校と連携して、互いの学校を訪問し合ったり、留学を実施したりしている。加えて、他教科と連携した国際理解教育も展開している」<sup>72</sup>という。しかし、このような国際交流活動は、時間が短く人数もかなり制限されるので、「表面的」レベルに留まりなかなか本当の異文化間理解には至らないといえる。また、もう一つの中学校は3種類の国際交流活動を行っていたと報告されている。活動内容は「一つは、一週間に一回、主に中国文化に関する最新の話題、ならびに外国の最近の話題について討論し発表する、という選択履修授業『全地球対話』である、二つ目は、中国人生徒とアメリカ人生徒が一年を通じ、月一回、経済、歴史、文化などのテーマについて、E-mail や Skype を通して討論を行っている。三つ目は、世界遺産を模擬申請したり、NGO の基金会を模擬体験したりしている」<sup>73</sup>ことであった。この中学校では、定期的に E-mail や Skype を通してアメリカ人生徒と討論する活動が行われている。たしかにこのような活動によって、国際交流の内容が増え、互いへの理解を深める機会も多様になったといえる。しかし、交流する対象国は主としてアメリカが多く、欧米以外の国や発展途上国は全く入っていない。今後は、アジア各国及び他の地域との国際交流活動が期待される。

また、内陸部の鄭州市にある7校のインタビュー調査では、国際交流活動はほとんどなかったと報告されている。ただ一校だけ、生徒たちの英語能力を向上させるために授業以外でも生徒と外国人教師との交流活動を行っていた。この学校の国際交流活動については、「それ以外は、毎年の夏休み中、サマースクールの活動も実施されていて、生徒たちを英語圏の諸国に派遣している。言語の学習及

---

<sup>71</sup>前出、秦「中国の経済発展地域における国際理解教育の現状と課題：蘇州市工業園区における調査を中心に」 p.54。

<sup>72</sup>同上、p.62。

<sup>73</sup>同上、p.63。

びホームステイを通して外国の文化や生活を体験することが目的である」<sup>74</sup>という内容であった。以上の調査検証から見ると、鄭州市では国際交流活動はほとんど実施されておらず、他の内陸部都市でも国際的な交流活動は、同様にあまり行われていないと推測される。行われているのは生徒たちの英語能力を高めるため、英語圏の外国人との交流活動のみという実態であった。

一方、経済的に発展している蘇州市の国際交流活動のケースを見ると、秦（2014）が調査した3校では、国際交流活動を行った実績があった。たとえば、「3校における共通点としては、どの学校でも海外から外国人講師を招いて、英語の授業を行っており、生徒を海外への体験留学させる、また海外の学校と提携し、両学校の生徒の家庭でホームステイをさせている」<sup>75</sup>との報告がなされている。

以上の調査結果を踏まえ、本研究では中国において実施している学校数もしくは回数、各地域の実施状況及び活動の内容の深さという三つの視点から考察し、中国の国際交流活動の特徴を把握することとする。

#### (1) 国際交流活動の回数。

秦（2014）の調査によれば、北京市の6校の内2校は、国際交流活動を行ったことがあるが、鄭州市の7校では国際交流活動はほとんどない。今回の調査対象の都市はすべて中国の大都市であったが、少数民族の地域や農村部の小中学校では国際交流活動の回数はもっと少ないと推測される。

その背景にある原因、つまり国際交流活動の実施上一番大きな課題は中国における「応試教育」の影響である。今日の中国社会は全体的に受験重視の風潮にあり、「知識の詰め込みと丸暗記」という応試教育の影響の下では、国際交流活動の実施は困難である。実際に、1993年中共中央国務院は「中国教育改革と発展綱要」の中で、「小中学校の教育は『応試教育』から全面的に国民の素質の向上に転換すべきである。また、生徒たちの思想品德素質、文化科学素質、労働技能素質と身体心理素質を高め、より良く成長することを促進する」<sup>76</sup>こと等を列挙している。しかし、この頃から「応試教育から素質教育へ転換すべき」という目標を掲げはするものの、いまだスローガンのものが多く、確実に活動を実施している学校は極めて少ない。その結果、現在でも「応試教育」は依然として中国

---

<sup>74</sup>同上、p.67。

<sup>75</sup>同上、p.71。

<sup>76</sup>前出、中華人民共和国教育部「中国教育改革和发展綱要」

[http://www.moe.gov.cn/jyb\\_sjzl/moe\\_177/tnull\\_2484.html](http://www.moe.gov.cn/jyb_sjzl/moe_177/tnull_2484.html)（2016年9月30日最終確認）

の主流教育であり、小中学校で幅広く行われている。その原因について、王晨筱（2013）は「経路依存症<sup>77</sup>、素質教育への認識及び実践の乏しさ、大学及び大学以上の教育資源が足りなく、またこの資源配分が均等ではない」<sup>78</sup>という三つの理由を述べる。たとえば、その中の経路依存症についてであるが、中国における「応試教育」の歴史は長く、中国国民の意識の中に深刻な経路依存症および類似した思考モデルが形成されてしまっている。その結果、「応試教育」の改革は非常に困難となる。しかし、「応試教育」の必要性あるいは合理性について、王（2013）は別の角度から「選抜の公平性を最大限確保でき、中国の国情の現実と合致し、学生の素質を体現することができる」<sup>79</sup>という三つの利点に論及している。しかし、「応試教育」という大きな背景の下で、生徒たちの両親や保護者は、進学と関係がある教育実践は支持してくれるが、それ以外の教育実践は支持してくれないという傾向があった。その結果、中国の学校現場では、国際交流活動があまり実施されていないのである。

このような現状を踏まえると、中国の国情から見て、中国全体で国際交流活動の実施を促進することは困難であるといえよう。しかし、社会・経済の発展およびグローバル化に伴い、異文化間の視点から国際交流活動がもっと増えることが必要ではないだろうか。「応試教育」という現実の下でも、小学校段階では国際交流活動を実施することはできないわけではない。なぜなら、中国の義務教育では小学校から中学校への入学試験がない。そのため、この段階では子どもたちの受験に対するプレッシャーがほとんどない。子どもたちの国際交流活動を模索する可能性はあると考えられる。

さらに秦（2014）の調査によると、ある北京市の小学校の教員は、「E校の教員は日本へ一年間の研修に行った経験があり、日本の国際理解教育について少し実体験があったことから、国際理解教育は『教育国際化』の中の観念・思想になるような教育という認識であり、さらに『普通の人々はある特定の国について、ほとんど先入観を持っているので、低学年からの教育における改善が必要だ』という認識をもっていた」<sup>80</sup>ということを述べていた。

---

<sup>77</sup>経路依存症とは、過去の経緯や歴史により偶然決まった制度や仕組みに拘束される現象。歴史的経路依存症（historical path dependency）、経路依存性とも言われる。以下のアドレスを参考にした、<https://govforum.jp/member/news/news-news/news-others/others-others/11643/>（2016年12月15日最終確認）

<sup>78</sup>王晨筱「浅論中国応試教育存在の問題、原因及対策」長春出版社『考試週刊』第47期、2013年、p.1。（原文は中国語、引用者が翻訳した）

<sup>79</sup>同上、p.1。

<sup>80</sup>前出、秦「中国の経済発展地域における国際理解教育の現状と課題：蘇州市工業園区における調査を中心に」p.60。

このように、国際交流活動は中国の小学校段階で幅広く実施することが重要であり、中国の国情から見ても低学年から異文化間教育に関する活動を行う必要がある。その上で教育に関する国の管理部門機関は、低学年に相応しい国際交流活動の理論的枠組みと実施方法などを整え、実践可能な政策とすることが望まれる。さらにそれらを全国的に各学校長に認識させることも重要な施策となろう。

## (2) 地域による国際交流活動の格差

経済的に発展している地域（蘇州市）や政治・文化の大都市（北京市）などの地域は内陸部の都市（鄭州市）と比べ、国際交流の機会が多い。陳（2013）も中国における大都市である上海市（沿海部）と重慶（内陸部）の国際交流のあり方について比較考察を試みた。その結果、その二つの都市の小中学校では、上海市に比べ重慶では国際交流の機会が少ないことが明らかになっている。

また陳（2013）は、上海と重慶の各学校や機関のホームページを調べた。その結果について、「例えば、上海市少年宮は、様々な国際交流の団体を作って、毎年 1000 名以上の子どもたちがはるばる海を渡って、オーストラリアへ短期留学したり、アメリカへ観光や学習体験をしたり、スウェーデンで中学生クロスカントリースキーなどの活動に参加したりしている。（中略）しかし、重慶少年宮を見ると、国内における交流活動は多いが、海外の子どもたちとの国際交流活動はほとんどない」<sup>81</sup>ということを示している。

小中学校が自ら組織した国際交流活動から見ると、「上海中学校は毎年『ハーバード大学英語キャンプ』を開催し、ハーバードの大学生を迎える。（中略）全ての上海の小中学生が国際交流をしているとはいえないが、国際交流に関わる子どもたちの数は他の都市と比べて非常に多い。以上のように上海では小中学校でも国際交流が盛んである」<sup>82</sup>などが挙げられる一方、重慶ではまだ小中学校段階の国際交流はほとんど行われていない。したがって、上海では、国際交流に関わる子どもたちの数は重慶や他の内陸部と比べて非常に多い。これは政治的・経済的な先進地域と内陸部との状況の違いを反映したものと考えられる。

都市間の格差も問題であるが、都市部と農村部の格差はより大きく広がっている。蘇（2011）は、「農村の学校は施設や教材などのハード面でも、教員の学歴レベルや待遇などのソフト面でも都市の学校よりずいぶん遅れている」<sup>83</sup>という

<sup>81</sup>前出、陳「中国の重慶における国際交流の開発—情報通信技術を利用した試行的な取り組み—」 pp.1-2。

<sup>82</sup>同上、p.2。

<sup>83</sup>蘇于君「中国における農村教育の発展とその課題」鶴山論叢刊行会『鶴山論叢』第 11 号、2011

問題を指摘する。国際交流活動の発展は一定の経済基盤に依存するといえるのである。

この経済格差という問題については国及び政府に責任があり、これら公的機関が積極的に現状を把握し、改善しなければならない問題の一つである。しかし、経済的な側面だけでなく、地域によって異なる教育政策にも問題がある。

ここで地域による教育政策の違いについて触れる。秦（2014）の調査によると、上記三大都市の国際交流活動実施上の課題は、「応試教育」の問題で共通する。とくに人口が多い地域（山東省、河南省など）では、「応試教育」の問題はより深刻である。その理由は、中国の大学入試制度と関係する。中国の大学入試の一つ重要な特徴について、楠山（2005）は、「この中国の高考<sup>84</sup>において、最も特徴的であり、常に問題点が指摘されながら、頑として変化の兆しがみられないのが、各大学の各専攻の入学定員を各省に配分するという方式である」<sup>85</sup>と述べる。省別に定員を配分することから、人口が多い地域の受験生は仮に他の地域の受験生と同じ点数を取ったとしても、入学する学校のレベルはまったく違うことになる」と解説する。人口数全国2位の山東省の大学入試の状況を、「山東省は毎年合格資格ラインの点数が高く、大学入学の競争が最も激しい省の1つと認識されている」<sup>86</sup>と報告する。少数民族地区など教育状況の悪い地区で合格資格ラインが低いことには納得がいくとしても、教育環境に恵まれている北京市の合格資格ラインがとても低いことは不公平であるというこの山東省の受験生の訴えを取り上げる。「事実、北京市はその人口に比べて大学の数が多いことにより、大学からの募集人数も多く配分されている」<sup>87</sup>からである。このような状況から、人口が多い地域の受験生は受験のプレッシャーが大きく、当然受験生も親たちも、主要な科目（国語、数学、英語など）のみを重視する。その結果、国際交流活動の実施が一層困難となる。

以上の点からも根本的な問題はやはり「応試教育」にある。国際交流活動を増加させるためには、「応試教育」の影響が少ない教育段階で着手しなければならない。従って、(1)と同じように、中国では国際交流活動は小学校の早い段階で展開する必要があると考える。

---

年、p.2。

<sup>84</sup>高考とは大学入学試験のことである。

<sup>85</sup>楠山研「中国における大学入試改革の動向:地方・大学への権限委譲に関する一考察」京都大学大学院教育学研究科『京都大学大学院教育学研究科紀要』第51号、2005年、p.131。

<sup>86</sup>同上、p.131。

<sup>87</sup>同上、p.131。

### (3) 「表面的」レベルに留まっている国際交流活動

秦（2014）の調査から見ると、海外の学校と連携、訪問及び英語能力を高めるため行った活動などには言及されるが、異なる文化への理解、尊重、相互理解が欠かせないという記述や指摘がほとんどない。つまり、国際交流とはいっても、異文化に直接関わる活動が少ない傾向がある。また、国際交流活動に関する論述も、内容は非常に簡単であった。国際交流活動に関して、まず「交流ありき」という発想が強いため、イベント型に終始し、聞き取り調査でも学校や教師の自己満足的証言に終始する例が多かった。たとえば、蘇州市の国際交流活動の実施に関する記事を掲載する雑誌『園区教育国際交流専刊』は、その地域が積極的に国際交流活動を実施していることを取り上げているが、その内容の具体的な分析や考察もなく、ただ表層的な紹介にとどまったものであった。

グローバル化の進む現代社会において、異なる国及び地域の文化はそれぞれ多様な共通点、相違点を持つ。児童たちに寛容で開放的な視野を持たせ、差異を直視し、異なる文化と価値観を理解・尊重する眼を育成する機会が与えられる必要がある。つまり、「異文化」の視点から、他人や他国の文化への理解につながる国際交流活動の場が必要とされる。しかし、中国の国際交流活動の現状から見ると、これまでの活動には、文化を他の様々な社会的領域や分野との接合として理解し文化間の対立・交渉・葛藤・統合などをより深めていくテーマや内容がほとんどない。つまり、異文化や共通文化などについて語る交流活動が非常に乏しいのである。中国では国際交流活動の回数さえも少なく、異文化的な深い理解を育成できていないことは言うまでもない。

この「表面的レベル」のもう一つの問題点は、継続的な実施ができないということである。たとえば、北京市では国際交流活動が積極的に実施された時期があった。秦（2014）によれば、「それは2008年のオリンピック開催に際し、北京市内の各学校が自分の学校の特色をアピールするため、さまざまな交流活動を積極的に実施したときだった」<sup>88</sup>と述べられている。しかし、オリンピックが終わると、その熱は急速に冷えていった。

以上の点から、異なる文化を深く理解するため、子どもたちの体験活動の根本的設計が重要であると言える。具体的には、継続的な実施及び系統的な教科書、指導書の作成が求められる。現状では教育に関する機関及び学校の上位役職者たちには、異文化間教育に対する理解が欠如している。彼らに対する異文化知識や

---

<sup>88</sup>前出、秦「中国の経済発展地域における国際理解教育の現状と課題：蘇州市工業園区における調査を中心に」 p.57。

理念などの研修も必要となる。

そのほか、秦（2014）の調査では、北京市、鄭州市、蘇州市の学校の国際交流活動は、ほぼ英語圏が対象であったと報告される。たとえば、北京市は中国人生徒とアメリカ人生徒との遠隔討論会を行い、鄭州市、蘇州市は生徒たちを英語圏の諸国に派遣している。相手国はすべて英語圏の先進国であり、その以外の地域及び国に関する国際交流活動はほとんどない。その結果、中国国内の少数民族やアジア各国への理解が疎かにされる傾向にある。その背景には、英語圏との交流は、児童・生徒たちの英語能力を向上させ、英語の成績も高めるという実践的理由が存在する。このため、交流対象の単一化も中国の「応試教育」のもう一つの課題であり、国際交流活動の超えなければならない問題となるのである。

一般の子どもたちにとって、国際理解教育の視点のみで国際交流活動を実施することについて、互いに理解することができず、英語に偏重することなどの課題も残っている。特に国際交流における表面的レベルの問題について、相互作用するような異文化間教育の視点を国際交流活動に入れる必要があると考えられる。

### 3.3 日中小中学校の間の国際交流活動について

次に、日本と中国それぞれの一般の子どもたちの国際交流活動の状況と課題を明らかにする必要がある。このため、中国と日本の小・中学校における国際交流の状況を対象として取り上げる。

まず、日本の国際姉妹自治体提携の状況について見ると、黒田（2007）は、「提携相手国は123ヶ国にのぼり、提携上位国及び提携件数は1位がアメリカで436、2位が中国で320、3位が韓国114、オーストラリア106、5位がカナダ70となっている」<sup>89</sup>と述べている。1972年には中国との国交正常化が図られ、1973年に神戸市と天津市の間で姉妹提携が結ばれて、中国との姉妹都市提携が開始されている。また、日本の国際姉妹校提携の状況についても、中国は提携先の上位国になっている（小学校は2位、中学校は3位）。提携の変化に着目すると中国との提携数は増加傾向にあるが、歴史問題をめぐる困難な政治状況を見捨てることはできない。

具体的な交流内容については、中国と日本の学校現場では主に相手校を訪問するという交流がみられる。たとえば、和歌山県立橋本高等学校ホームページ<sup>90</sup>に

<sup>89</sup>黒田明雄「学校間の国際交流に関する研究—姉妹都市提携と姉妹校提携を中心に」加計学園倉敷芸術科学大学『倉敷芸術科学大学紀要』第12期、2007年、p.250。

<sup>90</sup>和歌山県立橋本高等学校ホームページ「国際理解教育～中国済南第七中学との姉妹校提携～」、<http://www.hashimoto-h.wakayama-c.ed.jp/annai/kokusai/shimaikou.html>（2016年9月30日

よれば、2009年にこの高等学校の生徒7名・教員2名が、中国の姉妹校済南第N中学校を訪問した。具体的な学校訪問の活動の内容は、中国の伝統文化の切り絵や太極拳の体験と、日本語クラスの生徒との交流である。また、世界遺産である孔子廟や泰山も見学した。済南では3日間のホームステイを体験し、姉妹校の生徒達との親交を深めた。また2010年度には、済南第N中学校の生徒8名・教員3名が和歌山県立橋本高等学校を訪問し、初日は中庭での吹奏楽部、バトン部、ギター部による歓迎コンサートによる出迎えたを受けた。翌日は歓迎集会、中国語や書道の授業参加、茶道部による茶道体験をし、邦楽部による琴の演奏、空手道同好会、剣道部の生徒による演舞を鑑賞して、交流を行った。その後の2011年度、2013年度にも、互いに訪問し合っている。生徒と教師の人数を見ると、交流に参加している人の割合が非常に少ない。国際交流を体験できる対象を拡大することは、解決しなければならない姉妹校にとっての今後の課題だと考えられる。

そこで、陳(2013)<sup>91</sup>は、中国の教育の様々な状況を踏まえ、ICTを使って、日本と中国の間で遠隔授業を行った。授業の概要は、陳が日本の千葉、中国の重慶に関して紹介する内容を調査し、これらの内容を理解できる授業案とビデオを作成し、日本の千葉と中国の重慶の小学校に間に遠隔授業を行うというものである。授業の流れは、以下の通りである。

この授業プログラムを実施した結果、「国際交流や相手国について興味を高めることができる」、「相手(日本・千葉)から知っていたものがある」、「授業構成やビデオの有効性がある」、「重慶で通信情報技術—インターネットサービス電話を利用する効果がある」という四つの成果を得た。特に遠隔交流授業では、インターネットを利用し、費用の問題、交流の人数が限定される問題を解決することができる。しかし、いくつかの課題も残った。重要な課題の一つは、文化に関する以上のような考えは、日本の一般的なイメージや概念を紹介するのみであり、理解するレベルも低く、「国際理解」「文化理解」のレベルにはまだ到達していない。たとえば、なぜ日本人は寿司や桜が好きか、なぜ日本には神社が多いのかという疑問を持つ子どもが少ないということである。つまり、相手国について興味を持つことだけで終わらせずに、お互いに理解、勉強し、国々の価値観・人生観を分析・思考、深めて理解でき、積極的に共存することができるようにするため、

---

最終確認)

<sup>91</sup>陳卓君「中国の重慶における国際交流の授業開発—情報通信技術を利用した試行的な取り組み—」千葉大学教育学部授業実践開発研究室『授業実践開発研究』第6期、2013年、pp.17-24。

表4 「日本・千葉と中国・重慶について知ろう」授業の流れ<sup>92</sup>

---

●第1次 中国・重慶、日本・千葉について知ろう。

---

授業者は二つの地域を取材し、撮影する、ビデオを作って、第1次の授業で使う。ビデオを見た後、子どもたちの感想を聞いて、子どもたちの反応を見る。

何か問題があれば、簡単に交流する。

---

●第2次 「学校の日」の発表の準備をしよう。

---

二つの地域の子どもは、それぞれの「学校の日」というテーマを中心として、発表を準備する。そして「もっと知りたいことのリスト」と「一緒にやりたいリスト」を考える。

---

●第3次 「学校の日」を発表しよう、相手の質問に答えよう。

---

二つの地域の子どもは、それぞれ「学校の日」を発表し、お互いに感想を聞く、そして、「もっと知りたいこと」と「一緒にやりたいこと」に関わる交流をする。

---

●第4次 ショータイムと一緒にやりたいことをやろう。

---

子どもたちが自分の特技のパフォーマンスを行う時間である。そして、一緒にやりたいことを事前に準備して、一緒にやる。

---

また、それを行動に移すような交流内容にするための新たな授業プログラムを生み出して行く必要があると考えた。中国と日本の間の国際理解は、二つの国に相応しい内容を工夫・選定することが特に重要なのである。従って、ここからさらに発展させ、中国と日本の間で、互いに深く理解するため、学習価値がある知識を定着させる必要がある。

### 3.4 日中小中学校の間で互いに理解・交流の必要性

#### 3.4.1 日本と中国の交流に関する考察

前述したように、中国と日本の子どもたちの間で、互いに深く理解するため、文化間の相互作用を定着させる必要があるが、そもそも日本と中国の間で互いに深く理解する必要がある理由についても考察しなければならないと考えられる。

まず、日中小学校の間で互いに理解・交流の必要性を説明する前に、まず広く社会的背景を分析する必要がある。国レベルの視点から、日中交流の必要性を論じていこう。

---

<sup>92</sup>同上、p.19。

21世紀の現在、国際交流に対する新しい意義と理解とは何か。世界では、資本や情報が国境を越え、情報通信技術が著しい発展をし、グローバル化が進んできた。人はそれぞれ生活の仕方や、ものの考え方、価値観などが同じではない。むしろそうした多様性に富んでいることを積極的に評価できる態度を養うことが必要である。地域間の交流は、国際理解を促進し、異文化、地域の格差を理解するために存在している。同じ世界に生きる人間として、平和や人権など全人類に共通した利益を実現すべきである。そして、多様性を尊重し、異質と共存などの意識を持ち、互いに協力しさらに新しい価値を創造することは、非常に大切なことである。

1972年9月、日中両国政府は「日中共同声明」を発表した。声明は、「日中両国は、一衣帯水の間にある隣国であり、長い伝統的友好の歴史を有する。両国国民は、両国間にこれまで存在していた不正常な状態に終止符を打つことを切望している。戦争状態の終結と日中国交の正常化という両国国民の願望の実現は、両国関係の歴史に新たな一頁を開くこととなろう」<sup>93</sup>と指摘している。中国と日本は歴史的要因のために、長い時間緊張した関係にあったが、様々な研究分野において、隣国として、中国と日本との交流はますます盛んになっている。相互交流・相互理解は中国と日本の絆となり、さらに重要になる。

次に、崔（2012）の「中日相互の認識の現状、特徴と課題」<sup>94</sup>という研究に基づき、社会的、歴史的な観点から、1972年から現在まで約40年来中日の関係の発展の軌跡について述べていこう。

第一段階は、1972年から70年代末までのお互いに接近しつつある段階である。その段階の象徴的な事件は、1972年、日本の田中首相が中国に訪問し、そして日中政府は『日中共同声明』を発表したことである。その後、中国全土において「中日友好」教育が展開され、二つの国の間で友好交流の事例もますます増加していた。しかし、国交正常化が実現しても、各方面で交流することが困難な時代に置かれていたので、交流が少なく、情報源も単一であり、一般の中国国民は日本国民の生活の様子を知ることがなかった。70年代後期、中国の改革開放によって、日本における豊かな物質生活や生活習慣の文明化、現代化の情報がドラマや映像から中国に伝わった。当時、物資や文化が乏しい中国人の目から見ると、非常に羨ましいものであった。日中交流の増加に伴い、日本及び日本人のイメー

<sup>93</sup>外務省「日本国政府と中華人民共和国政府の共同声明」、  
[http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/china/nc\\_seimei.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/china/nc_seimei.html)（2016年9月30日最終確認）

<sup>94</sup>崔世広「中日相互認識の現状、特徴と問題」中国社科院日本研究所『日本学刊』第6期、2011年、pp.56-70。（原本が中国語、引用者が翻訳した）

ジは豊かな物質面と精神面を備える好ましいイメージとなった。

また、この1970年代に大きい集団間での友好交流が現れた。たとえば、張（2010）は、「1973年の上海と横浜、天津と神戸間の友好都市締結を発端に、友好都市は両国の中で雨後の竹の子のように次々と結ばれてきた。（中略）また、1978年10月に北京の近郊にできた「中日友好人民公社」と翌年の5月に西安の郊外で命名された「友好公社」は、日本の友好団体、自治体、政党と企業から物資と設備の援助を受けただけでなく、これらのルートを通して、数多くの中国の若い農民たちが日本を研修訪問し、専門知識と技術を覚えて帰国したのである」<sup>95</sup>と述べている。これによれば、日本と中国の交流人数が多くなったことがわかる。このような交流方式によれば、視野を広めることや知識を増やすこともできるのではないかと考えられる。

第二段階は1980年代始めから80年代末までの多様な交流の発展期である。80年代から、中国は改革開放政策を実施し、経済方面において持続的な高度成長期を迎えた。さらに、70年代末の中日平和友好条約の影響を受け、日中間での交流手段が多くなった。一方、中国の改革開放と現代化が加速するに伴い、中国と日本との間の経済的・文化的な交流はますます拡大し、中国人が日本に接触し、理解する機会が大きく増加した。それと同時に、日本に関する多様な情報、紹介及び研究は、中国人が日本への認識を深めるために、重要な作用を発揮した。教科書問題などの事件があって、一定のマイナスの影響も生み出したが、当時の大きな中日友好の雰囲気の中で、中国人は日本への肯定的な印象を変えなかった。その具体的な例として、日本と中国の文化交流において80年代の中日文化交流の内容には、茶道、華道、俳句などが加わった。さらに、留学生の相互派遣や研究人員間の交流事項も増加した。張（2010）は、「また、1978年に、初めて中日両国間で留学生の相互派遣が実現されて以来、留学生、研修生、視察訪問の専門家の相互派遣は、たえまなく続いている。とくに80年代中頃から、中国からの日本への自費留学生は急増し、中日の間で新たな留学ブームが到来したのである」<sup>96</sup>と述べている。ここから、現代における日中間に深く理解・学習するための一つの有効な道が開いた。つまり、これによれば、80年代の日中関係は友好であり、日中間の交流活動は多様である。

第三段階は、1990年代から90年代の末であり、相互疎遠・冷淡の時期である。

---

<sup>95</sup>張進山「戦後の中日民間交流の軌跡と特徴」中国社会科学院日本研究所、  
<http://japanese.china.org.cn/japanese/30827.htm>（2016年9月30日最終確認）

<sup>96</sup>同上。

90年代に入り、東西冷戦が終息し、国際的の新しい秩序が形成されつつあった。中国と日本は国それぞれの発展の段階が異なる。中国は、経済大国への転換という目標を提起し、経済発展が新しい段階に入った。日本は相互依存関係が深化すると同時に、信頼関係の乏しい競争と摩擦の表面化が始まった。

第四段階は、2000年から現在までの相互認識が悪化する段階である。21世紀に入り、中国と日本の感情が深刻な対立をみせ、相互の印象も著しく悪化してきた。この段階の日中関係は、政治的面の影響を受けやすく、特に、2010年の中国漁船衝突事件が発生し、二つの国の政治面だけではなく経済面でも悪い影響をもたらしていた。

以上四つの段階には、40年間の日中関係の発展が接近から友好に、また疎遠から悪化に、という流れが見られた。現在、日中関係が悪化している理由について、歴史問題を除く、政治面の対立も一番大きな原因と考えられる。日本と中国の政治体制が異なり、民族構成や国内の発展状況などの国情もまったく違うため、多少の摩擦や葛藤が現れるのは理解できる。しかし、現在の状況は決して正常ではない。二つの国は、70年代や80年代のように政治面の対立及び歴史問題を克服し、文化、経済、科学などの領域における交流や互い協力を強化する必要がある。また、二つの国の国民は相互認識や相互理解を深化させる手段も探究しなければならない。このため、現時点の両国の関係を把握するため、二つ国の国民の相互理解や相互認識に関する態度を把握することが必要である。次の節は、「日中共同世論調査」の視点から国民の態度を考察する。

#### 3.4.2 現時点の日中関係に関する調査

上述した「日中共同世論調査」とは、日本の特定非営利活動法人言論NPO<sup>97</sup>と中国日報社が、日中の両国民を対象とした世論調査である。日中両国民の相互理解や相互認識の状況やその変化を継続的に把握するために行われているものだ。2014年に実施された「第10回日中共同世論調査」<sup>98</sup>（以下“世論調査”に略）について考察する。

まず、日中両国民の相手国に対する印象については、以下の図1に示されてい

<sup>97</sup>日本の言論NPOは、日本のメディアや言論のあり方に疑問を感じた多くの有識者が、日本の主要課題に対して建設的な議論や対案を提案できる新しい言論の舞台をつくろうと2001年に設立した認定NPO法人である。[www.genron-npo.net/about/](http://www.genron-npo.net/about/)（2016年9月30日最終確認）

<sup>98</sup>日本の言論NPOと中国日報社は、日中の両国民を対象とした共同世論調査を実施した。この調査は、最も日中関係が深刻だった2005年から日中共同で毎年行われているものであり、今回で10回目となる。調査の目的は、日中両国民の相互理解や相互認識の状況やその変化を継続的に把握することにある。「『第10回日中共同世論調査』結果」、<http://www.genron-npo.net/world/genre/tokyobeijing/10-7.html>（2016年9月30日最終確認）

る。

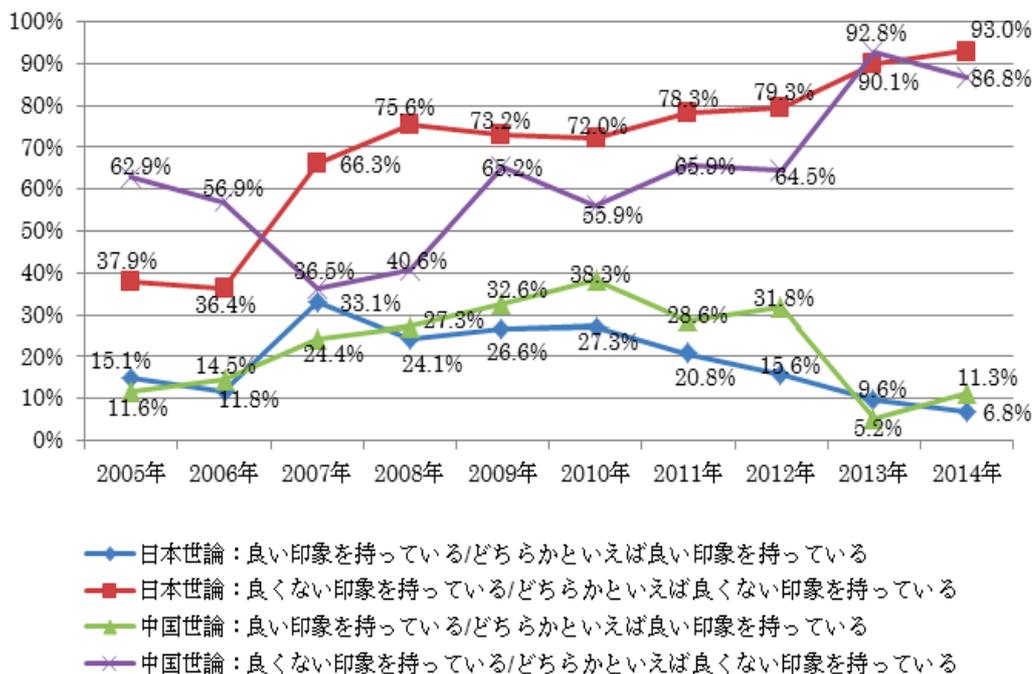


図1 日中両国民の相手国に対する印象<sup>99</sup>

この図を見ると、日本人の「相手国に対する印象」は、「良くない」が93.0%となり、調査開始以来、初めて9割を超えた前年（90.1%）よりもさらに悪化したということを示している。そして、世論調査は中国人に関して、「一方、中国人では『良くない印象』は86.8%となった。依然として8割を超えているが、過去最悪の92.8%だった昨年よりは改善している。また、『良い印象』（『どちらかといえば良い印象』を含む）を持っている中国人は、昨年の5.2%から今年は11.3%と2倍以上に増えている」<sup>100</sup>ことを示している。すなわち、日本人は、中国側へ現在、過去最も悪い印象を持っている。中国人は2013年に日本側への印象が最も悪く、その後も依然として厳しい状況だと考えられる。

そして、世論調査で「日本人が中国に『良くない印象』を持つ最も多い理由は、「国際的なルールと異なる行動をするから」が55.1%（昨年47.9%）で、「資源やエネルギー、食料の確保などの行動が自己中心的に見えるから」が52.8%（昨年48.1%）で続いている」<sup>101</sup>となっている。この「国際的なルール」の具体的な

<sup>99</sup>同上。  
<sup>100</sup>同上。  
<sup>101</sup>同上。

内容について、世論調査は明記していないが、おそらく日本人は中国側の政治面の行動に対して不満であると考えられる。中国側から見ても同じであり、二つの国とも、相手に対する悪い印象を持っている最も多い理由は、すべて政治的なものである。これらから、現在、政治的な影響が一番多い理由であることが分かる。

もう一つの調査項目、相手国や日中関係については、以下図2に示されている。

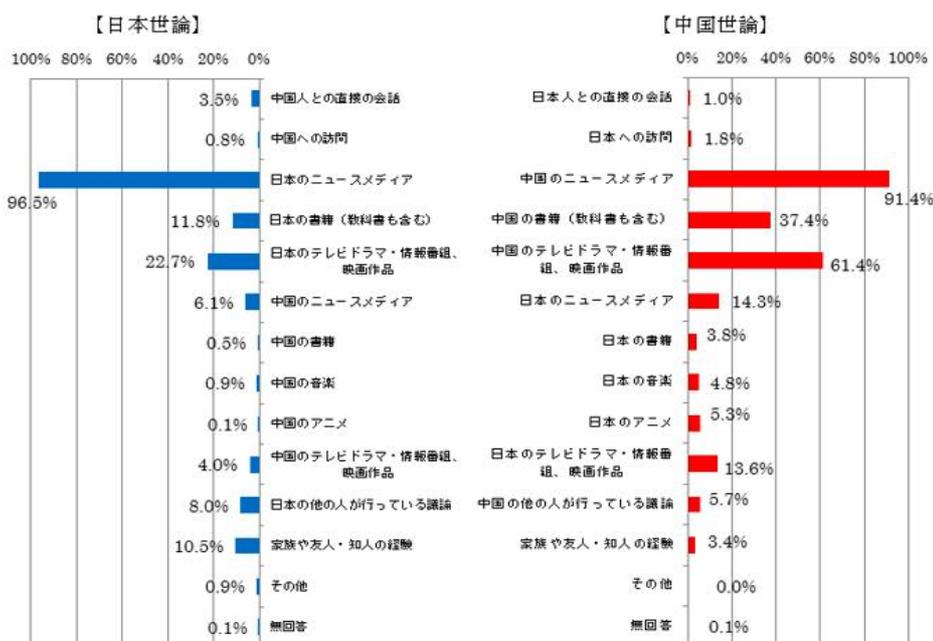


図2 相手国や日中関係についての情報源<sup>102</sup>

図2を見ると、まず日本人の中国に対する認識は日本のテレビニュースに依拠していることがわかる。そして、世論調査には、「また、日本人の中国に関する情報源は96.5%（昨年95.0%）が『日本のニュースメディア』であり、その76.1%（昨年79.7%）が『テレビ』から最も多くの情報を得ている。つまり、日本人の中国に対する印象や認識は、中国への訪問や中国人との会話といった直接情報ではなく、日本のメディア、とりわけ『テレビ』に依存して形成されている可能性が高く、この構造もこれまでと同様である」<sup>103</sup>と説明されている。ここから見ると、日本人が中国に認識する手段は極めて限定的である。ニュースやテレビの放送は、ただ中国の現状や事件を述べて、その裏の原因や文化的、歴史的な背景をよく説明することがない。そして、テレビのニュースで報じられる中国は一面的な中国で、中国の映画、出版物、ドキュメンタリーなどの情報源を利用すれば、

<sup>102</sup>同上。

<sup>103</sup>同上。

より多くの視点から中国や中国人を認識することができる。このため、中国を深く理解するために、その他の情報源を利用しないと、日本人は、中国について多角的に、客観的に認識することができないと考えられる。

その一方で、「中国人の日本人との直接交流の度合いはさらに乏しいが、認識形成において情報源は日本人より多様化している。ニュースの他、ドラマ、映画、出版物も比較的多く利用している」<sup>104</sup>と述べている。つまり、中国人には日本を理解する情報源が多い。特に中国の若い人は中国のテレビドラマ、映画、書籍から情報をもらえるだけでなく、日本のドラマや映画、特にアニメを通じて日本に対する印象を形成していることがうかがえる。

その他、調査事項によれば、中国人も日本人も、互いの関係の重要性に対する認識は徐々に減少している。関係の改善方法について世論調査は詳細に述べていないが、具体的改善方法について深く考えていないと考えられる。

以上の調査結果から見ると、現在日本と中国の国民間の関係は楽観的な状況ではない。特に、中国人は現在、経済面の協力をより重視し、日本人は文化面もしくは人と人の関係性の理解を重視している。これには、国の各方面の発展状況が関係していると考えられる。中国は先進国としての日本とかなり格差があるが、経済面など、実利的なことを追求しすぎるあまり、国民感情を内面から改善することができない。今後中国は、日本側のような精神面や人と人のコミュニケーションなどの領域を重視することが期待される。しかし両国は持ちつ持たれつで切っても切れない関係だということは両国ともに認めている。今回の調査の結果からみても、日中が相互に理解できる方法を見出し、民間の交流を発展させることが望まれている。数多い課題の中で、最も重要なのは、どうすれば文化や人々の交流を盛んにできるのかということである。そして、どのような人に国際交流が最も必要なのかを探ることも課題となっている。

本研究の視点から見ると、両国民ともに二つの国の関係の重要性を認識し、民間的な交流を発展させたいと願っている。しかし、交流の内容や方法を深化し、互いの文化的な「相互作用」をきちんと認識しない限り、二つの国の関係は改善できない。その他、このような学習や活動にとって、世界観や価値観がすでに形成された大人より、まだ成長途中の子どもを対象としたほうがより効果的だと考える。このため、次の節では、小学校の段階を中心に、日中間の文化理解の必要性や課題を説明する。

---

<sup>104</sup>同上。

### 3.4.3 小学校における日中間文化理解の必要性和課題

日本のような先進国の子どもたちでも、発展途上国の子どもたちにも、異なる文化を理解・尊重する態度を育成することは必要である。その理由は、たとえば日本の場合、日常生活において異なる文化や生活習慣を持つ外国の人々と接する機会が多くなり、相互に理解し協力し合いながら生活することが求められるようになることが予想されることである。一方、中国の場合、特に内陸の児童たちはまだ外国文化に接触機会が少ない。しかし、将来、外国や発達している地域に向いて様々な異文化に接する機会や、中国や自分の故郷を離れて外国の社会の中で暮らすような機会が今以上に増えることが予想される。

現在、日本の小学校の「総合的な学習の時間」の中で国際理解活動は一つの柱となっている。また 2011 年度から小学校教育において英語が必修化されているが、このことの背後にはグローバル化に伴う国際的理解、異文化理解の必要性がある。このように、欧米文化に重点を置く国際理解・国際交流活動は盛んである。アジア各国は、特にこの国際理解活動を積極的に取り上げるべきである。東アジア共同体評議会（2014）（以下「報告書」とする）は、日中関係について「両国間の貿易、投資の増加などにより、特に経済面において相互依存をますます深めている。さらに、日中の GDP が世界全体の 20%を占めるようになるなど、もはや両国の関係は単なる二国間関係でなく、世界の趨勢に多大な影響を及ぼす間柄にあるといえる。そのため、日中が良好な国家間関係を築き、政治的にも、経済、環境、エネルギー、文化交流など様々な分野においても共同歩調をとることが出来れば、世界における諸問題解決のために多大な貢献をすることが出来るであろう」<sup>105</sup>と述べている。こうしたことをふまえれば、日本と中国がうまく交流し、共に発展することは、世界の各国の健全な発展と平和維持のために不可欠であると考えられる。

実際には、日本でも中国でも、青少年段階は国際交流を行うための最も良い時期だと考えられる。その理由が「報告書」には以下のように述べられている。「第一に、青年交流は、本来的には未来志向であること、第二に、多感な世代が交流してお互いの真の姿や本音に触れる機会を増大することは、国家間関係の次元でも互いの国に対するイメージに大きな影響を与え、世界の平和や繁栄にもつながること、第三に、問題意識の共有を通じて地球規模の困難な課題の解決に主体

---

<sup>105</sup>東アジア共同体評議会「平成 25 年度 日中研究交流支援事業『未来志向の関係構築における日中青年交流のあり方』報告書」、2014 年、p.1. <http://www.ceac.jp/j/pdf/study2/201402.pdf> (2016 年 9 月 30 日最終確認)

的に取り組む意欲も生まれること、等」<sup>106</sup>

しかし、中国の青少年段階、特に中・高校生には、進学のための知識学習や試験が非常に多くの時間を占めてきた。このような受験競争は中国の児童生徒にとって良くない影響をもたらした。たとえば、「成績第一」という考え方による、教師や保護者から児童たちの心理への関心の不足である。学習負担が重いため、創造力を育成する時間も不足するようになった。これに対して、中国政府は、過去の受験偏重教育を反省し、1990年代「素質教育」<sup>107</sup>という新たな教育方針を示した。現在では、「新しい教育課程の編成方針として、教育部は、過度に知識の伝授を重視していた傾向を改め、児童生徒に積極的で主体的な学習態度を養うために、基礎知識と基礎技能の習得と同時に、学習過程を重視する」<sup>108</sup>ということになっている。しかし、上海市や山東省など人口が多いところでは、進学の競争は相変わらず激しい。このため、現在の教育現場において、素質教育の実施はかなり困難である。

そのため、現在も、中国の中・高校生の授業は非常に多く、宿題・試験も多く出される。勉強以外の時間に、自分の考え方で問題を考える時間はほとんどなく、他の重要な能力（創造能力、国際理解能力など）の育成はかなり難しい状況である。

現時点において、中国の小学校段階の児童たちは、中学・高校段階の生徒と比べて、時間に余裕があり、多様な能力を育成することが可能である。そのため、実現性という視点から、日中小学校段階で幅広い国際交流を行うことは、さらに「日中間の文化理解」を進める有効な手段になる可能性がある。

また、田淵（1991）は、「国際理解の教育は、単に知識の習得や概念の獲得を目指すのではなく、学習者に態度の変容や価値観の変革を迫る実践性の強い性格のものである。そのためには直接的な人間交流を組み込んだ学習形態がもっと

---

<sup>106</sup>同上、p.1。

<sup>107</sup>素質教育とは、21世紀に向かう中国の全民族の基本素質を高めることを主旨とする教育であり、その具体的な内容は、①素質教育は単純に受験に対処する教育ではなく、教学大綱（学習指導要領に当てる）に規定されるすべての教科によって授業を行い、徳育、知育、体育、美育などの諸方面を調和的に発展させる。②素質教育は生徒の個性に応じて授業を行う。③学習方法において、生徒の自主学習能力と自己発展能力を強調する。④学習評価において、素質教育は「等級＋特長＋評語」という形で生徒を評価し、生徒の身心の全面的な発展を強調する。⑤教育管理において、素質教育は科学的な目標管理を行う。以下のページを参考にした。『素質教育』の実施上の問題点に関する思考（A View on the Problems of Quality Education）」、<http://www.jctsc.co.jp/1194.html>（2016年11月30日最終確認）

<sup>108</sup>SciencePortal China「中国の基礎教育課程改革の現状と課題—PISA調査結果を踏まえながら—」、[http://www.spc.jst.go.jp/hottopics/1105elem\\_sec\\_education/r1105\\_higurashi.html](http://www.spc.jst.go.jp/hottopics/1105elem_sec_education/r1105_higurashi.html)（2016年9月30日最終確認）

も効果的な方法である」<sup>109</sup>と述べている。すなわち、小学校段階においては、直接交流が重要であり、国際理解や文化理解において最も効果がある手段である。特に、子どもたちの異文化に対する気づきや感受性は、直接体験や対話から生まれることが多い。人間対人間の国際交流は、学習形態としても良い方法である。

しかし、日中間において小学校段階で円滑に国際交流を行うためには、以下の課題を克服しなければならない。

まず、日中間でうまく国際交流を行うため、歴史的影響を意識しなければならない。特に近現代史に関する両国の歴史教育を重視しなければならない。歴史教育は子どもたちの価値観、歴史観の形成に与える影響が大きい。また、学校での歴史教育だけでなく、社会教育としての歴史教育に対しても注意を向ける必要がある。笠原（2003）も「実際には、学校教育が個人の歴史観形成に与える影響力は限られたものである。その形成は、往々にして新聞・雑誌・映画・テレビ番組・インターネット、及び老人たちによって語られる体験談など、長期的な社会教育によって行われることの方が多いと考えられる」<sup>110</sup>と述べている。歴史教育については、中国側でも日本側でも重視する必要がある。さらに、歴史教育ついて、笠原（2003）は、「教育に従事するものとして、歴史教科書が子供たちに正しい説明をすることと、新聞やテレビ・映画が歴史事実を尊重することを期待する」<sup>111</sup>と述べている。現時点において、短い時間でその問題を改善することは困難である。しかし、同じような歴史問題として、ドイツとフランスというヨーロッパの国家間でナチスの歴史問題に対応したことは、中国と日本の歴史問題にとって参考になるだろう。

そして、小学校段階の子どもたちは、まだ相手の国の言語や中立言語としての英語の能力を備えていない。今後、交流活動を活発化させるために、本研究において、第一に、教師は少なくとも両国にとって中立的であり、かつ国際的な汎用性のある英語を把握し、授業や交流活動の時、児童たちの通訳者を担当する。第二に、言語を多く使う授業や交流活動を控えて、実際に作ったもの（図、文章）や体で表現できるもの（姿勢や動作など）を使って、双方ともに交流を活性化するという2点が必要であると考えられる。

また、国際交流は、日本や中国の都市部で積極的に行うだけではなく、できる

---

<sup>109</sup>田淵五十生・大宰府西小学校国際交流委員会「小学校における国際交流の重要性と成立条件—太宰府西小学校の日韓姉妹交流の実践から—」奈良教育大学教育研究所『奈良教育大学教育研究所紀要』第27巻、1991年、p.13。

<sup>110</sup>笠原祥士郎「日本と中国の歴史教育について—近現代史を中心として—」北陸大学機関リポジトリ『北陸大学紀要』第27号、2003年、p.202。

<sup>111</sup>同上、p.212。

だけ日本の地方の子どもや中国の農村部、少数民族の子どもについても交流の場も作る必要がある。特に、中国は地域格差が激しく、一部の農村部には、いまなお経済的な理由で小中学校に通えない貧困農村の少年、少女がいる。政府支援やNPO及び企業との連携による資金や人力資源の調達も期待されている。しかし、国際交流を行うことがやはり必要であり、現在中国の条件は困難であっても、できるだけ積極的に実施していくことが求められる。

#### 4 漢字と日中の異文化理解

第3章では日本と中国の子ども間の交流の機会や手段を増やすための努力について述べた。前述のように、「相互作用」のある異文化間教育においては、交流テーマもしくは交流内容の選定が非常に重要になる。また、国レベルにおいて「相互作用」という表現は、文化的共通性を持っていると考えられる。そのように考えると、日本と中国の互いの文化の共通点として、漢字を考えるべきであろう。それはなぜか。

日本と中国の間の異文化理解において、地理的条件が非常に重要な意味を持っている。地理的な条件の影響で、共通要素や類似現象が多い。それは伝統文化から生まれたものである。我々はその共通基盤を把握することによって、そこから派生する下位文化（サブカルチャー）の理解が容易になると考えられる。この共通の伝統文化の中には、儒教や仏教、漢字などがある。今回の実践授業を行う小学校段階では、儒教や仏教に関する知識は漢字の知識よりわかりにくいと考えられる。したがって、本研究では、漢字という題材を取り上げる。

そして、日本と中国の漢字の共通性に関することを述べる前に、日本と中国におけるそれぞれ漢字の歴史や発展について論じる必要がある。

##### 4.1 中国における漢字の歴史と発展

漢字は、漢民族が使用してきた文字であり、現在中国において共通の文字になっている。現在では中国だけでなく、日本、韓国、シンガポールなどの国でも漢字が使われている。漢字の一つの大きな特徴は、その形の大部分が四角形であることと、意味を表すことである。漢字には象形・指事・形声・会意・転注・仮借（かしゃ）などの種類があり、文字数は数万字ある。具体的な文字数についてははっきりと把握することはできないが、李(1999)によれば『中華大字典』には48,000字以上の文字が収録されている<sup>112</sup>。

以下では、中国における漢字の起源から現在までの発展の過程を整理する。漢字の起源については、現在はまだ謎である。ただし、文字の発明に関する伝説は、中国において古くから伝えられている。その中の代表的なものは蒼頡（そうけつ）創字説、結繩説、絵画説、八卦説などである。たとえば、蒼頡創字説では、漢字は蒼頡という人物が発明したとされている。中国の戦国時代末期の政治経済思想書『荀子・解蔽』には「古者好書者衆矣、蒼頡独伝者、尗也」（古代では、字が

---

<sup>112</sup>前出、李『日中文化比較研究』p.21。

好きな人は多いが、蒼頡は心を込めてしたので、彼の名声のみ伝わってくる) <sup>113</sup>の記載があり、戦国時代末期の多くの思想を集約した書物『呂氏春秋・君守』には「奚仲作車、蒼頡作書」(奚仲が馬車を作り、蒼頡が字を作った) <sup>114</sup>という記載もある。結繩説について、文(2003)は「結繩は繩を結び、その結んだ数や大きさを物事の数などを記録するのである」<sup>115</sup>と述べており、この結ばれた繩が漢字の起源であるとされる。しかし、結繩という方法は、中国だけでなく、他の地域や民族にも使われていたものである。また、この結繩はただ数字を記録したものであるため、文字の起源としては説得力がないだろう。

漢字の起源は謎だが、字体としては、現存する最も古い漢字は甲骨文字(こうこつもじ)だということが確認できる。紀元前16世の殷の時代に、甲骨文字は誕生した。また、文(2003)は、「甲骨文字は主に占いのため使われていた。王様が農業生産、祭祀、戦争など重要な事柄を神に問うために、亀の甲羅や牛の骨を焼く。熱を加えると、亀甲や骨の表面には線状のひび割れが走る。そのひび割れの形を見て吉凶を判断する。占って得た結果を亀甲や骨に刻む」<sup>116</sup>と述べている。つまり、甲骨文字は漢字の最初の形であり、最も古い漢字と考えられる。そして、甲骨文字は系統的な文字として、中国の商時代の政治、文化及び経済状況を記録している。

そして、金文(きんぶん)が生まれた。文(2003)によれば、「金文とは銅などの金属で作った容器・兵器・貨幣・印章などに鋳出したり刻み付けたりされた文字のことである」<sup>117</sup>。金文が使用された時代は、主に殷周(いんしゅう)時代(紀元前1600年～紀元前256年)より秦漢(しんかん)時代(紀元前221年～紀元221年)頃までである。そして、青銅器や鐘鼎の銘に書かれている場合が多いため、「金文」は「鐘鼎文」と呼ぶ場合もある。

その後、紀元前221年、秦は天下を統一し、秦の始皇帝も文字を統一した。文(2003)によれば、「国内統治するため、度量衡の統一と全国共通の文字を定め、地方色の強い文字の使用を禁止し、秦の文字である篆書や隸書を全国隅々まで使用するよう強制した」<sup>118</sup>のである。その篆書には、「大篆(だいてん)」(統

---

<sup>113</sup>国学網「解蔽第二十一」、<http://www.guoxue.com/book/xunzi/0021.htm> (2016年9月30日最終確認)

<sup>114</sup>国学網「呂氏春秋審分覽第五」、<http://www.guoxue.com/book/lscq/0017.htm> (2016年9月30日最終確認)

<sup>115</sup>文楚雄「中国のことばと文化・社会(一)」立命館大学産業社会学会『立命館産業社会論集』第39巻第2号、2003年、p.123。

<sup>116</sup>同上、p.124。

<sup>117</sup>同上、p.124。

<sup>118</sup>同上、p.125。

一以前)と「小篆(しょうてん)」という二つの種類がある。

小篆から、漢字の字形の規範化が始まっていた。現在、中国で通用している楷書では、字形が安定し、筆画数と筆順もきちんと規定された。総じて、漢字の発展は、現在に至るまで 6000 年以上に及んでいる。その変化の道筋は、「甲骨文→金文→篆書→隸書→楷書」という過程であると考えられる。

以上の漢字の発展は、ただ字形から整理したものであるが、漢字の造字法や運用法から見ると、漢字には「象形・指事・形声・会意・転注・仮借」という 6 種類があり、これは「六書」と呼ばれる。たとえば、「象形」はある事象の形を象るという意味である。つまり絵文字を簡略化した文字である。そして、その後、日本も、中国の「六書」を運用し、多くの「国字」を作って、全国に通用させている。

現在、中国で使用されている漢字は「簡体字」と呼ばれる。簡体字が制定されるまでの経緯が複雑なので、ここでは中国の文字改革の大まかな流れのみを整理する。

1919 年、中国で五四運動という国民的愛国運動が行われた時、銭玄同<sup>119</sup>は文字改革を主張した。そして、1949 年中華人民共和国が成立後、文字改革委員会が設けられ、漢字の簡略化政策を採用した。当時、中国では多くの非識字者が存在していた。王(2009)によれば、「1949 年全国 5.5 億人口の中で、80%の人が非識字者であり、農村部の非識字者の割合は 95%以上であった」<sup>120</sup>と述べている。その後、金子(2012)によれば「1955 年の《第一批异字体整理表》、1956 年の《汉字简化方案》を経て、1964 年《简化字总表》が発表され」<sup>121</sup>、その後、簡体字が中国大陸に通用している。

一方、近代において日本も漢字を簡略化した。現在、日本で使用している漢字字体は「新字体」<sup>122</sup>と呼ばれる。日本の新字体と中国の簡体字の例を、表 5 に示す。

---

<sup>119</sup>銭玄同(1887—1939)言語学者、中国五四運動の先駆者の 1 人とされる。

<sup>120</sup>王愛雲「中国共産党与新中国文字改革(1949—1958)」中共福建省委党校福建行政学院『党史研究与教学』第 6 期(総第 212 期)、2009 年、p.12。(原文は中国語、引用者が翻訳した)

<sup>121</sup>金子眞也「中国における繁体字に関する議論」龍谷大学『龍谷紀要』第 34 巻第 1 号、2012 年、p.57。

<sup>122</sup>漢字の字体で、古くから使われていた形を改めて、新たに用いられるようになった字体。以下のアドレスを参考にした、

<https://kotobank.jp/word/%E6%96%B0%E5%AD%97%E4%BD%93-537633> (2016 年 11 月 30 日最終確認)

表 5 日本の新字体と中国の簡体字の例

日本の新字体	愛	仏	豊	虫	写	変
中国の簡体字	爱	佛	丰	虫	写	变

表 5 を見ると、日本の新字体と中国の簡体字の字体が完全に同じものもあり、違うものもある。簡体字の「爱」や「丰」は、新字体より筆画が少なくなっている。他方、「佛」は日本の新字体では簡略化されているが、中国の簡体字では簡略化されていない。また、簡体字「变」は、日本の「変」とは微妙に異なっている。

簡体字や新字体は昔の漢字と比較すると、構造が簡単である。児童・生徒や非識字者の人々が文字を習うことが容易になったが、問題も生じた。馮（2005）は「たとえば簡略化する時に異体字を廃止し、同音字に合併することが多すぎたため、簡体字と繁体字の正確な対応関係を失い、筆画数の減少を強調しすぎたため、一部の文字では長方形の四角い文字（方塊字）という漢字がそもそも持っていたバランスを書いた文字（たとえば“广”“厂” [廣と廠]）が生まれるということもあった」<sup>123</sup>という問題を指摘している。そして現在、台湾、香港は繁体字を使用し、中国大陸、シンガポールは簡体字を使用している。そのため、漢字文化圏における「簡繁之争」という論争があり、今でもこのような論争が絶えない。

#### 4.2 日本における漢字の歴史と発展

世界の多くの民族は、もともと独自の文字を持っていない場合が多い、日本はその中の一つである。日本は古代中国から文字、服装、建築など、様々な文化を学んだ。そして、絶えず発展することによって、自国の特色を加えてきた。その中で最も大きく影響を受けたのは、言語としての漢字である。漢字が日本に渡来したのは古く、馮（2005）も「漢字文化圏のなかで、日本は漢字を残し漢字を使用することが最も多い国であり、漢字を使用してからすでに 1500 年以上の歴史がある。しかも日本の古代漢字の文献の資料の多さは、中国以外のいかなる国よりも多い」<sup>124</sup>と述べている。日本では漢字を研究してきた時間が長く、研究内容も広くて深いと考えられる。

現代日本語には漢字、ひらがな、カタカナ、ローマ字がある。この現在の日本

<sup>123</sup>馮良珍「漢字簡略化の歴史的根源とその現状について—あわせて日本と中国における漢字改革を比較する」横浜国立大学教育人間科学部『横浜国立大学教育人間科学部紀要. II』、2005年、p.75。

<sup>124</sup>同上。

の文字の構成は、実に長い時間を経てできたものだ。諏訪（2006）によると、「これらの形態になるまでには約千五百年以上の月日がかかっている。少なくとも4世紀まで、原始と古代の日本人が倭人と呼ばれていた時代には表記方法としての日本語(倭語)は確立してはいなかった。口頭伝達が主な手段でその上に補助手段の文様があった」<sup>125</sup>。その後、後漢の光武中元2年（57年）、中国の皇帝が日本へ「漢委奴国王」と刻まれた金印を贈った時から、日中両国間の文字の交流が始まった。

その後、古代中国と日本の交流がますます頻繁になり、漢字文化が日本に浸透し、日本語は漢字文化を受容して大きく変化した。特に唐の時代に日中文化の交流が盛んとなった。劉ら（2010）によると「日本からの遣唐使吉備真備は漢字の偏と部首を参照して、日本語のカタカナを作った。それから、留学僧空海が漢字の草体を利用して、日本語の平仮名を創立したという伝説も生じた。そして、日本が自分の文字をもった」<sup>126</sup>という。そのため、あらゆる面で日本化を伴いながら、日本語を表記するための文字として変容してきた。

現在中国で使われている漢字と日本で使われている漢字は、同じ根源を持っている。しかし、長い時間が経って、それぞれ別の道で発展してきた。日本側は漢字、カタカナ、平仮名、ローマ字を混用し、中国側は漢字字形を簡略し、さらに漢字の意味も時代によって変わってきた。たとえば「娘」という漢字の意味は、日本の場合は一般的に若い女性や女性の子どもを指す。これは古代中国と同じである。しかし、現代中国においては、「娘」は一般的に「お母さん」を指している。このように日本でも中国でも国の事情により、文字の使い方も変わっている。しかし、文字の根源が同じであり、漢字の「相違性」だけでなく必ず「共通性」もある。文字の発展はそれぞれであるが、互いに影響しあう場合も多い。たとえば近代、日本が西洋文明を受け新しい和製漢語を作って、また中国に伝わったことがその一つの例である。こうしたことを踏まえれば、漢字文化間の「相互作用」を重視し、その上で、新しい情報伝達手段を作れば、日中間、もしくは東アジアの間の相互理解をうまく促進することも可能ではないだろうか。

---

<sup>125</sup>前出、諏訪「異文化コミュニケーション：漢字の発達と社会文化的遺伝子」p.182。

<sup>126</sup>劉明・鷺尾紀吉「中国語の日本語への影響」中央学院大学商学部・法学部『中央学院大学 人間・自然論叢』電子版第31号、2010年、p.167。

### 4.3 漢字の特長

#### 4.3.1 共通性と相違性という二重性

前節では、日本と中国における漢字の歴史や発展について述べた。ここでは、日本と中国の漢字の共通性と相違性について検討していく。

中国社会科学院<sup>127</sup>文学院の李兆忠は、漢字について次のように述べている。

四角い小さな漢字の中に、二つの異なる世界が存在している。

一つはもともと中国で造られた中国製、もう一つは日本で改造された日本製である。この二つの世界は、「あなたの中に私がいて、私の中にあなたがいる」ようなもので、コミュニケーションにはとても便利だ。しかし多くの場合、この両者は、うわべは親しそうに見えて実は心が通わず、似て非なるものなのである。<sup>128</sup>

本研究にも同じような感覚がある。日本と中国の漢字は、様子など表面的なものが類似している一方で性格など内面的なものが違う場合もある。つまり、日本と中国の漢字は共通性と相違性の両方を持っている。相違性について見ると、李(1999)は「中国は殷の時代の沢山の甲骨文字を継承しながら使ってきたのに対して、日本は中国から文字を借りて、仮名を発明したので、漢字と仮名をともに使っている」<sup>129</sup>と述べており、二つの国の漢字の歴史が異なるということが述べられている。それにしても、二つの国の漢字には、共通性が高い。このような共通の文化である漢字を題材にする活動を行うおとによって、両国の子どもたちは言葉が通じなくても共感的理解を深めることができるであろう。また、日中それぞれの漢字の「同じところ」と「違うところ」に関する知識を勉強・交流することで、日中それぞれの子どもたちは漢字への興味や学習意欲を持ちやすくなると考えられる。

一方、日中それぞれの漢字の字形には、類似しているものや一致しているものがある。これらは日中双方の子どもたちが互いの言語を理解しやすい点であると考えられる。以下では、日本と中国における漢字の字形と意味を考察する。

---

<sup>127</sup>前身は中国科学院哲学社会科学部(1955年に発足)。1977年より独立して中国社会科学院となる。

<sup>128</sup>李兆忠「漢字が表す二つの世界」、人民中国

<http://www.peoplechina.com.cn/maindoc/html/200303/fangtan.htm> (2016年9月30日最終確認)

<sup>129</sup>前出、李『日中文化比較研究』p.74。

まず、日中の漢字は共通しているものが多く、広く使用されている。中国人民網日本語版は、「中日韓の共通常用漢字 800 字、選定草案が発表」<sup>130</sup>と報じている。このように共通漢字があるほか、日中の漢字には「同形語」がある。大河内(1997)は「(前略) いずれがいずれを借用したかを問わず、双方同じ漢字(簡体字は問わない)で表記されるものを同形語と呼ぶようになったと思われる」<sup>131</sup>と定義している。以上のように、800 字の共通漢字を含め、日本と中国において大部分の漢字は、「同形」である。なお韓国では現在ハングルが通用しており、漢字で表記する場合は少ない。

図 3 は、800 字の共通漢字の一部分である。

番号	繁体字	中国	日本	韓国	番号	繁体字	中国	日本	韓国
1	一	一	一	一	41	太	太	太	太
2	乙	乙	乙	乙	42	日	日	日	日
3	人	人	人	人	43	方	方	方	方
4	十	十	十	十	44	分	分	分	分
5	二	二	二	二	45	五	五	五	五
6	又	又	又	又	46	心	心	心	心
7	力	力	力	力	47	水	水	水	水
8	九	九	九	九	48	月	月	月	月
9	八	八	八	八	49	化	化	化	化
10	七	七	七	七	50	比	比	比	比
11	入	入	入	入	51	公	公	公	公
12	刀	刀	刀	刀	52	内	内	内	内
13	丁	丁	丁	丁	53	今	今	今	今
14	上	上	上	上	54	手	手	手	手
15	大	大	大	大	55	六	六	六	六
16	子	子	子	子	56	反	反	反	反
17	小	小	小	小	57	少	少	少	少
18	下	下	下	下	58	文	文	文	文
19	工	工	工	工	59	夫	夫	夫	夫
20	三	三	三	三	60	火	火	火	火
21	口	口	口	口	61	元	元	元	元
22	己	己	己	己	62	毛	毛	毛	毛
23	女	女	女	女	63	王	王	王	王
24	山	山	山	山	64	友	友	友	友
25	己	己	己	己	65	支	支	支	支
26	及	及	及	及	66	片	片	片	片
27	才	才	才	才	67	木	木	木	木
28	千	千	千	千	68	引	引	引	引
29	土	土	土	土	69	止	止	止	止
30	士	士	士	士	70	父	父	父	父
31	久	久	久	久	71	尺	尺	尺	尺
32	凡	凡	凡	凡	72	午	午	午	午
33	亡	亡	亡	亡	73	牛	牛	牛	牛
34	寸	寸	寸	寸	74	戸	戸	戸	戸
35	川	川	川	川	75	氏	氏	氏	氏
36	弓	弓	弓	弓	76	井	井	井	井
37	夕	夕	夕	夕	77	丹	丹	丹	丹
38	不	不	不	不	78	仁	仁	仁	仁
39	中	中	中	中	79	凶	凶	凶	凶
40	天	天	天	天	80	匹	匹	匹	匹

図 3 中日韓の共通常用漢字 800 字、選定草案が発表 (一部)<sup>132</sup>

<sup>130</sup> 人民網日本語版「中日韓の共通常用漢字 800 字、選定草案が発表」、  
<http://j.people.com.cn/94473/8319095.html> (2016 年 9 月 30 日最終確認)

<sup>131</sup> 大河内康憲「日本語と中国語の同形語」くろしお出版『日本語と中国語の対照研究論文集』、1997 年、p.412。

<sup>132</sup> 前出、人民網日本語版「中日韓の共通常用漢字 800 字、選定草案が発表」

図3に載せた漢字は、日本と中国にとって、日常生活で一番常用される漢字である。そして字形だけでなく、漢字の意味もほぼ同じである。このような漢字をうまく利用すれば、日本、中国及び韓国の小学校段階の子どもたちの間での交流や理解を促進できる可能性がある。具体的な利用のあり方は、第7章で詳細に説明する。

一方、常用される800字の漢字以外でも、日本と中国において同じ表記と意味を表す大量の文字が存在する。これを同形語語彙と呼ぶ。これらをうまく利用すれば、話す言葉がわからなくても字面から理解することが可能だと考えられる。このことについて、竹田(2005)は、「1つは、日本語には漢語が多く、長い歴史の過程でそれらの用語が変化したことに起因するものである。2つは、近代化により西洋文化を受容したときに生じたものである。いち早く西洋文化を受容した当時の日本人は、その概念を漢語で翻訳して使用した。それらの漢語がそのまま、中国に導入された。けれども、同一の漢字表現でありながらも、文化的な背景や社会体制の違いから、共通部分を持ちつつ微妙な相違点を有するようになったのである」<sup>133</sup>と述べている。このことは日中文化の「相互作用」の一つ重要な表現だと考えられる。しかし、日中の同形語語彙は、単純な「同じ」と「違う」ではなく、曖昧性を持っている部分が非常に多い。これを事前に意識せずにそのまま利用すると、誤解が生じる可能性が高い。これをきちんと区別するため、分類する必要がある。たとえば、竹田(2005)によれば、日中同形語の中には「同形同義語」、「同形類義語」、「同形異義語」という三つの分類がある。しかし、このような分類は概略にすぎない。より詳細的な分類としては、たとえば、西谷(2004)によれば、社会科学分野で使われる語には以下の5分類がある。

- (1) 同じ意味を持つが、中国語にはほかの意味がある場合
- (2) 同じ意味を持つが、日本語にはほかの意味がある場合
- (3) 同じ意味を持つが、それぞれにほかの意味がある場合
- (4) 日本語の意味と全く違う場合
- (5) 日本の経済・商学の文献には現れるが、中国語にはそれに相当する語がないもの<sup>134</sup>

<sup>133</sup>竹田治美『『日中同形類義語』について』奈良女子大学『人間文化研究科年報』第20号、2005年、pp.335-336。

<sup>134</sup>西谷まり「社会科学分野で使われる日中同形異義語」一橋大学留学生センター『一橋大学留学生センター紀要』第7号、2004年、p.17。

本研究の観点から見ると、「同形類義語」は「(1) 同じ意味を持つが、中国語にはほかの意味がある場合、(2) 同じ意味を持つが、日本語にはほかの意味がある場合、(3) 同じ意味を持つが、それぞれにほかの意味がある場合」という三つの内容を包括している。また、(1) から (5) までの具体的なイメージについて、図 4 で示す。

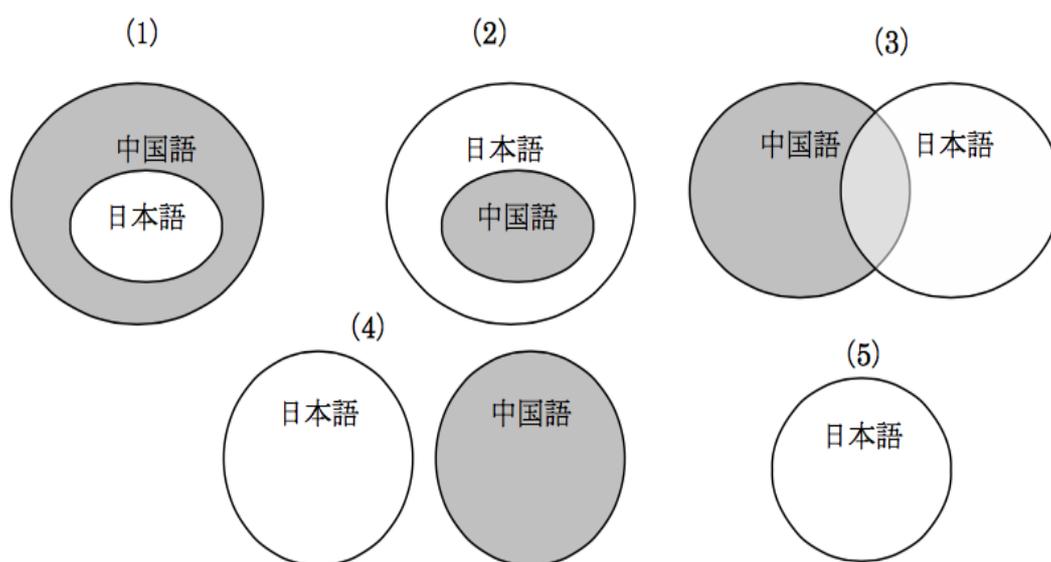


図 4 同形語の分類<sup>135</sup>

この図 4 から見ると、日本と中国の言葉の意味がつながっている類型は多い、しかし、日本と中国両方に関連している類型はやはり (1)、(2)、(3) である。つまり、その三種類の漢語を抽出し、教育現場で学習を展開すれば、二つの国の子どもの言語学習や異文化理解に対して非常に有意義であると考えられる。子どもたちは自分の言語の成り立ちや意味を理解すると同時に、相手国の言語との関連性も明らかにすることが可能である。

そして、日中同形語には、専門的な用語が多く、小学校段階の子どもたちにとって、少々理解しにくいと考えられる。西谷 (2004) は経済学・商学の基礎文献 10 冊の語彙と表現を統計的に調査し、頻出する二字漢語 700 を抽出した。5 分類に基づいて分類された結果を以下の表 5 に表示する。

<sup>135</sup>同上、p.18。

1. 企業	○	2. 経済	○	3. 生産	○	4. 市場	○	5. 価格	○
6. 日本	○	7. 投資	○	8. 資本	○	9. 経営	○	10. 製品	2
11. 労働	○	12. 場合	3	13. 問題	3	14. 需要	○	15. 所得	1
16. 消費	○	17. 必要	○	18. 組織	○	19. 競争	○	20. 関係	○
21. 会社	○	22. 産業	○	23. 事業	3	24. 成長	2	25. 曲線	○
26. 決定	○	27. 利益	○	28. 取引	5	29. 費用	○	30. 情報	○
31. 政策	○	32. 供給	○	33. 増加	○	34. 会計	2	35. 変化	○
36. 資産	○	37. 社会	○	38. 技術	○	39. 水準	○	40. 販売	4
41. 主義	○	42. 均衡	○	43. 分析	○	44. 活動	1	45. 可能	○
46. 重要	○	47. 株式	5	48. 資源	○	49. 行動	○	50. 金融	○
51. 戦略	○	52. 銀行	○	53. 上昇	○	54. 貨幣	○	55. 効果	○
56. 説明	○	57. 理論	○	58. 意味	3	59. 方法	○	60. 基準	2
61. 政府	○	62. 発展	○	63. 評価	○	64. 影響	○	65. 国民	○
66. 結果	○	67. 構造	○	68. 資金	○	69. 調整	○	70. 国際	○
71. 為替	5	72. 景気	2	73. 賃金	5	74. 計画	5	75. 物価	○
76. 限界	5	77. 財務	○	78. 年代	○	79. 価値	○	80. 制度	○

表5 頻出する二字漢語の分析（一部）<sup>136</sup>

注：日中同形同義語には○をつけた

表5において、「説明」、「企業」、「経済」、「影響」などの言葉は「同形同義語」であり、「場合」、「問題」などの言葉は「(3)同じ意味を持つが、それぞれにほかの意味がある場合」に属する。また、「製品」、「基準」という言葉は「(2) 同じ意味を持つが、日本語にはほかの意味がある場合」に属し、「限界」、「資金」という言葉は「(5)中国語にはそれに相当する語がないもの」に属する。これらのうち「製品」、「基準」などの言葉は、経済学の専門用語として使われるもので、小学校段階の子どもにとっては理解が難しいと考えられる。このため「日本」や「必要」など、日常生活にも使える言葉を学習内容としたほうが良いと考えられる。また他の問題として、同じ年齢の日中の子どもたちの間では、漢語の把握の程度が異なるということがある。このため、微妙な相違性と学習対象の具体的な状況を結びつける必要がある。

これらを踏まえ、日中の小学校高学年の子どもが交流する際に扱うのにふさわしい言葉は存在するのだろうか。たとえば「緊張」という言葉は、日本でも中国でも、小学校段階でよく使われている漢語である。竹田（2005）は、以下のように「緊張」という用語について考察している。

<sup>136</sup>同上、p.18。

<日中両語の記述>：「緊張」－“紧张”

<日本語の意味>：①引き締まること。②相互の関係が悪化して、今にも争いの起こりそうな状況にあること。③筋や細胞が引き伸ばされた状態。④心の状態や感情の状態がもっぱら神経を使うこと。『広辞苑』

<中国語の意味>：①気が張り詰める。緊張する。②忙しい、激しい、緊迫している。③供給や金銭などに余裕がない、手詰まりである。『日中辞典』<sup>137</sup>

以上の例から見ると、中国語の「緊張」は精神的、身体的なものだけでなく、物質的、時間的、金銭的に大変な状況という意味として使用されている。つまり、「(1) 同じ意味を持つが、中国語にはほかの意味がある場合」という領域に属している。

また、「緊張」という用語が中国語の中でどのような文脈で使用されるか、竹田(2005)は次の例を挙げている。

例1：紧张的劳动。(激しい労働)『現代漢語詞典』

例2：年末的工作很紧张。(年末の仕事はとても忙しい)

例3：一到旅游旺季、这里的宾馆很紧张。(旅行のラッシュにあるとこのホテルは予約がとりにくい)

例4：公司里人手紧张。(会社の人が足りない)

例5：一到每年的高考、家长和学生都很紧张(毎年の大学の受験の時、親も受験生もとても緊張する)<sup>138</sup>

このように、「緊張」のような、漢字の共通性と相違性という二重性を持ち、しかも意味の内容がわかりやすい漢語がある。このことは、中国人にとっても日本人にとっても大変興味深いことであると言える。日本と中国の間で異文化間教育や国際交流における漢字を活用することは非常に大きな価値がある。中国から伝わった漢字と、それから派生した仮名文字を使用する日本は、中国との間に大きな文化的共通性と相違性がある。そして、ここまで論じてきたように、漢字の共通性と相違性は日中の小学生が互いに理解するための良い手段と考えられる。漢字を用いて、日中間でどのぐらい理解が進むのか、次節で検討しよう。

<sup>137</sup>前出、竹田「『日中同形類義語』について」p.338。

<sup>138</sup>同上、p.339。

#### 4.3.2 日中間で理解しあう動き－漢字に焦点を当てて

ここまで見てきたように日本と中国の漢語の発音は異なり、文法も違っているが、字形や漢語の意味から見ると、類似しているところが多い。このため、相手の国の文章や看板を見るとき、多少意味の推測ができるのではないだろうか。

この問題を究明するために、廖（2001）の研究「日中交流における漢字の働き:文章理解度の測定調査をもとに」の中から、日本人と中国人の互いの漢字の理解度について考察しよう。

廖（2001）の研究は、日本人と中国人それぞれにアンケート調査を行うという方法で行われた。まず日本人に対し、中国語で書かれた短い文章を読ませ、文章の内容についての質問を提示し、その回答から文章に対する理解度を定量的に評価する。次に中国人に対し、日本語で書かれた短い文章を読ませ、質問に回答させる。

文章の選定基準については、「①内容的に簡単で、自国語で書かれていれば誰でも理解できる。②日本語文章の選出については、中国語にはカタカナとひらがながないので、文章の理解上の影響を最小にするために、なるべくカナの少ない文章を選んだ。特に、キーワードが外来語である文章を避けた。③漢字の働きをより全面的に把握するために、選出した文章はなるべく社会生活の各方面をカバーする」<sup>139</sup>とされている。

文章の例を出す。以下は日本語の文章である。

中国北京からのニュース:中国は四、五年以内に首都北京市及び周辺地域の嚴重な水不足問題を解決するために、240億元を投資し、節水、汚水処理及び土地保全事業を計画している。現在、北京市の年間水需要量は40億立法メートルであるが、給水量は嚴重に不足している。北京の都市用水は主に官庁ダムと密雲ダムから取水するが、河北省と山西省等上流水源が汚染されたために、官庁ダムは1997年から飲料水とする機能が失ってしまった。<sup>140</sup>

また、問題の設定は以下の通りである。

- (1) 現在北京で最も不足しているのは何ですか。

<sup>139</sup>廖麗菲「日中交流における漢字の働き:文章理解度の測定調査をもとに」図書館情報大学教育学社会学研究室『情報社会試論』第8号、2001年、p.74。

<sup>140</sup>同上、p.76。

A 水 B 食料品 C 土地 D 資金

(2) 国はどれぐらいの投資を計画しているか。

A 40億元 B 45億元 C 240億元 D 1997億元

以上のような形式で、中国語と日本語の文章各 8 篇を設定し、アンケートが実施された。アンケート回答者の年齢構成と職業構成について、学生及び大学関係の者に集中しないように、なるべく多くの職業、年齢層に行っている。

廖 (2001) の調査の結果を見よう、文章ごとの正解率及びトータルの正解率について、日本人回答者は、8 篇の中国語文章のうち、最高正解率は 93.1%、最低正解率は 69.3%で、平均正解率は 85.7%であった。これに対し、中国人回答者は、8 篇の日本語文章のうち、最高正解率は 66.8%、最低正解率は 46.0%で、平均正解率は 55.0%である。日本人と中国人を合わせた平均は 70.4%であった。研究の考察では、「中国人の正解率は日本人より約 30% 低い。その原因は日本語に特有なものであるカナの影響であると考えられる。中国語にはカナがないため、中国人にとって日本語を読むのは日本人が中国語を読むより難しいと考えられる」<sup>141</sup>と述べており、また、日本語の動詞の否定型「...ない」は漢字がないので、日本語を知らない人にとって理解上の障害となる。それ以外、日本の外来語はほぼカタカナで表記されており、中国人にとってより難しくなる。それにしても、廖 (2001) が「問題は四分法であるので、両者の正解率は、ともに四分法の平均正解率の 25%より遥かに高く、漢字の働きを示していると考えられる」<sup>142</sup>と述べているように、両者は漢字によって互いの言語を理解しやすくなっていると言える。

一方、廖 (2001) では、日本人の中の 10 代回答者の正解率は日本人の中で最も低いという事実が示されている。すなわち、現在の若い人の漢字レベルが低下している可能性がある。本研究の視点から見れば、漢字レベルが低下しているのは望ましくない。書道、短歌、俳句など、漢字は日本独自の文化の形成において、重大な役割を担っている。現在でも、日本の文章の中に漢字があることによって、文章の大意を迅速に把握することができる。やはり子ども段階で、漢字に関する学習活動の実施は重要だ考えられる。

漢字の「共通性」と「相違性」を用い、日本と中国の間で漢字に関する国際教育活動を開発・実施するため、現時点の日中の小学校段階の子どもたちの漢字の

---

<sup>141</sup>同上、p.84。

<sup>142</sup>同上、p.86。

学習状況について検討する必要がある。現在日中小学校の教育現場で、漢字に関する教育はどのような状況であるかは、次の章で述べていく。

## 5 日中小学校における漢字に関する教育

### 5.1 中国の小学校における漢字に関する教育

現在、中国の漢字教育はどのような状況だろうか。まず漢字教育の基礎である漢字政策と漢字教材について述べる。中国では、漢字教育は「識字教育」という。第2次世界大戦後の中国では、農民を中心とする非識字者をなくす大衆識字運動が盛んに行われる一方で、学校教育では、「教学大綱」や「課程標準」に定められた漢字教育の方針に基づいて様々な指導上の工夫が凝らされた。現在中国の子どもたちは、漢字を「語文」という科目で学習している。

これに関連する研究として、陳（2014）は、「中国の小学校における漢字教育に関する考察—漢字政策及び教材の視点から—」という論文で、中国の国語教科書の漢字教育について考察した。

陳（2014）では、まず、中国の最新の小学校漢字教育政策である「全日制義務教育語文課程標準（実験稿）」の中の「識字・書写教育」の内容について調査し各段階の目標と具体的に求められる学習内容についてまとめた。研究対象の一例として、2001年「全日制義務教育語文課程標準」に基づいて作られた『語文』（1年前期）を取り上げる。具体的な内容は、以下に示す。

表 6 2001 年版課程標準における識字・書写教育<sup>143</sup>

項目	学年	第 1 段階 (1~2 学年)	第 2 段階 (3~4 学年)	第 3 段階 (5~6 学年)
識字教育		漢字学習が好きになり、常用漢字 1600~1800 字を認識し、そのうち 800~1000 字を書けるようにする。ピンインをマスターさせる。ピンインの補助により漢字を読めるようにする。ピンイン検索、部首検索で辞典を引けるようにし、一人で漢字学習ができるようにする。	漢字学習に強い興味を持ち、自主的な識字習慣を身につけさせる。常用漢字 2500 字を認識し、そのうち 2000 字を書けるようにする。字典、辞書を使えるようにし、自分で識字ができる一定の能力を見につけさせる。	自力で識字する能力を高める。常用漢字 3000 字を読めるようにし、そのうち 2500 字を書けるようにする。
書写教育		漢字の基本筆画と常用の偏旁部首を把握させる。筆順に従い、硬筆で字を書かせる。筆画の配り、構成に注意し、初歩的に漢字の形の美しさを感じさせる。正しい書字姿勢と良好な書字習慣を養う。規範的で正しく整った字を書けるようにする。	硬筆による楷書に熟達し、規範的で正しく整った漢字を書けるようにする。筆で手本を模写する。	硬筆で楷書を書き、字配りに気をつけ、一定の速度で書けるようにする。筆で楷書を書き、習字によって漢字の美しさを感じ取る。

表 6 を見ると、重要なのは、「自主的な学習習慣」「自力で漢字を習得する能力」

<sup>143</sup>李軍「中国における建国後の漢字教育政策の変容—『教学大綱』から『課程標準』へ—」早稲田大学教育・総合科学学術院教育会『学術研究:人文科学・社会科学編』第 60 号第 3 巻、2012 年 p.181。

の育成に重点が置かれ、「課程の基本理念」に掲げられた「総合的な語文素養の向上」「自主的かつ協力的で、探究型の学習方法の積極的な取り入れ」に対応していることである。書写指導では、書写の姿勢や良好な習字習慣の養成などが求められ、「漢字の形の美しさを感じさせる」「漢字の美しさを感じ取る」といった文言も随所に見られる。学習者に漢字への美意識を感じさせることは、書写だけでなく、漢字学習に対する興味・関心の喚起にも繋がると思われる。

陳（2014）では、「政策によって、識字能力を高め、漢字で言葉表現する能力に関する政策はまだ示されていない。具体的にどのような方法が使用され、「漢字学習が好きになり」「漢字学習に強い興味を持ち」といった学習意欲を喚起するのがまだ説明不足だと考えられる」<sup>144</sup>という課題を指摘した。たとえば、漢字を練習・理解するとき、友達の考えや意見をよく聞こうとしたり、書いた漢字について積極的に交流・表現したりすることも重要だと考えられる。

また「数値目標が明確に記載されているため、具体的な授業設定がしやすくなる反面、児童生徒は授業外に長時間の勉強を強いられかねない。また、詩歌の暗誦は知識の蓄積や語彙の拡充、豊かな表現力を育成するのに役立つが、丸暗記という従来からの指導法を観賞力の深化や文学に対する興味・関心に結びつけていくことは、容易ではない指導上の課題であろう」<sup>145</sup>ということも指摘している。つまり、限られた時間しかないという条件の下で、漢字の指導について興味と知識がつながることように工夫しなければならないのである。

また、漢字に関する知識に関して言えば、子どもがうまく漢字を習得することが非常に重要だと考えられているにもかかわらず、漢字自身にどんな魅力があるのかが全く紹介されていない。たとえば、最初に漢字を勉強するとき、漢字の起源、発展及び今の世界で漢字がどんな影響をもたらすのかを簡単な文章と面白い図を教材として用いれば、子どもは漢字を勉強する意欲が強くなると考えられる。

学習方法・内容について中国では長い期間にわたる詰め込み教育の影響を受け、ひたすら暗記を重視している。たとえば、小学校から高校の授業では基本的に教師の話を聞いて、それを覚えるということが繰り返される。その中で、小学校一年生が最も苦勞するのが「漢字の習得」である。漢字の国なので当然といえばそれまでだが、実際はどうかと中国・日本の子どもたちがそれぞれどれだけ漢字を勉強するのか調べた。結果について表7に示す。

<sup>144</sup>陳卓君「中国の小学校における漢字教育に関する考察—漢字政策及び教材の視点から—」千葉大学大学院人文社会科学部研究科『社会とつながる学校教育に関する研究（2）』2014年、p.9。

<sup>145</sup>同上、p.9。

表 7 日中小学校における漢字の習得数<sup>146</sup>

	中国	日本
第一学年	455 字	80 字
第二学年	703 字	160 字
第三学年	594 字	200 字
第四学年	552 字	200 字
第五学年	364 字	185 字
第六学年	265 字	181 字
総計	2933 字	1006 字

表 7 によれば、習得すべき漢字の数について、日本では低学年の負担が小さいのに対し、中国では逆に低学年の負担が大きいと考えられる。日本の場合、低学年で、漢字を学習するだけではなく、平仮名及び片仮名を読み、書くことも学習する。しかし、平仮名と片仮名を合わせても約 100 文字なので、二つの国において習得すべき文字数はの差は大きい。

中国における小学校の国語の授業は、全体的に学習量が多く、内容も濃い。一年生が学ぶ一冊の教科書の中から、5 首の古詩（漢詩）が教材として選ばれており、しかもこれらの古詩を含め暗誦を要求される課文（詩）が 19 篇もある。無論、詩には相当難しい漢字も使用されている。ピンイン<sup>147</sup>の学習は教科書の中程から始まるが、それまでも使われているので、すでにピンインは理解していることが前提となっていると思われる。巻末の「認字表」（認字＝読んで理解出来る字）には 328 字、「写字表」（写字＝書ける字）には 136 字が載っている。中国の漢字は国語教育と関連しているだけでなく、他の科目の理解にも影響を与えるため、できるだけ早めに漢字を習得することが重要である。そのため、現在中国の小学校現場では、漢字習得の負担が大きい。中国での学習で重視されている能力は記憶力であり、それ以外の創造力などは記憶力に比べて、あまり重視され

<sup>146</sup>この表の作成について、以下を参照にする。

日本側「別表 学年別漢字配当表」

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/koku/001.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/koku/001.htm)（2016 年 9 月 30 日最終確認）

中国側「第一范文网」<http://zd.diyifanwen.com/zidian/szb/>（2016 年 9 月 30 日最終確認）

<sup>147</sup>ピンインとは中国語において、音標文字による語の表記である。以下のアドレスを参考にした。

<http://cjjc.weblio.jp/content/%E3%83%94%E3%83%B3%E3%82%A4%E3%83%B3>（2016 年 9 月 30 日最終確認）

ていない。しかし、本研究は、「創造力」も重要な部分であると考え。現在、中国の小中学校教育は子どもたちの創造力の形成を妨げている。その最大の問題は、知識の蓄積を重視し、子どもたちが自ら学習しようとする態度を育てることを無視している点である。この教育は知識の獲得に大量な時間を費やしてしまうため、子どもたちが新しい視点を見つけにくいという問題がある。

欧米の教育現場と比べて、中国の小中学校では、児童・生徒たちに自ら問題を発見させる時間が少ない。学校は知識面を重視した学習の内容、方法、時間を設定している。この結果、小中学生の授業の内容は非常に多く、宿題や試験も多く設定されている。学習以外の時間に、自分の視点で問題を考える時間がほとんどなく、創造力の育成はますます難しくなる。

中国の漢字に関する指導について興味と知識がつながることは非常に重要である。そのため、漢字に関する知識を用い、多様な教材を選定し、授業を実施することが期待される。

## 5.2 日本の小学校における漢字に関する教育

現在、日本の漢字教育はどのような状況だろうか。日本の漢字学習は「国語」という教科でなされている。この「国語」は、中国の「語文」という科目と類似している。また、日本の小学校において習得しなければならない漢字数は1006字であり、中国と比べて少ない。しかし、日本においても漢字の学習は一年生から導入されるので、漢字に対する重要度の高さもうかがうことができる。

日本の漢字指導は中国と同じように、「形」「音」「義」の三つの指導が重要とされる。また、子どもたちに漢字指導を通して漢字に対して興味を持たせることが重要視される。このことについて、マデュラ（2010）は「小学校の全学年を通して漢字に対して興味を持たせるために、楽しみながら効率的に漢字が習得できる学習方法を開発していくことは大切である」<sup>148</sup>と指摘している。マデュラ（2010）によると、漢字教育で重視されている内容は次の通りである。

- 1) 読み書き
- 2) 誤読字や同音異字
- 3) 各学年における漢字目標

---

<sup>148</sup>マデュラゴカレ「小学校における漢字教育」広島大学国際センター国際教育部門『日本語・日本文化研究プログラム研修レポート集』第26期巻、2011年、p.8。

#### 4) 自ら進んで漢字を学びとする能力を育てること<sup>149</sup>

以下では「自ら進んで漢字を学びとする能力を育てること」について具体的に考察する。マデュラは、①「分からない漢字、新出漢字を文脈の中で考えさせる」、②「漢字を語としてとらえ、意味・用法を考えさせること」、③「漢字の働きを中心に関連づけて考えさせること」、④「漢字を楽しく教えるための工夫」、⑤「ワークシートやワークブック」、⑥「新出漢字、一字ずつについての理解を深め、習得させる指導」、⑦「口唱法」、⑧「漢字カードづくり」、⑨「漢字指導の際、陥りやすい問題状況」<sup>150</sup>という9点を指摘する。この中に、「漢字を楽しく教えるため工夫」が含まれているのは、児童に漢字を覚えるのが大変、面倒くさい、難しいなどの思いが強いことによるものだと考えられる。漢字を読み書きする能力の向上には、楽しい学習環境を作り出すことが大切であり、そのためには、指導者による教材の開発や指導方法の工夫が重要だと考えられる。

現在、日本の小学校段階の重要な課題は、漢字学習に対する興味・関心が低いことである。たとえば、国立教育政策研究所の報告書『特定の課題に関する調査（国語）調査結果』（2006）は、「質問紙調査を見ると、『漢字の学習が好きだ』に肯定的に回答した児童の割合は第6学年で5割程度である。児童は漢字の学習が好きだと考えていない教師が4割以上いる」<sup>151</sup>と述べている。また、本研究では日中小学校における交流授業を実施する前に日本と中国両側の子どもたちを対象として調査を行った。その調査項目に「あなたは、漢字が好きですか」という項目がある。その選択肢は四つあり、「とても好きです」「まあまあ好きです」「あまり好きではありません」「きらいです」である。中国側は「あまり好きではありません」「きらいです」という選択肢を選んだ子どもはいなかった。しかし、日本側は「あまり好きではありません」「きらいです」を選んだ子どもの割合は全体の25.4%（59名中15名）を占めていた。この結果から見ると、指導のやり方を改善するだけでなく、根本的な問題に注目し、漢字の魅力やメリットを伝えるなど、子どもたちに漢字に対して興味を持たせることがより重要である。漢字はローマ字や仮名と比べて、画数が多いため書くのが面倒であり、そして覚えるのも面倒である。子どもは漢字に対して嫌な気持ちを持つかもしれない。し

<sup>149</sup>同上、p.8。

<sup>150</sup>同上、pp.14-15。

<sup>151</sup>国立教育政策研究所「特定の課題に関する調査（国語）調査結果（小学校・中学校）国立教育政策研究所教育課程研究センター、2006年、p.19、<https://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokutei/04002010000004000.pdf>（2016年12月19日最終確認）

かし、漢字は魅力を持っている。漢字の魅力にはたとえば、ハングルやラテン文字などの表音文字と異なり、“形・音・義”の三要素で成り立ち、文字それぞれが特有の意味を持っていることがある。また、古代、漢字文化が周辺の諸国や民族の文化の形成にも及んだことから、漢字について興味を喚起できる点であろう。漢字の面白さが理解できる教育活動や授業プログラムを工夫することで、日本の子どもたちの漢字習得率も高くなる可能性がある。

### 5.3 まとめ

以上の日本と中国の漢字教育の状況を踏まえると、漢字の魅力や特徴が十分に伝わっていないことが現在の日中両国の小学校の課題と言える。漢字は日本と中国に共通している文化であり、歴史的にも深い関係がある、しかし、現代の中国人も日本人も漢字がどのように共有され発展してきたのかという歴史については、あまり知らないのが現状である。たとえば、中国で使用されている一部の言葉が日本から伝わったものであることを、中国の子どもたちは知らなかった。漢字は日本と中国にとって歴史的に深い関係があり、両国民の思考にも影響を与えてきた。しかしながらこうした背景は両国ともに知られていないことが多い。こうした現状を踏まえ、日本と中国との間の異文化間教育の題材としてこれまで検討されていない漢字を扱った実践を行い、その課題や成果を示すことが重要であると考えられる。

## 6 インターネットや情報通信の到達点

日本と中国の小学校間の交流内容に漢字を選定したが、どのような手段や方法を採用し、国際交流活動を実施するのかという問題を解決しなければならない。つまり、地理的な条件を越えて互いによく交流するために、日本と中国におけるインターネットに関する現状を考察することは必要がある。

我々はインターネットが普及している社会において、インターネットなどの通信技術を用いれば、物理的距離が離れていても交流することができる。また、文書だけでなく、動画や音声データの編集や保存、共有なども簡単にできるようになっている。教育においても、インターネットなどの通信技術を用いることにより、他国と交流する機会を生み出すことが可能となる。そのため、地理的条件に恵まれていない地域であってもインターネットなどの通信技術を用いれば国際交流が可能となる。つまり国内でも海外でも、インターネットなどの通信技術があれば、より多くの子どもたちが国際交流の活動に参加することができる。それにより子どもたちの異文化理解や国際理解が進み、さらには異文化理解能力も習得する可能性がある。結果、地域の教育的格差も小さくすることができると考えられる。

### 6.1 中国におけるインターネットの発展状況

中国のインターネット環境の発展状況はどうであろうか。以下に中国のインターネット利用人口を示す。中国インターネット情報センター（CNNIC<sup>152</sup>）の発表によると、中国のインターネット利用人口は2011年末で5億人を突破している。（図5）

---

<sup>152</sup>中国インターネット情報センター(CNNIC)は1997年6月3日に成立した非営利の中国インターネット関連のサービス機関で、業務上直接中国情報産業部の指導を受け、中国のインターネット関連情報、政策、法律、最も権威のある統計データなどを発表している。そのほかメインの業務はドメイン登記サービスやIPアドレス分配などである。中国WEBマーケティング関連用語集、<http://www.china-webby.com/cnnic/>（2016年9月15日最終確認）

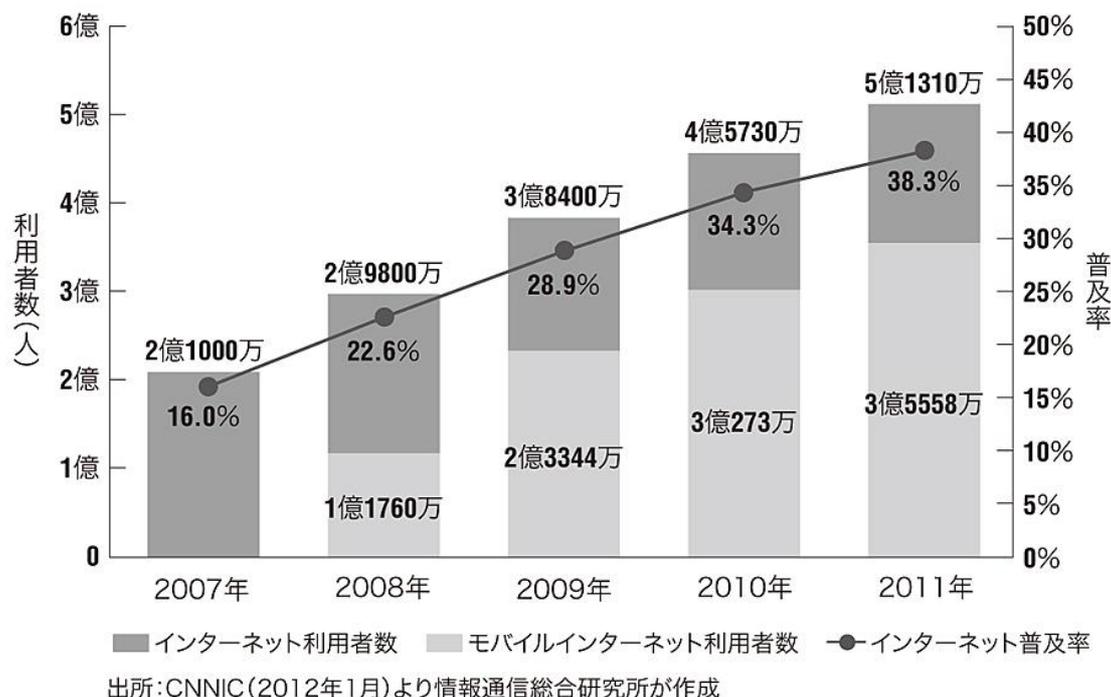


図5 中国インターネット利用者数と普及率<sup>153</sup>

しかし、インターネット普及率（人口に対するインターネットユーザー数の比率）は2010年末から4.0ポイント上昇の38.3%であり、まだ全人口の4割以下と先進諸国に比べて少ない。そのため、中国におけるインターネット普及率の発展が期待される。

そして、Science Portal China<sup>154</sup>によると、2014年12月時点で、中国のネット利用者は6億4900万人に達し、農村部でのインターネットの利用人口の割合も27.5%に達した。数十年ほど前まで、中国では資金不足、思想の差異、国情の違いなど様々な要因によって、国際交流が制限されており、子どもたちが直接的に他の国の子どもたちと交流することは少なかった。しかし現在、中国の大部分の地域、特に都市部の子どもたちがインターネットを利用することが可能になり、様々な通信メディアがインターネットで提供されている。たとえば、中国高等教育学生情報サイト<sup>155</sup>によると、現在中国のインターネットの環境が大幅に改善し、全国の小中学校のインターネットの普及率が87%に達成し、マルチメディア教

<sup>153</sup>同上。

<sup>154</sup>中国総合研究交流センターが運営し、中国の科学技術政策、研究動向などの情報を日本の読者に届けるウェブサイトである。[http://www.spc.jst.go.jp/hottopics/1507/r1507\\_crcc2.html](http://www.spc.jst.go.jp/hottopics/1507/r1507_crcc2.html)（原文は中国語、引用者が翻訳した）（2016年9月30日最終確認）

<sup>155</sup>中国教育部が指定する学歴・学籍認証サイトである。

<http://www.chsi.com.cn/jyzz/201606/20160624/1540534398.html>（原文は中国語、引用者が翻訳した）（2016年9月30日最終確認）

室の普及率も 80%になった。こうした状況を受け、学校現場においてインターネット技術を利用して異なる国や地域にいる子ども同士での交流が可能となったと言える。今後、学校現場において、インターネット技術を運用し、国際間でインターネットを活用した交流をする場合、具体的にどのようにすれば実現することができるだろうか。また、どのような手段・方法を用いれば、子どもの好奇心をかき立てて、国際間で交流することができるのだろうか。その方法として本研究は、Skype を活用することが望ましいと考えた。

Skype は「世界中の Skype ユーザーに無料で電話をかけることができる、高品質ビデオ対応の無料ビデオ通話」であり、無料通話機能や、固定電話への通話料が安いことに注目されている。Skype は、マイクロソフトの Skype 部門が提供する P2P 技術<sup>156</sup>を利用したインターネット電話サービスで、遠距離通話・国際電話の料金を全く気にせずに、利用することができる。

さらにSkypeというインターネット電話サービスの良い点は、無料というだけでなく、初期設定の容易さ、音質の高さ、接続性の高さ、操作や準備にかかる時間の少なさである。接続さえ行えば、小学校低学年でも十分操作が可能である。E-mail等ではキーボード入力を必要とするが、Skypeはそれがいらぬ。また、通話品質が高く、臨場感のある通話を楽しむことができる。

学校の授業で Skype の機能をうまく利用することは子どもたちが今まで不可能であったことを可能にする。そして、Skype のホームページにおいて示した授業で Skype を利用できることの例を以下に引用する。

- 1.遠隔地にいる著名な作家、スポーツ選手、宇宙飛行士などを Skype のビデオ通話／音声通話機能を使ってインタビューをする。
- 2.Skype で外国語の会話レッスンを行う。
- 3.自分たちの実地見学を Skype で他の人にシェアする。
- 4.生徒の保護者の職場と教室を Skype でつなぎ、その保護者の仕事について説明してもらう。
- 5.外国の学校の教室と Skype でつなぎ、異文化を体験してみる。
- 6.授業の様子を Skype で公開し、参観日に都合で参加できない保護者がネットで閲覧できるようにする。

---

<sup>156</sup>Peer to peer ネットワーク上で対等な関係にある端末間を相互に直接接続し、データを送受信する通信方式。また、そのような方式を用いて通信するソフトウェアやシステムの総称である。  
<http://e-words.jp/w/P2P.html> (2016年9月30日最終確認)

7.追加授業を必要としている生徒や、都合で授業に出席できなかった生徒などに、Skype で追加サポートを提供する。<sup>157</sup>

Skype のホームページは「Skype、インターネット回線、および PC・携帯電話・タブレットなどのデバイスがあれば、世界中のにいる人たちとコミュニケーションを取ることができます。(中略)学校の教室にいても、または学校の外にいても、Skype で世界中の人たちとつながることができ、新しい何かを学ぶことができます。Skype によって学ぶ場所を教室の中だけでなく、世界中に広げることができるのです」<sup>158</sup>と述べている。ただし、相手が通信速度の遅いインターネット接続を利用している場合には、通話品質がかなり悪くなる可能性があるため、その点は注意が必要である。

さて、中国における Skype の発展・利用状況はどうだろうか。2004年10月、中国の通信会社である TOM 社は、Skype と連携し、Skype 簡体中国語を立ち上げた。この立ち上げを始まりとして、Skype のビジネス事業が中国に展開していった。中国は総人口が多いため、中国の Skype のユーザーの数も多い。中国の人民網のニュース<sup>159</sup>によると、2007年11月の時点で、中国における Skype の登録ユーザー数は5100万以上とされている。中国は世界で Skype ユーザーが最も多く、一番利用される国であった。

しかし、近年政府に制限されたこと、各地域に適したものに替えることが難しいこと、さらに中国で開発された独自のインターネットソフトウェアが登場したことなどの理由で、中国における Skype の発展は停滞してきた。世界的な視点から見れば、Skype のユーザーの数は増加しているが、一方で中国のユーザーは2割減少した。こういった現状はあるが、海外の方と連絡する場合、たとえば今回のような日中小学校における交流授業を実施する際には、日本と中国の双方で利用可能な Skype が、最適な手段であると考えられる。

次に、中国国内のユーザーについて見ていく。張(2006)<sup>160</sup>の調査における、2006年の Skype の中国人ユーザーの状況についての研究によると、Skype の中国人ユーザーは主に経済活動及び対外交流を頻繁に行っている沿海大都市(広東、

---

<sup>157</sup>Skype Blogs 「授業で Skype を使う 7つの方法」、<https://blogs.skype.com/2012/05/18/skype7/> (2016年9月30日最終確認)

<sup>158</sup> 同上。

<sup>159</sup> 「Skype 中国ユーザー突破 5100 万」、<http://it.sohu.com/20071121/n253383990.shtml> (原文は中国語、引用者が翻訳した) (2016年9月30日最終確認)

<sup>160</sup>張明・劉宇梅「ネットワーク skype 中国ユーザー状況研究」廣東通信学会『廣東通信技術』第4期、2006年、p.29。(原文は中国語、引用者が翻訳した)

上海、北京) に分布していることがわかる。またユーザーの多くは Skype をビジネス、個人的な通信の手段として使用しているが、特にビジネスに関する利用が最も多い。さらに、ユーザーの年齢を見ると、26歳～35歳と18歳～25歳のユーザー数が多く、それぞれ41%と40%を占めている。

この調査結果から、Skypeは中国においてユーザー数が多いが、沿海都市に集中しているため、内陸のユーザー数は少ないことがわかる。しかし、近年、内陸の経済（特に重慶市、雲南省などの地域）も徐々に発展しているため、これから Skype を利用した経済的な交流が増え、ユーザーの数も増加する可能性がある。

また、現在の中国においては Skype をビジネスや個人的な通話として利用しているユーザーが多いが、他の領域、たとえば教育、公共の利益のための活動で利用することも考えられるのではないだろうか。本研究では教育における Skype の活用をさぐりたい。

## 6.2 日本における通信情報技術活用の国際交流学習

ICT を活用することにより、学校内だけでは行うことが難しい学習が可能になり、今まで教室の中だけでは見えなかった世界を見ることができ、子どもたちの視野が広がっていくことは確実である。視野が広がることで、子どもたちが国際交流について興味を持ち、学習意欲が高まることで、コミュニケーション能力や表現力を高めることが可能となる。何よりも ICT を活用すると自分の身の回り以外の世界の人々との出会いがある。出会いを通して、相手の思い、考え、生活などの情報を得ることはとても重要なことだ。

情報化社会の発展に伴い、海外各国、特に先進国においては、国家プロジェクトとして教育分野での ICT 活用が推進されている。特に、日本では、世界最先端のブロードバンド<sup>161</sup>環境を整備している。また、日本では「ICT 教育推進プログラム協議会」<sup>162</sup>が発足するなど、教師たちは小中高など教育現場において ICT の活用能力の向上を目指している。日本ではインターネットなど情報通信技術が発達しているため、日本における ICT を活用した交流授業の実践は中国と比べ

---

<sup>161</sup>高速・大容量のデータ通信が可能なインターネット接続サービス。接続技術には、ADSL や光ファイバー、CATV などがある。

<http://ewords.jp/w/E38396E383ADE383BCE38389E38390E383B3E38389.html> (2016年9月30日最終確認)

<sup>162</sup>情報技術 (IT) が普及しインフラ化し日常生活の中で透明化しつつある社会において、今後の安全で信頼できる安定した情報・通信ネットワークとこれらの技術 (ICT) 基盤を維持し、発展させていくための人材教育のあり方と教育方法を提言し、教育現場における教育者の育成と教育実践を支援することを目的とする。 <http://ictepc.jp/council/description.html> (2016年9月11日最終確認)

て非常に多い。

現在、中国の小学校現場における、通信情報技術活用事例はまだ少ない。先行事例を考察するため、日本の小学校における情報通信技術活用の研究を紹介する。

日本の学校はインターネット環境が普及しており、充実している。稲垣(2003)は、「まず環境面では、2002年度末にほぼすべての学校がインターネットに接続された。今では多くの学校がWebサイトを開設し、さまざまな情報提供がされている」<sup>163</sup>と述べている。すべての学校がインターネットに接続したことから、内陸部と沿海部の学校、外国の学校などが交流することで、子どもたちの視野が広がっていくことは可能であり、交流を重視した学習が各地域で行っている。

そして、稲垣(2003)は、学校間交流学習の特徴として以下を示している。

- ・ ネットワークによる遠隔学習と学級、学年を単位とした学習の混合形態である
- ・ 海外、国内、同一地域内、異学年、異校種など対象は多岐にわたる
- ・ 情報教育の一手段。ネットワーク上のコミュニケーションそのものが学習対象になる
- ・ 国際理解教育、総合的学習などを補完・発展させる目的で導入される
- ・ 教師は学級、学年の学習と交流活動のコーディネートの両面を請け負う<sup>164</sup>

そして、稲垣(2003)は、学校間交流学習の意義、目的について大きく以下の四点に整理している。

- ・ 他者・異文化との接触による多様性への気付き、比較思考
- ・ 自己の内省、振り返りの手段
- ・ メディア活用による情報活用能力
- ・ ネットワーク上でのコミュニケーション体験、他者との協調的な態度の育成<sup>165</sup>

---

<sup>163</sup>稲垣忠「学校間交流学習における協同性の研究」平成15年関西大学総合情報学研究科博士論文甲第120号、p.4。

<sup>164</sup>前出、稲垣「学校間交流学習における協同性の研究」p.14。

<sup>165</sup>同上、p.14。

以上の内容を踏まえると、学校間交流学習はインターネットに関する能力を身につけるだけでなく、異文化間交流に対する理解を深めるための有効な手段だと考えられる。その学習の形態は多様であり、目的も多様になっている。

例として、園屋ら（2007）の「テレビ会議システムを用いた学校間交流学習の研究：鴨池小学校（鹿児島市）－勝連小学校（沖縄県うるま市）の二校間での実践事例」<sup>166</sup>という研究について考察しよう。

この二つの学校の交流学習の内容は、お互いに相手の学校や地域のことなどを紹介し合うという内容で行われた。授業の目的は以下の四つである。

- (1) 自分の学校や地域のことを知る
- (2) 相手校や地域のことを知る
- (3) プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力を習得する
- (4) 情報活用能力を習得する<sup>167</sup>

授業の準備や実施経過について以下のように記されている。

- (1) 2006年6月に、鴨池小学校から筆者の一人である園屋に対して、交流学習を他県の学校としたいので相手校を紹介してほしいという依頼が、鹿児島市学習情報センターを通してなされた。
- (2) 園屋が琉球大学及び長崎大学の「三大学連携事業・ICT活用班担当者」に相談した。
- (3) それに対して筆者の一人である米盛は、知人が校長を務める沖縄県うるま市立勝連小学校に声をかけ、6年生どうしの交流学習が実現することになった。
- (4) その後、園屋、米盛、仲間が勝連小学校を訪問し、両校の担当者が直接電話やテレビ会議システムで話し合っ、準備を進めた。
- (5) その結果、2006年11月13日に第1回（出会い）、11月17日に第2回（本番）の交流実習が実施された。
- (6) 両校への事後の意見聴取は、園屋が鴨池小へ、園屋、米盛、仲間が勝連小へ直接伺って行った。<sup>168</sup>

<sup>166</sup>園屋高志・米盛徳市・仲間正浩・藤木卓・寺嶋浩介・森田裕介・関山徹「テレビ会議システムを用いた学校間交流学習の研究：鴨池小学校（鹿児島市）－勝連小学校（沖縄県うるま市）の二校間での実践事例」鹿児島大学『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』特別号3、2007年、pp.1-8。

<sup>167</sup>同上、p.2。

交流授業の内容は、自分の地域の特徴や修学旅行、自分の学校の紹介（人数、先生の数、図書室の冊数など）について、互いにクイズを出し合う、というものである。たとえば、鴨池小が「沖縄の海開きはいつか」と質問し、これに対して「3月」という回答があると、鴨池小側では「おーっ」という驚きの声が上がった。

考察は、子どもと担任教師らという二つの観点から行われている。

子ども側については、「ふだん知らなかったことを交流によって知ることができた」、「発表する力や聞く力の育成に役だった」、「交流する喜びや満足感が得られた」という三つの成果にまとめられている。

また、担任教師らと話し合いについては、以下のようにまとめられている。

- (1) 交流学习の意義について、調べることから発表までの一連の情報活用過程が意欲的になされ、子どもの情報活用能力育成に寄与したものと思われる、交流学习の進め方について、本番の一回だけではなく、直前に一回の交流を設定したのがよかったようである。
- (2) 教師にとっては、一般の教室でできることに意義が見いだされた。そして、教師にとっての課題は、実践では時間配分について考慮されるべきであったと思われる。
- (3) 総合的な学習でテレビ会議だけではなく、社会科や国語のある単元での調べたことを、お互いに発信者となり知らせる学習にしてもよい。

以上の内容や考察を見ると、テレビ会議システムを用いることで、自分や相手の学校や地域のことをより深く知ることができ、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力の習得に役立ったことがわかる。しかし、本研究の観点から見ると、お互いに地域間のことを「知る」だけでなく、「理解する」ということがより重要だと考えられる。園屋らの事例では交流学习の時間がかなり制限されるため、互いを理解できるような深い交流をすることは達成されていない。

以上のことから、地域間の学校遠隔交流は、地理的な条件を超えて、視野を広げるだけではなく、自らの地域に対して深く理解する動機づけにもなると考える。

### 6.3 通信技術を利用した交流授業の配慮点

通信技術やインターネットの活用には、児童生徒の学力が向上するというメリ

---

<sup>168</sup>同上、p.2。

ットがある。しかし、これから交流授業をさらに向上させるため、以下の三つの点に配慮しなければならない。

#### (1) 交流相手の探求・相談

交流授業の実施においては、まず交流の相手を探し、共に連絡相談することが最も重要だと考えられる。稲垣（2003）によれば、現在日本では以下の三つの実施形態がある。すなわち「個人的・個別的なつながりから相手を探す遠隔独立型、地域内の研究組織と協力して実施する地域共同型、企業や NPO、研究組織、あるいは特定の学校がホストになり全国に参加を呼びかけるプロジェクト型の 3 つの参加形態」<sup>169</sup>である。また、このような授業を実施したことがある教師と交流し、有効な情報を得ることもできると考えられる。

海外の学校や個人などの交流相手を探す場合、国内で探すより難しいことが考えられるが、日本ではこれまでに、国際協働プロジェクトを推進する機関や大学連携、国際姉妹校との連携事業が多く実施されてきている。

たとえば、JEARN<sup>170</sup>（正式名称「グローバルプロジェクト推進機構」）は、この団体のサイトによれば、日本で初めての本格的な国際交流学习プロジェクトを推進する NPO（特定非営利活動法人）であり、さまざまな国際協働プロジェクトを実施している。特に、ICT を活用した国際協働プロジェクトを毎年 150 以上も実施している。このような機関に協力を求め、プロジェクトを選ぶことで交流校を紹介してもらうことができるだろう。

#### (2) 交流主題・テーマを考える

テーマについて、稲垣（2002）は、「どのようなテーマで交流するのかを考えるには、相手校との間の共通点を話し合うところからはじめるとよい。同じテーマで学習している、同じ河川の上流と下流といった地理的なつながりに着目するなどである」<sup>171</sup>と述べている。この観点について、本研究も同意し、同じ国の学校間でこのような内容を実施するだけではなく、異なる国でも、二つの国の共通点や互いに影響している点などをテーマとして取り上げる必要があると考える。互いの学習能力を把握した上でテーマや内容を確認したほうがよいと考えられる。

#### (3) インターネットの環境

---

<sup>169</sup>前出、稲垣「学校間交流学习における協同性の研究」p.198。

<sup>170</sup>JEARN は、日本で初めての本格的な国際交流学习プロジェクトを推進する NPO（特定非営利活動法人）であり、世界の子どもたちが交流するための国際教育ネットワークである。JEARN 国際教育ネットワーク、[http://www.jearn.jp/japan/about\\_jearn.html](http://www.jearn.jp/japan/about_jearn.html)（2016 年 9 月 15 日最終確認）

<sup>171</sup>前出、稲垣「学校間交流学习における協同性の研究」p.199。

現在、インターネットが発展しているが、技術的に不安定だという課題がある。日本国内の場合、ネットの接続状況は比較的安定しているため、国内の遠隔交流には交流途中で接続が切れてしまうなどの大きな問題がないと考えられる。しかし、国際的な遠隔交流活動や授業の場合、相手国のインターネット環境の影響も受けるため、インターネットの不安定な状況が多く発生している。特に発展途上国の場合、ブロードバンド化が急速に進んでいるものの、いまだ先進国との格差がかなり大きい。陳（2013）の修士論文である「中国の重慶における国際交流の開発—情報通信技術を利用した試行的な取り組み—」<sup>172</sup>の中においても、インターネット接続の問題を課題の一つに挙げている。同論文内では、遠隔交流授業を行った際、画面がはっきり見えない、インターネット接続のスピードや反応も遅く、子どもが相手の反応を待っている時間が長いなどの課題もいくつか出てきた。

また、遠隔交流授業においては使用するメディアの選択について、授業内容にふさわしいメディアを使うことも必要である。現在テレビ会議システムや Skype のようなソフトウェア、電子掲示板、メール、共有のデータベース、ビデオレターなどのメディアがある。メディアの選択について、稲垣（2003）は「使用可能な交流手段と、それが使用可能な時間帯、頻度をリストアップしておくことで、児童に場面に応じて適切なメディアを選ばせるような機会をつくることもできる」<sup>173</sup>と述べている。児童がメディアを選択する際にはこのことに配慮する必要がある。

---

<sup>172</sup>前出、陳「中国の重慶における国際交流の開発—情報通信技術を利用した試行的な取り組み—」

<sup>173</sup>前出、稲垣「学校間交流学习における協同性の研究」 p.198。

## 7 異文化間交流授業の開発

これまでの交流授業の流れを踏まえ、本研究では日本と中国の異文化間教育学の領域において適した題材として漢字について理論的に検討し、実践の開発、実施を行い、その有効性について考察を行う。本研究の目的は以下で述べる。

異文化間教育の視点から、日本と中国の小学校段階における異文化間教育の研究方法を提案する。目的は、一般の子どもを対象とし、互いに相手国の言語と文化に対する興味を持たせ理解させると同時に、自国言語や自国文化を顧みる意識を持たせることである。また、両国の共通性を見出すとともに、相手国を再認識することができる異文化間教育の方法を探索することも目的とする。また、本研究の意義を日本と中国の異文化交流の視点、とりわけ漢字の交流の中に位置づけるとともに、異文化間教育の「相互作用型」という構造類型のさらなる充実を図る。

近年、それぞれの文化の持つ異なる要素を組み合わせる新しい文化を創造することについて、関心が高まってきている。本研究では「理論」の問題点に着目し、「実践」という方法から「理論」を振り返る。もともと、異文化間教育は、「多様な文化が交差する現場で、異文化間教育の実践に参加する人々が、多様な対象との相互行為の内に捉えた知を再構築し、新たな価値を創造することを目指す」<sup>174</sup>というものである。異文化間教育の授業開発を通し、異文化間教育の「多元性、双方向性、対等性、創造性」を具体化し、「理論」と「実践」の内在的な関与による関係性の構築と、課題の発見・解決共有化の過程を記述することが本研究における授業づくりの目的である。

### 7.1 漢字の創造活動のインスピレーション

今回の異文化間交流授業の開発において最も重視されるべきは「新しい価値創造」という点である。現在に至るまでの小学校における異文化体験活動や国際理解授業では、文化に関する学習として、「生活文化」、「伝統文化」の体験や学習を通し、文化の多様性や共通性を認識し、互いの文化の尊重や寛容という態度を育成する内容が多い。しかしながら、本研究は文化間の「相互作用」を重視し、ただ互いに異なる文化を理解し尊重するだけでなく、「相互作用」は常に受容、変化、創新などの行為に伴い、何らかの新しい文化や価値を生むことに重点をお

---

<sup>174</sup>斎藤ひろみ・佐藤郡衛・野山広・浜田麻里・見世千賀子・南浦涼介「実践をまなざし、現場を動かす異文化間教育学とは—テーマ設定の趣旨と成果・課題—」異文化間教育学会『異文化間教育41』、2015年、p.2。

く。今回の漢字を扱った交流授業では、既成の文化に関する知識を把握した上で、新しい価値を創造することを追求する。つまり、日中両国間の子どもたちに、日中の漢字を互いに理解しようとする態度を育成するだけでなく、新しい「共通性」を創ることのできる発想力や創造力も育成する。

本研究では、漢字創造活動を考える時、中国のアーティストである徐冰（シュ・ビン）の芸術作品を参考にした。

彼の作品の中には、文字を弄るものが多い。その中で、二つの作品を紹介する。

一つ目は、木刻印刷した作品『析世鑑(せきせいかん)—天書』(以下『天書』と略す)である。『天書』(図6、図7)<sup>175</sup>は、1987年から徐冰自らが創造した偽漢字を使った意味不明な書物である。この書物の中の4000個の偽漢字は、偏と旁を組み合わせ、漢字のように作られているが、読むことはできず、意味もない。この書物は外観を見ると、この書物は本当の本に類似しているが、中の「内容」をすべて抜き出すと、「本質」がない書物だということがわかる。



図6 『天書』のおもて表紙

<sup>175</sup>図6、図7、図9の写真は徐冰所蔵の作品を中国の有名人（ネット名前:原来是西門大嫂）が撮影したものを本人の許可を得て転載したものである。

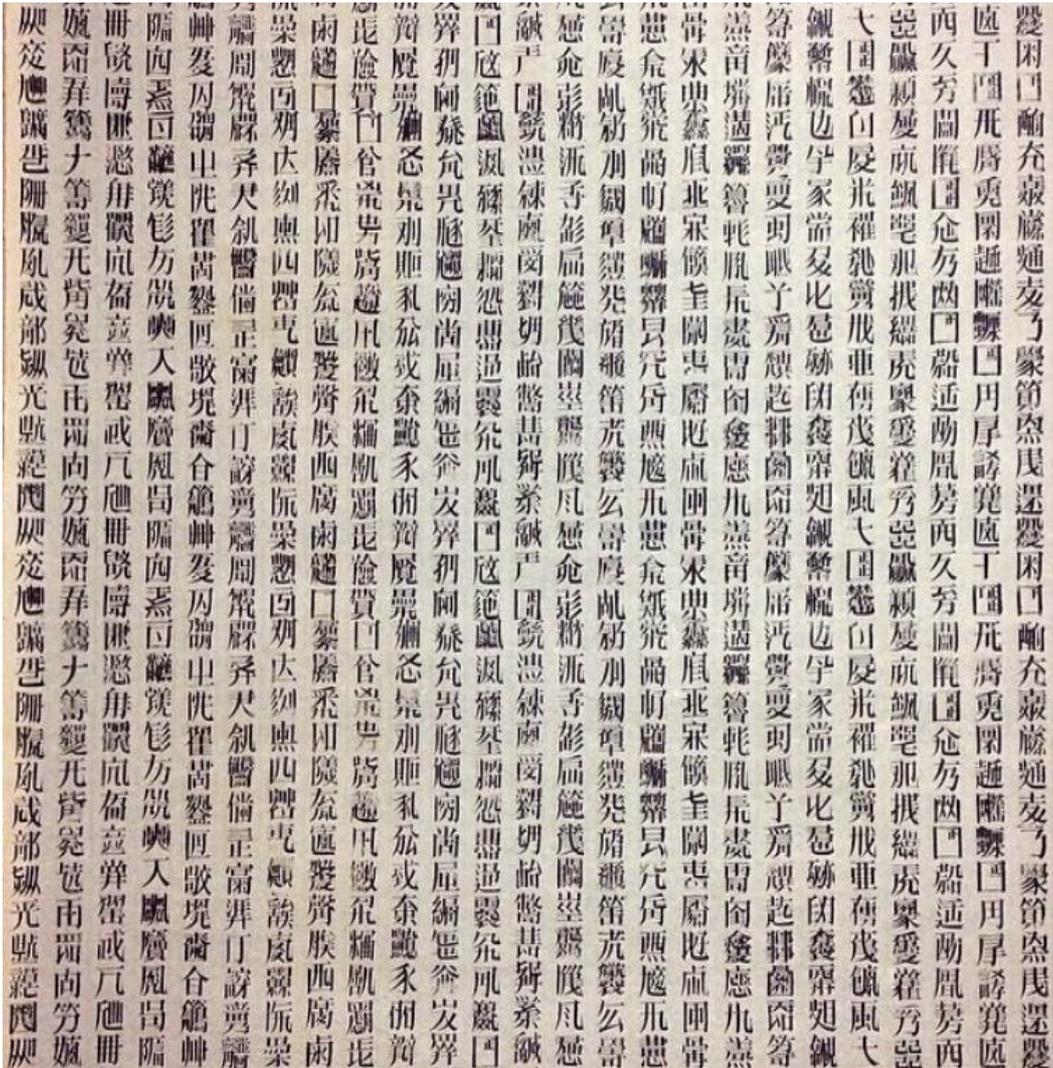


図7 『天書』の偽漢字

二つ目は『地書』という作品である。この作品は『天書』と正反対の作品であり、文字が一つもなく、ただ標識で書かれた本である。2003年から、徐冰は世界から各種類の標識や印を収集・整理し、各専門領域の記号も研究していた。そして、2006年にこの本は正式に出版された。この本は、現代における生活経験があれば、文化背景や教育レベルに一切関係なくだれでも読める。つまり、非識字者でも学者と同じように読書の楽しさを味わうことができる。



的な作品から、本研究は着想を得た。芸術領域でも教育領域でも、固定観念に挑戦し、創造的な考えを持って行動することはどんな社会にとっても非常に重要である。

特に、徐冰の2014年台湾で開催された「徐冰回顧展」という展覧会の一つの活動に注目したい。それは、「造字実験室」である。「造字実験室」が設置された背景には、現代生活において慣れ親しんだ言葉、たとえば「人生」「幸福」など、個人によって異なるイメージのある言葉をそれぞれのイメージに合わせて具現化したことがある。文字や言葉に対するイメージを具現化し、表現すれば、普通見えないイメージを互いに伝えることができるのではないか。このような活動を通し、我々が生きている時代においてさらに多くの体験や理解を得ることができるだろう。

「造字実験室」<sup>177</sup>の流れは以下の通りである。実験室の入り口の言葉を選び、自分にとってのその言葉の意味について考え、その言葉を素材として、また、その言葉の意味に基づく、新しい文字や記号を作る。その上で、創造した文字や記号についての説明文を作る。

「造字実験」の作品の一部分を以下に示す。(図9)



図9 「造字実験」の中、参加者の作品

<sup>177</sup> 「造字実験」の内容と流れは、台北市立美術館のホームページにもとづく、原文は国語、引用者が翻訳した。[http://www.tfam.museum/Event/Event\\_page.aspx?id=2028&ddlLang=zh-tw](http://www.tfam.museum/Event/Event_page.aspx?id=2028&ddlLang=zh-tw) (2016年9月15日最終確認)

参加者は、漢字と自分の生活経験とを結びつけ、新たに多様な形態の文字を作り出した。

一方、徐冰の作品及びこのような創造活動は、異文化間教育と国際理解教育の一つの目標とも一致している。その目標は、世界の人々が平等に共存することである。『天書』は誰にも読めず、現存の文字に対する印象を転覆させるものである。『地書』は誰にでも読め、現在の文字の発展方向の傾向を示し、世界の共通語を創造したいということも表現している。読めても読めなくても、これらの作品は誰でも平等に取り扱うことができる。異文化間教育においても、文化間の共通性と相違性を理解した上で、何か新しい「共通性」に発展させ、互いに理解できる行為を創造することが、必要だと考えられる。このような創造活動は芸術の領域で行われるだけでなく、教育現場でも試される必要がある。このような創造活動が異文化間教育活動で活用されたら、異文化間で互いに深く理解・尊重するために一つの有効な実践方法となると考えられる。

そこで、筆者は今回の異文化間教育の授業の中で、以下のような活動を設けることを考えた。それは、日本と中国の間で新しい漢字を作るという活動である。日本と中国は確かに一部の漢字を使うことにおいては共通しているが、日本語のひらがな、カタカナ、中国の表音文字は異なっている。相手にとって、その部分の言葉や文字はわからない。子どもたちがこの部分の言葉を通じ合うようにするために、中国の表音文字から表意文字に変換したり、日本のカタカナから漢字に変換したりすることができる新しい漢字創作活動を開発したい。漢字を調べたり、漢字を作ったりという体験を通して、日中漢字の「相互作用」を感じることができ、創造力も発揮できるようになる。また、交流活動を通して、互いに作った新しい漢字を相手に発表し、相手国の漢字と自分で作った漢字を観賞し、理解することができる。さらに、漢字を通して、相手の国への認識や自分への認識も深めることが可能であり、交流そのものに対して深く理解することが可能であると考えられる。

## 7.2 授業プログラムの開発

### 7.2.1 目的

授業プログラムを開発するにあたり、その総合的な目的は、前節で述べた通り、日本と中国の子どもを対象とし、互いに相手国の漢字に対する興味を持ち理解すると同時に、自国の漢字の成り立ちを顧みる意識を持たせ、漢字の「共通性」と「相違性」を理解することである。そして、漢字間の「共通性」を利用し、新し

い共通性を創造することができ、漢字間の「共通性」を再認識することができる異文化間交流の方法を探索することである。具体的な授業プログラムの目的は、以下の三つである。

(1) 中国と日本の小学校 5、6 年生に漢字に関する基礎の知識を理解させ、相手国の漢字に対する興味を持たせることである。それを踏まえて、日本と中国の漢字がお互いに交流し、発展してきたことに気付くこと。日本と中国の漢字を理解すると同時に自分も相手の国をはじめとする世界の国の人々とつながっていかうとする気持ちを持つことを目標とする。

(2) 漢字の共通性や相違性に気づき、日本人と中国人の両方が理解できる漢字の言葉を作るという活動を通して、異なる文化間で新しい関連性に気づき、日中漢字に関連する新しい発想を考えさせ、創造力を育成する。

(3) 相手の国との交流を通して、相手の国や文化、及び人々の認識、価値観や判断力を再構築する。

## 7.2.2 方法

中国と日本の小学校における総合的な学習の時間等の中で、国際交流や異文化理解学習が設定されている。そのような交流や学習は自分の国と相手の国の文化を比較し、その文化間の相違性に関する認識に重点が置かれている。このような学習や交流活動は、文化間の関連性や共通性の実態を捉えにくい。そもそも異文化間学習や交流は、具体的な国に応じて授業を構築するべきである。特に近隣諸国の間で、同じ文化圏に属している場合が多い。その際、国と国の視点から比較するだけではなく、文化の共通点や相違点を理解できるようにする。さらに近隣諸国との隔たりを縮小するため、一般的共通性から地方的特殊性への変容を理解することだけに留まらず、異なる文化を越えて一般的共通性を再創造するという視点を加える。

## 7.2.3 授業プログラムの準備・構造

清水ら (2009) <sup>178</sup>によれば、国際交流学習には「協同的交流型」「交流重視型」「場利用型」「成果共有型」という四つのタイプがある。また、本研究の授業プログラムの目標に着目すると、漢字の「共通性」と「相違性」を理解する上に、

---

<sup>178</sup>清水和久・益子典文「小学校における『自律型国際交流学習』のとそのデザイン:国際交流学習の実践事例の類型化に基づく特徴の明確化」石川県教育センター/岐阜大学総合情報メディアセンター『岐阜大学カリキュラム開発研究』第 27 巻第 1 号、2009 年、pp.90-99。

漢字間の「共通性」を利用し、新しい共通性を創造することができ、相手国の文化との「絆」や「相互作用」を再認識することができるという内容は、「場利用型」や「交流重視型」のような知の交流だけで済むものではなく、交流した上で何か成果をあげるという「成果共有型」に対応する。そして、本研究では、異文化交流が中心内容であるが、日本と中国という二つの国の間で展開する交流なので、授業プログラムは、清水ら（2009）が言う国際交流学習の「成果共有型」として作成する。

授業プログラムを作成する際には、陳（2013）の実践授業「小学校5年生における日中遠隔交流授業」という授業の計画を参考にし、ビデオ鑑賞→興味を持つ→学校生活について楽しく交流・学習するという学習のデザインをもとに工夫・改善していく。

今回の授業の構造を図10に示す。

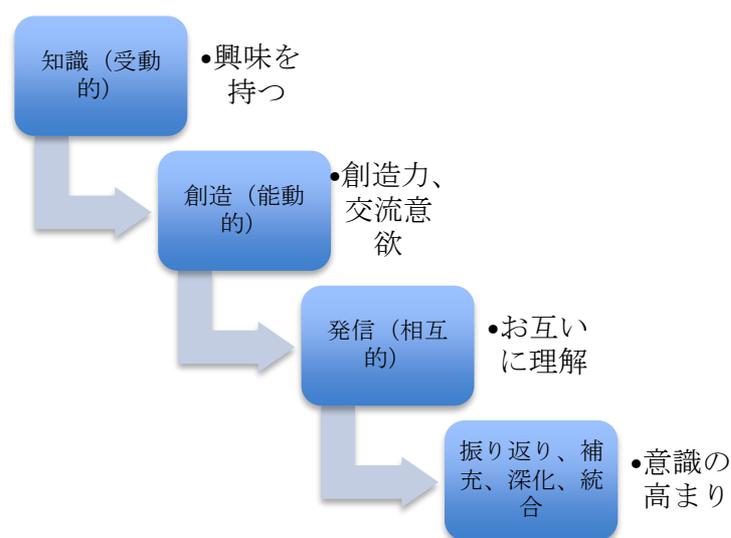


図10 授業プログラムの構造

図10は、日本と中国の子どもたちが理解することができるように、四つの内容構成にした。①「日本と中国の漢字の由来、特徴、発展」、②「日本と中国の漢字の活動」、③「漢字について日本と中国の遠隔交流」、④「日中交流に関する振り返り、まとめ」である。

授業プログラムの開発に向けた事前準備として、以下の五つのことを行う。

一つ目は、交流する学年の選定と子どもの発達段階に関する考慮である。今回の交流授業は小学校段階で行うが、学年を選定する根拠を確立しなければならない。第二章で述べたように、小学校高学年の子どもたちは、単純な事象について

分析・整理することができると考えられる。また、Martyn と Janis (1992)<sup>179</sup>の研究では、異文化理解の臨界期は 10 歳であるとされている。こうしたことから、小学校高学年の子どもたちは、異なる文化を持つ人と交流し、そうした人のことを理解することがしやすいと考えられる。このため、10 歳頃の段階で異文化理解に関する活動を導入することは非常に重要であろう。そして、文部科学省によれば、この時期における子どもの発達において、重視すべき課題には「自他の尊重の意識や他者への思いやりなどの涵養」<sup>180</sup>、「体験活動の実施など実社会への興味・関心を持つきっかけづくり」<sup>181</sup>という 2 点が含まれる。

以上より、10 歳頃の段階で異文化理解に関する体験活動を導入することは重要だと言える。中国の子どもたちについては、第三章で述べたように、現状で中国の中・高校生の授業は非常に多く、宿題・試験の負担も大きい。中・高校生が自分の考え方で問題を考える時間はほとんどなく、創造能力、国際理解能力などの能力の育成はかなり難しい状況である。他方、中国の小学校段階の児童たちは、中学・高校段階の生徒と比べれば、時間に余裕があり、多様な能力を育成するための時間を確保することが可能である。以上の理由で、今回、交流する学年は日本と中国の五年生とする。

二つ目は、両国の小学校の授業に関する文化的基盤の把握である。日本では、一斉授業、グループ活動、個人での活動というように、多様な学習形態を取り入れた授業展開が日常的になされている。中国では、1990 年代から、「素質教育」という新たな教育方針を示した。基礎知識と生活技能の習得と同時に、判断力、思考力、創造力などの能力を含め、全面的な発達を目標とする。日本の「総合的な学習の時間」のような多様な学習形態を取り入れた学習は、中国では「総合実践活動」と呼ばれる。「総合実践活動」について、周 (2009) は、『総合実践活動』は『素質教育』を補完することを目的として、中国の基礎教育課程体系の中で独自の特色をもったカリキュラムとして位置づけられている<sup>182</sup>と述べている。中国の「総合実践活動」は、日本の「総合的な学習の時間」と同じように、多様な学習内容と学習形態を導入したものだ。周 (2009) は中国の「総合実践活動」について、「授業時間は、小学校では 3 年生以上のすべての学年 (中学校も含め)

---

<sup>179</sup>Martyn Barrett, Janis Short. Images of European people in a group of 5-10 - year - old English schoolchildren, *British Journal of Developmental Psychology* 10(4), 1992:339-363.

<sup>180</sup>前出、文部科学省「子どもの徳育の関する懇談会『審議の概要』概要」。

<sup>181</sup>同上。

<sup>182</sup>周媛「中国における『総合的な実践活動』の実施過程と効果に関する実証的研究—子どもたちの 21 世紀型学力を高めるために—」神戸大学大学院人間発達環境学研究科『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 2 (2)』、2009 年、p.52。

で140時間と定められている」<sup>183</sup>と述べている。しかし、学校現場においては、「総合実践活動」によって学校格差が生じている。中国では各地域の経済、社会、文化的状況が大きく異なることから、総合実践活動の実施状況においても学校間に大きな格差が生じている。中国の都市部の学校、特に各都市部の重点学校<sup>184</sup>の環境は日本の学校とほぼ同じである。しかし、今回はそれ以外の学校で授業していることから環境によるバイアスがデータに影響している可能性がある。こうしたことを考慮し、今回の交流授業は、日本の小学校と同様と思われるレベルの都市部の重点校を選定した。

三つ目は、漢字に対する意識を調査するため、漢字についてのアンケートを行う。たとえば「漢字と言われて思い浮かぶこととは何ですか」などの質問である。また、漢字の知識を小学校の子どもたちが楽しく学ぶため、漢字に関するゲーム及び漢字の基礎を紹介する教材（漫画、写真）を用意する。なお、教材の作成にあたっては、子どもたちの漢字習得の手助けとなるように、子どもたちが理解しやすい内容を抽出・整理する必要がある。また、一時間目の学習に対して集中度を落とさないように、様々な工夫を用意しておく。たとえば、漢字の歴史を紹介しながら、クイズを出すなどである。授業の中で、選択型の問題形式を取りながら、楽しく学習ができるように作成する。

四つ目に、二つの地域の教師の役割（撮影・記録・通訳者など）を決める。また、教師用・子ども用のアンケート、インタビュー・コメント用紙・記録用紙を用意する。今回の授業は漢字についての学習・交流である。今回の国際交流授業に関するアンケートを二つの国の子どもたちに配布する。たとえば、中国の子どもたち及び教師たちの国際交流・日本に関する意識を把握し、「日本」に対してどのようなイメージをもっているかを考察するために、事前アンケートを用意する。内容については、「いままで、外国の子どもたちと話したり遊んだりした経験はありますか」という問題から10問の問題を設定する。具体的には付録を参照されたい。このように、毎回の授業が終わる時、その時間についての状況をすぐに把握するため、教師、子どもたち向けのアンケートを作る。アンケートの作成法と内容に関しては、筆者が設定する目標に基づいて作る。具体的な内容も付録を参照してほしい。授業全体の状況の把握及び教師・子どもたちの感想を知るため、授業前と授業後の子どもたちを比較するため、さらに、中国と日本の子どもたち

---

<sup>183</sup>同上、pp.52-53。

<sup>184</sup>中国では、教師のレベルが高く、学校の設備が完備し、環境がよく、実力のある指導者がいる学校を重点学校として選定する。同上、p.58。

を比較するため、アンケートを作る（資料参考）。さらに、授業中のビデオの撮影の仕方について、日本側も中国側も子どもたちの全体的な様子を撮るだけではなく、3～4名子どもを選んで、どのような変容があるかを分析しなければならない。

五つ目は、日本と中国の小学校の時間設定に関する工夫である。今回の異文化間教育の授業は、二つの国において授業の目的と内容はほぼ同じである。しかし同じ学年でも、それまでの学習の内容や漢字に関する知識の程度は違っていると予想される。さらに、各国における教育に関する政策も異なっている。たとえば、日本の小・中・高校では、総合的な学習の時間の中で、地域の学習、国際交流を取り入れた実践が多く行われている。教師が NPO などの機関と積極的に協力することもある。たとえば、NPO 法人企業教育研究会<sup>185</sup>は、キャリア教育、情報教育、食育、科学教育など様々な企業と連携した授業や教材を全国の小中高校に無償で提供している。中国では2001年9月、義務教育カリキュラムの改革が、指定された地域から始まり、従来のカリキュラムの枠の中に、総合実践活動が増設されたが、実態としては、沿海部や発達している都市の小学校が「総合実践活動」で特別な授業を行ったのみで、内陸部や地域によっては「総合実践活動」は十分に行われていない。今回の異文化間教育授業を、特別授業として行う時は、他の教科の時間と調整を行う必要があることが考えられるため、事前に国際授業に関すること（内容・関わる時間・設備）などについて授業を実施する重慶の小学校の授業者に確認しなければならない。時間数は中国の小学校によって決められる。

#### 7.2.4 授業プログラムの計画書

日本側と中国側についてそれぞれ以下の計画書（表 8、表 9）を作った。

---

<sup>185</sup>NPO 法人企業教育研究会は、千葉大学教育学部、静岡大学教育学部を基盤として活動する「企業と連携した授業づくり」を専門とする NPO である。<http://ace-npo.org/about/>（2016年9月30日最終確認）

表 8 日本側授業計画

時	学 習 活 動	評 価 基 準
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>漢字の起源、発展について簡単に紹介する</li> <li>日中漢字の交流に関する歴史説明をする</li> <li>具体的、日本と 中国の漢字の発音・意味・字形について比較・紹介する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>漢字の知識の勉強を通して、漢字の面白さを感じ取ることができる</li> <li>日本と中国の漢字を理解することができる</li> </ul>
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の名前の中の漢字、その意味について調べる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>漢字を調べたり、漢字の意味を聞いたりする活動を通して漢字の魅力を感じることができる</li> </ul>
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>班で協力し合い、カタカナ表記の言葉をその意味や形・機能などから考え、相手に伝わるような漢字を創作する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>漢字を作る体験を通して、漢字の魅力を感じ、創造力を発揮することができる</li> <li>相手を考えた漢字を創作することができる</li> <li>班という活動を通し、コミュニケーション能力を習得する</li> </ul>
4	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本と中国の子どもの自分の名前の中の漢字とその意味を発表する(省略)</li> <li>創作した新しい漢字を発表し合い、それが何かを考える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本と中国の子どもたちは漢字について楽しく交流することができ、漢字の大切さ、素晴らしさを感じ取ることができる</li> <li>プレゼンテーション能力を習得する</li> </ul>
5	<p>&lt;道徳&gt;資料「鑑真和上」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>資料から困難を乗り越え、日本に仏教を伝えた鑑真の生き方を知る</li> <li>同時代に阿倍仲麻呂や吉備真備など日本人が中国で活躍したことを知る</li> <li>「交流」の意味を見つめ直す</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>困難にあっても仏教を伝えようとした鑑真の生き方を考えることができる</li> <li>鑑真や阿倍仲麻呂・吉備真備の生き方を知ることを通して、日中がお互いに交流し、発展してきたことに気づく</li> <li>交流の意味を考え、自分も世界の国々の人ともつながっていかうとする気持ちをもつ</li> </ul>

※ 四時間目 交流授業のみ合同。その他はクラスごとに実施

表9 中国側授業計画

時	学 習 活 動	評 価 基 準
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・漢字の起源、発展について簡単に紹介する</li> <li>・日中漢字の交流に関する歴史説明をする</li> <li>・具体的、日本と中国の漢字の発音・意味・字形について比較・紹介する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・漢字についての学習を通して、漢字の面白さを感じ取ることができる</li> <li>・日本と中国の漢字を理解することができる</li> </ul>
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中国語の中の表音文字の言葉を選んで、新しい漢字を創造する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・漢字を創造する体験を通して、漢字の魅力を感じられることができ、創造力も発揮することができる</li> <li>・相手を考えた漢字を創作することができる</li> <li>・班という活動を通し、コミュニケーション能力を習得する</li> </ul>
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新しい漢字を発表する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本と中国の子どもたちは漢字について楽しく交流することができ、漢字の大切さ、素晴らしさを感じ取ることができる</li> <li>・プレゼンテーション能力を習得する</li> </ul>

※三時間目 交流授業のみ合同。その他はクラスごとに実施

## 8 授業プログラムの実施

### 8.1 日本側の実施状況

日本側の実行の基本状況は以下である。

- ①実施時期 平成 26 年 5 月～6 月
- ②実施校 千葉県市原市立 A 小学校
- ③教 科 国語・総合的な学習の時間・道徳
- ④学 年 小学校 5 年生 2 クラス(計 59 名)

#### 8.1.1 第一時間目指導案

(1) 本時の名前 「中国の漢字、日本の漢字」(分別授業)

(2) 指導過程 (授業前事前アンケートを配布する)

学習活動	主な発問と予想される児童の反応 (・) (発問・指示=○)	ねらいに迫る手だて (・) と期待される児童の姿 (○)
1 本時のめあてを知る。(5分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○去年の今日何を食べましたか ・覚えてない、忘れました</li> <li>○来年は、今日の食べ物を覚えていられるようにするためにはどうすればいいですか ・写真を撮る、書く、記録する</li> <li>○文章を見て、中国語と日本語はどこが同じですか/どこが違いますか ・漢字、数字/ひらがな、カタカナ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>※授業は授業者が基本的にパワーポイントを用いて実施する</li> <li>○日本語と中国語の文章を出す子どもたちに「漢字が同じ」ということを気付かせたい</li> <li>・本時のテーマを押さえる。「中国の漢字、日本の漢字」</li> </ul>
2 漢字の起源を知る(7分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ひらがな、カタカナはもともと漢字から生まれました</li> <li>○漢字をめぐる六つのキーワードについて話します</li> <li>○漢字の発明者は誰ですか ・中国人、中国</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パワーポイントで「約6000年前～4000年前」、「中国の漢民族」、「文字」、「表記」、「表意」、「日本語や中国語など」のキーワードを押さえる</li> <li>・「蒼頡造字」のビデオを流す</li> </ul>
3 漢字の字形の発展を知る。(3分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○漢字の起源に関することを紹介する「結繩」、「蒼頡造字」</li> <li>○「馬」と「魚」の字形の変化を見てください</li> <li>○最後の部分は皆さんわかりましたか ・漢字はちょっと変だ ・簡単になった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>※ 中国の大陸部は近代から漢字を書きやすい、覚えやすいため、漢字を簡略化する</li> <li>・パワーポイントでクイズを出す</li> </ul>

4 日本 の漢字 の紹介 (8分)	○世界で漢字を使ったことがある 国あるいは今でも使用している 国はいくつありますか 「日本と中国のみ、昔でも今でも 漢字を使っている」	子どもたちに回答させる 正解を発表する ・「5、6世紀に漢字が伝来」、「 ひらがな、カタカナ」、「国字」 、「新しい言葉の創造」という 四つのキーワードを押さえる ・「警察」の例を出す
5 日本 と中国 の漢字 比較一 同じ形 の漢字 の意味 を比較 する (17分)	○では日本の漢字の発展を紹介し ます  ○では現在日本と中国の漢字では どのような違いがありますか  ○それでは、これから漢字のクイ ズを出します、皆さんよく見て ください ○では一つ一つ説明します	・「中国、日本、韓国は808個の 漢字は通用する」というニュー ースを出す ・パワーポイントを出す。子ど もたちに考えられる時間を残 す。「意味が全く違う漢字」と 「意味がちょっと違う漢字」 について、説明をする ○「中国と日本はお互いに良い影 響を与え合う」と関わってい こうとする気持ちをもたせた い
6 まと めをする (5分)	では今日の授業についてまとめ よう	

### (3) 授業の様子

授業者が作成したパワーポイントを活用しながら漢字の歴史等について説明した。(最初の部分は授業者と子どもの言葉から説明する。Tは授業者の発言、Cは子どもの発言、○は子どもや授業者の行動を表す)

T いきなりですが、皆さん、去年の今日、何を食べましたか？

C え？去年？（「覚えてない」という声も聞こえた）

T じゃ、問題を変えます。皆さん、今日の朝ご飯は何を食べましたか？ 覚えていない人は手を挙げてください

○ ほぼ全員が手をあげている。

T 今日のははっきり覚えていますね。では、来年のこの時、今日の食べ物を覚えられるようにするためには、どうすればいいのでしょうか？

C （少し考えた）メモする。どこか書けばいい。

T 皆さんすごいですね。実はわたしの方法も記録です。ちょうど、わたしは去年の5月30日の食べ物を記録しました。皆さん見てください。

○ 中国語で書いてある文章をパワーポイントで示した。(図11)

C え？ 中国語？ 分からない。(不安、困惑した顔つきが見られた)

T ごめんなさい、皆さんは中国語分からないですね。しかし、みなさん、よ

く見ると、この記録の中で、何か分かる文字とかがありますか？

C (子どもたちは真面目に文章を見た後、漢字の言葉を見ながら少しずつ声を出し始めた。) あっ、寿司、今、抹茶、特別...

T そうですね、何となくわかりますね。実は、私はみなさんが分かりやすくなるように、文章を日本語に翻訳しました。

○ 授業者は同じ意味の日本語の文章を示した。(図 11)

C (子どもたちは、最初は「あっ、こういうことだ」と言った) なるほど、寿司が一緒だ、抹茶じゃなくて抹茶アイスだった...

T そうです、同じ言葉もあれば、違う言葉もありますね。では、この二つの言語の文章の中で、共通するものは漢字ですが、違うものはなんですか？

C (子どもたちはほぼ一斉に声を出した) ひらがな、カタカナです。

T 皆さん素晴らしいです。そういうことです。でも実は、日本語の中のひらがなとカタカナも昔の漢字から生み出されました。また日本語と中国語の関連は不思議なことが多いです。日本と中国はせっかく同じ漢字を使っていますので、今日は一緒に漢字の世界に入りましょう。

### 日本語と中国語同じ意味の文章

去年の今日

昼ごはん

何を食べましたか

今天很热。所以不想吃温的，中午是跟朋友一起吃了寿司。然后还吃了抹茶冰激凌，特别好吃。

今日は暑かったです。だから、温かいものは食べたくない、昼ごはんは友達と一緒に寿司を食べました。そして、抹茶アイスも食べました。美味しかったです。

図 11 日本語と中国語同じ意味の文章

ここで、導入部分が終わり、中国語の文章と日本語の文章を比較し、「漢字」という共通点を取り上げ、またひらがなもカタカナももともとは漢字から作り

出されたことを教え、パワーポイントでその由来を示すと、子どもたちは興味をもって授業に取り組んでいた。

ここから、漢字の基本概念や漢字に関して把握する必要がある知識を子どもたちに伝えた。その知識の中から、授業者は「約 6000 年前～4000 年前」、「中国の漢民族」、「文字」、「表記」、「表意」、「日本語や中国語など」という六つのキーワードをパワーポイントで示した。

①「約 6000 年前～4000 年前」は漢字が現れるおおよその時期であることを、子どもたちに伝えた。

②「中国の漢民族」という部分を説明する時、「漢字の発明者は誰ですか」と質問し、子どもたちはほぼ「中国人」と答えた。授業者は漢字が現れた時はまだ中国や中国人という名前はまだなく、その時代の王朝であること、しかし、昔でも今でも、中国の民族の大部分は漢民族であり、漢字は漢民族が作ったものであることを子どもたちに伝えた。

③「文字」についての説明では、漢字が文字の一種であるということを子どもたちに伝えた。また「世界中には、漢字以外にも、いろいろな文字があります。たとえば日本の国字、つまり和製漢字、英字なども文字の一つの種類です。」と話した。

④「表記」については、「漢字の一つの特徴は、最初の時私が出した日本語や中国の文章のように、漢字を用いて書き表すことができることです。つまり、記録できることです。」ということ伝えた。

⑤「表意」については、授業者は英字（アルファベット）・ハングルの写真を示し、漢字と比較した。「英字とハングルはただの『音』を表し、それ自体には意味がないです。他のアルファベットやハングルを組み合わせると、意味が生まれます。たとえば『Zoo』は動物園です。しかし漢字は一字一字を一定の意味にそれぞれ対応させます。たとえば『山』『火』などは、字面を見ると、意味がわかります。」と説明した。

⑥「日本語や中国語など」については、現在、漢字は主に日本語や中国語で使用されているということ伝えた。

この部分、子どもたちはほぼ真面目に聞き、パワーポイントや授業者から目を離さない姿が見られた。

その後、漢字の起源と発展に関する物語の説明に入る。漢字の起源におけるもっとも有名な物語は「結縄」である。まず「漢字がなかった時代に、人々が縄（なわ）の結び方によって数量などを表示・記録したり、意味を伝えたりしたもので

す。」と紹介した。また、中国の伝説では、漢字の発明者は、蒼頡という人物と  
 言われていること等を紹介した。「蒼頡造字」というアニメのビデオに日本語の  
 字幕を付けて見せ理解がしやすいようにした。子どもたちの注意力が持続するよ  
 うに、四つの目がある「蒼頡像」という写真を持って、「蒼頡は中国の古典書籍  
 に、四つの目があると書いてあるので、蒼頡はいつもこのようなイメージです」  
 と子どもたちに紹介し、写真をよく見た子どもたちはほぼ皆驚いた。その後漢字  
 の形の変化を紹介し、「馬」と「魚」という二つの漢字の字形の変化を子どもた  
 ちに提示した。(図 12)

甲骨文	金文	小篆	隶书	楷书	
𩺰	𩺰	魚	魚	魚	鱼
𩺰	𩺰	馬	馬	馬	马
𩺰	𩺰	為	為	為	为
𩺰	𩺰	受	受	受	受
𩺰	𩺰	車	車	車	车

図 12 漢字の字形の変化<sup>186</sup>

ここで、日本側の子どもたちに特に説明するのは、図 12 最後の部分の「簡  
 体字」である。中国の大陸部は近代以降漢字を書きやすく、覚えやすくなるた  
 め、漢字を簡略化するということを子どもたちに伝えた。

次に、日本の漢字の内容を導入する前に、クイズを出した。「漢字を使ったこ  
 とがある国あるいは今でも使用している国はいくつあるか」というクイズに、多  
 くの子どもたちは「三つ」「四つ」と答えた。「四つ以上」という正解を提示した  
 とき、子どもたちは「え」という声を出して、驚いていた。授業者はすぐアジア  
 地図を示し、漢字を使用したことがある国と現在使用している国について子ども  
 たちと共に確認した。その後、「日本と中国のみ、昔も今も漢字を使っている」  
 ことを子どもたちに伝えた。

次に本番である日本の漢字の知識の導入を始めた。日本における漢字について  
 「5、6 世紀に漢字が伝来」、「ひらがな、カタカナ」、「国字」、「新しい言葉の創

<sup>186</sup>学大教育「漢字字形演変表」、<http://tiku.exueda.com/question/541348.html> (2016 年 12 月 16 日最終確認)

造」という四つのキーワードに基づいて簡単に紹介した。特に、「新しい言葉の創造」では、日本は近代から西洋文明を受け入れ、新しい概念に基づく、多数の漢字の言葉を作ったという内容を子どもたちに伝え、さらに、日本で作られた漢語「警察」を例に、「日本だけでなく、中国の大陸部、香港、台湾などの地域でも幅広く使用している」ということを子どもたちに伝えた。

そして、中国と日本の漢字の共通点と相違点を説明するため、まず「中国、日本、韓国では 808 個の漢字が共通している」ことを子どもたちに示した。(図 3) また、漢字を「意味が同じ漢字」、「意味がちょっと違う漢字」、「意味が全く違う漢字」に分類し、日本語と中国語の中の漢字を比較した。(図 13)

A : 結婚 作文 学校 春 豆腐
B : 手紙 娘 床 勉強 汽車
C : 検討 反対 趣味 約束 暖房

図 13 漢字の分類

A が「意味が同じ漢字」 B が「意味が全く違う漢字」 C が「意味がちょっと違う漢字」である。中国語の意味と全然違う漢字に、子どもたちは驚いていた。特に「手紙=トイレットペーパー」「娘=母」「汽車=自動車」等については、反応が大きく、漢字についての興味関心が高まったと感じられた。

最後に、黒板で要点—漢字の六つのキーワード、蒼頡の画像、日本人が作った言葉「警察」などのポイントを子どもたちに伝えた。また、「古代は中国から日本に漢字を導入、また近代あるいは現代は中国が日本からいろいろな新しい漢語の影響を受けていた」ということを伝えた。中国と日本はお互いに良い影響を与え合っていたということを説明し、授業を終了した。

#### (4) 第一時間目の考察

授業全体を通して、授業の目標である「漢字の知識の勉強を通して、漢字の面白さを感じ取ることができる」と「日本と中国の漢字を理解することができる」が達成されたのかを授業実施前後のアンケートや授業の様子などから考察する。

その結果、①漢字の歴史や伝説について理解する、②日本と中国の漢字の同じ

ところと違うところが分かる、③日本と中国の漢字がお互いに影響しあっていることが分かる、④中国と日本の漢字について興味を持ち、もっと勉強したいという意欲をもつ等について、目標は達成できたと考える。

授業前、「中国の漢字（歴史文化など）について知りたいですか」という質問に対して、10名の子どもたちが「あまり知りたくない」、「ぜんぜん関心がない」と回答していたが、授業後には、その10名全員が「もっと中国の漢字（歴史文化など）を勉強したい」と回答している。特に授業前に「ぜんぜん関心がない」と回答した子が、授業後には「もっと勉強したい」と回答していることから、この授業によって漢字学習に対する興味を持たせることができたことがわかる。

また、「授業アンケート」では、「今日の授業は楽しかったですか」という質問に対して、5年1組および2組の全員（59名）が「とても楽しかった」と回答している。楽しく、よい学びとなったことを子どもたちも感じている。「漢字の面白さを感じ取ることができる」という目標に関するA、B、Cの以下の自由記述からも、少なくとも一部の子どもについては授業の目標が達成されたことがうかがわれる。

A: 今日の授業はとても難しくて、わけの分からない授業をやるのかと思っていたけれど、とても楽しくて、面白い授業でした。クイズの答えは自分が思ってもいなかったの、とてもビックリしました。手紙、切手、娘などの漢字の意味が中国と全然違っていたので、本当に面白かったです。

B: 日中の漢字の意味が違うなんて初めて知りました。中国の前の漢字はどういうのですか？ 中国のことが良くわかりました。ありがとうございます。

C: 漢民族が最初に漢字を作ったことに驚きました。意味が違う漢字は面白かったです。日本と中国の漢字がお互いに尊敬していることがすごいなと思いました。もっと日本と中国の漢字の意味の違いを知りたいです。

本授業により、「漢字の知識の勉強を通して、漢字の面白さを感じる」ことができたようである。また、今回の授業から、驚きを持って日本と中国のつながりに気づいた子どもが多く見られた。その他、「楽しかった」「面白かった」「次の授業が楽しみ」等の感想が多く見受けられた。

現場の協力者からの意見や教師との反省会で出た意見をまとめた課題は次の通りである。

#### (1) 板書構成の工夫

授業者はパワーポイントを中心として授業を行ったが、板書は、漢字についての六つのキーワード、蒼頡の画像、「警察」という言葉、「日本と中国お互いに影響している」というセンテンスのみであった。漢字に関する知識を整理して掲示するなど、子どもたちに内容がわかりやすいように板書を工夫したほうがよかった。

## (2) 内容・選択漢字の難易度

日中の漢字の知識は5年生の子どもたちにとっては、難しい内容である。「表意」、「結繩」という概念がよく分からない子どもが多かったと考える。また、日本で作った「警察」という漢字は、子どもたちはまだ学習しておらず、自分で書けないことが、授業中に分かった。全体的に難易度が高く、5年生の子どもたちに相応しい漢字の知識を精選する必要があった。その上で、もっと分かりやすく子どもたちへ伝える工夫が必要である。

### 8.1.2 第二時間目指導案

#### (1) 本時の名前 「名前の漢字の意味は」(分別授業)

#### (2) 指導過程

学習活動	主な発問と予想される児童の反応(・) (発問・指示=○)	ねらいに迫る手だて(・)と期待される児童の姿(○)
1これまでの学習を振り返る。(2分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○今まで漢字について知識を学習しました、どうですか</li> <li>・楽しかった</li> <li>・今までわからないことがわかった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○自分の名前はどんな意味をもつかということ伝え、調べる意義に関心を持たせる</li> </ul>
2学習課題をつかむ。例を出す(8分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○漢字は意味があります、では自分の名前の漢字の意味がわかりますか               <ul style="list-style-type: none"> <li>・ちょっとだけわかる</li> <li>・わからない</li> </ul> </li> <li>○今日は班でまず自分の名前を調べ、班で交流し、後は発表しよう</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時の課題を押さえる名前の中で漢字が無かった子どもは、家族や先生の名前の漢字の意味を調べさせる</li> <li>・教師が作った例を示し、説明をする(最後ページ、デザインも自由)</li> </ul>
3漢和辞典で調べる(20分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○では辞書どう調べますか               <ul style="list-style-type: none"> <li>・総画索引、部首索引、音訓索引</li> </ul> </li> <li>○では班で調べよう</li> <li>○発表者は前に来て、プロジェクターを利用しながら発表しましょう</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「班で1人の名前の漢字を選んで、調べる」ことを伝える</li> <li>・ワークシートを配布する</li> <li>・机間支援をし、やり方がわからない子を教える</li> <li>※中国人協力者の指導</li> <li>・中国での意味を中国語辞書で調べあげ、教える</li> </ul>
4各班の調べた	<ul style="list-style-type: none"> <li>○自分の名前の漢字の意味はど</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・それぞれの名前には意味</li> </ul>

漢字を発表する (12分)  5まとめる (3分)	うですか ・驚いた、楽しかった ・中国でこういう意味があつてびっくりした	の願いがあることをおさえる
---------------------------------------	--	---------------

### (3) 授業の様子

まず、一時間目の授業の内容について簡単に振り返った。日本と中国における漢字の意味は同じところがあるが、違うところもあるということから導いて、「今日は、自分の名前の漢字について調べよう」という学習問題を設定した。

このクラスには外国籍の児童もおり、名前に漢字がない児童もいた。その児童に対しては、家族や先生の名前を調べる課題を与えた。調べた後班内で発表すること、班の代表者を選んで、みんなに発表してもらうことや「中国の協力者(留学生)に自分の名前の漢字は中国でどういう意味があるのかを尋ねよう」という本時の活動を明確に伝えた。

そして、担任は自分の名前「幸」を例に、子どもたちと漢字字典の調べ方を確認した。担任の説明後、子どもたちは自分の名前の漢字についてそれぞれ調べた。1組の女子児童Aの班(2班)の様子を中心に報告する。

この班は、他の班と比べて静かに自分の名前を調べていた。Aともう1名の女子児童は自分の名前の漢字を調べた後、自分のクラスメートの名前について話し、一緒にクラスメートの名前にある「佳」という漢字を調べ、非常に興味を持っている様子が見られた。他の1名の男子児童は調べる方法がよくわからなく、2名の女子児童の協力を得ていた。そして、Aは中国語の意味を知りたくて中国人の先生と話し、自分の名前の中国語の読み方と意味を知った。中国人の先生に「日本と中国、どちらの意味が自分に相応しいですか、家族はどんな期待を持っていますか？」と聞かれて、班のメンバーは皆悩んでいた。発表者を決めるとき、「ジャンケン」という方法で決めたが、Aが代表者に決まった。Aは、自分の発表のために言葉の練習を行っていた。

その後、担当教師は、「そろそろやめてください、本当は全員発表してもらいたいのですが、時間がないため、各班代表者を選んで、発表します。」と説明した。そして、各班の代表者を確認した後、1から5班という順番で発表を行った。最初は、1班の発表である。代表者は自分の紙を持ち、クラスメートの前で立ち、紙をスクリーンに映しながらみんなに「未」という漢字の読み方と意味を発表した。はっきりした声で発表し、最後に「『未』は中国でも日本でも意味が同じです」と言った。次は2班のAである。自分の漢字「衣」について日中それぞれ

の意味を発表した。3 班の発表の漢字は「博」である。発表が終わった後、「自分の名前なのに、実際の意味は分からない」という感想を言った。次は 4 班の発表であった。自分の名前の文字「美」を発表する時、「羊」と「大」の合成が「美」であるという豆知識を紹介して、子どもたちは驚いていた。最後は、6 班の子ども漢字「彩」で、「彩」は中国語と日本語で違う意味があるという発表があった。その後、担任は時間が余っていることを確認し、4 班のもう 1 名の子どもの名前の「光」という漢字の意味を発表させた。

また、2 クラスの発表の中で、B は自分の名前の漢字「俊」について発表し、最後に「中国では、かっこいい、きれい、おいしいという意味があります。」と言って、クラス全員が大笑いした。

代表者の発表後、「自分の名前を調べて、意外だと思った人は手を挙げてください」と言うと、約 3 分の 1 の子どもが手を挙げた。そして、担任は自分の漢字「幸」を例として、「先生は自分の漢字を調べた時に、知っている意味もありましたが、知らない意味もあって驚きました。」と言った。

「お父さんとお母さんにどんな、願いを込めて自分の名前を付けてくれたのか、帰ったら聞いてみましょう」と課題を提示して、授業を終了した。

#### (4)授業の考察

今回の授業は自分の名前の漢字の意味を調べるという内容であったため、授業後のアンケートの「自分の名前の漢字の意味についてわかったか？」という問いに対して、「よくわかった」と回答した子どもは、54 名中 39 名（72.2%）であり、「まあまあ」と答えた子どもを含めると 9 割以上の子どもが、肯定的回答をしていた。また、「自分の名前の漢字だけでなく、他の漢字についてもっと興味を持ち、もっと勉強したいですか？」という問いに対して、「とても」と回答した児童は、54 名中 48 名（88.9%）であった。自由記述では、「自分の名前の漢字について良く分かりました。中国の意味を知ってびっくりしました」という記述が多く見られ、今回の授業を通して驚きを持って日本と中国の繋がりに気づいた子どもが多く見られた。また「また漢字の勉強をやりたい」「中国の漢字をもっと知りたい」等の記述を半数以上の児童がしており、漢字学習の魅力を感じ、もっと勉強したいという意欲がでてきたことがうかがえる。

以上の分析より、本時の目標である「漢字を調べたり、漢字を作ったりする体験を通して、漢字の魅力を感じることが出来る」という目標が達成されたと判断したい。

### 8.1.3 第三時間目指導案

(1) 本時の名前 「新しい漢字をつくろう」(分別授業)

(2) 指導過程

学習活動	主な発問と予想される児童の反応 (・) (発問・指示=○)	ねらいに迫る手だて(・) と期待される児童の姿(○)
1本日のめあてを知る (2分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○中国人でも日本人でも漢字を使いますが、一つの問題があります、これはどんな問題ですか</li> <li>・わからない／言葉通じない</li> <li>○せつかく二つの国が漢字を使っているのに、中国の人はカタカナがぜんぜん分からないです</li> <li>○その問題を解決するために、カタカナを漢字に変えましょう、新しい漢字をつくろう</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○問題を意識して新しい漢字に関心を持たせる</li> <li>・本時の課題を押さえる</li> </ul>
2教師がつくった例を見る (8分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○(作った漢字「アイスクリーム」を出しながら)これは何の意味を表しますか</li> <li>・かき氷</li> <li>・アイス</li> <li>・わからない</li> <li>・アイスクリーム</li> <li>○作った作品は中国の子どもに発表する可能性があるます</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業で作った例を示し、説明をする(成り立ちと作った結果全部2ページ)</li> <li>・班でのやり方を教える</li> </ul>
3新しい漢字を作る (20分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○では私が用意したカタカナのカードを一つ選んで、作りましょう</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・班で1人の名前の漢字を選んで漢字を作る</li> <li>・他の班に内緒する</li> <li>・ワークシートを配布する</li> <li>・机間支援をし、やり方がわからない子を教える</li> <li>※中国人協力者の指導</li> <li>・作った漢字は中国人が分かるかどうかをチェックする</li> </ul>
4各班作った漢字を発表する (13分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○発表者は前に来て、プロジェクターを利用しながら発表しましょう</li> <li>○発表するとき、まず漢字を見ながらその意味を推測してください、後は正解を発表します</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○子どもたちにプレゼン能力を鍛える</li> <li>・教師は感想を言う</li> <li>・各班で感想を聞く</li> </ul>
5まとめる (2分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○皆さんの創造力は素晴らしいです</li> <li>○作った漢字をどう思いますか</li> <li>・素晴らしい、楽しかった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○漢字を作るという活動を通して、創造力、相手を考えながら作るという「思いやり」という心を持たせる</li> </ul>

(3)授業の様子

最初に、一、二時間目の内容を簡単に振り返り、その中で「日本と中国は両方

とも漢字を使っている」ことを強調し、授業を始めた。

中国人である授業者は「中国の人は日本語が分からなくても、漢字を見れば大体分かるが、ひらがなとカタカナはぜんぜん分からない」という事実を伝えた。

授業者は、黒板に「問題：中国の人は日本のカタカナが分からない」と書いた。

「もし、中国の人はカタカナが分からない場合、どうすればいいでしょうか？」と問いかけると子どもたちは黙ってしまった。その時、1人の子どもが「漢字にする」と答えた。今日の学習課題「カタカナ→漢字」と板書した。

そこで、授業者が作った漢字を出した。(図 14)

「え？ なに？ アイス？ かき氷？」「アイスクリーム？」と正解がでた。

「これは私の考えた「アイスクリーム」です」と話すと「面白いけど難しいなあ」とのつぶやき。

そこで、「アイスクリーム」という漢字の組み合わせ、自分の考え方について子どもたちに説明した。また、作り方に関して、①「形を表す」、②「意味を表す」、③「2文字3文字ok」、④「説明文(図)を書く」という四つのポイントも子どもたちに説明をした。



図 14 授業者作った漢字「アイスクリーム」

最後の説明は、クイズという形式で発表を行うため、作る際には、他のグループに教えないようにすることを確認した。

課題となるカタカナは、各班の代表者がカタカナのカードを引いて決めた。

最初、各班は、自分のカタカナの単語を見た後、ほぼ全員が悩んでいる様子で

あった。今回は、2クラスのCがいる班の様子を考察した。以下が、その場面である。

この班が選んだカタカナ言葉は「トマト」である。最初、メンバー全員が「どうしよう」、「わからない」と戸惑っていた。そのとき、授業者は「トマトの形と色から考えて、どうですか」と助言した。Cの隣の女子児童はすぐ静かに、自分で作る「トマト」に集中していた。隣の女子児童は悩んでいたが「トマト、赤くて丸い感じ、そして栄養がありますね」と話しながら、「トマト」を完成した。作った後、班のメンバーは自分で作った漢字を展示し、皆の意見を聞いた。「君のトマトは複雑だ」、「それは絵に似ているな」というような意見をそれぞれ出し合った後、自分の漢字の修正を続けていた。その後、Cの隣の女子児童は自分が修正した漢字について協力者を呼び、「どうですか」と聞いた。協力者は「いいじゃん、分かりやすいですよ」と認めた。その時、女子児童は『赤』という漢字は中国の意味と一緒にですか」と協力者に質問した。「同じ意味です」という肯定の答えをもらうと、Cや他の班の子どもたちが「それはいいね」と言った。その女子児童は自分の漢字に自信を持ち、Cと一緒にどんどん漢字の説明文を書き始めた。Cの班は全員が完成した後、だれを代表にするのか、悩んでいた。その時、授業者は「では、皆の作った漢字を並べて、どれがいいのかを指差しましょう」と言った。結果は、全員がCの隣の女子児童の漢字を選んだ。その後、全員が発表するために書き直し、練習を始めた。

発表の時間になると、担当の教師は、各班の代表者を確認した後、1から5という順番で発表を行った。

Cの班の発表について説明する、Cと隣の女子児童は、紙を持ち、クラスメートの前で立て、「トマト」という新しい漢字の紙をスクリーンに映しながら「その字のカタカナは何ですか」と皆に聞いた。最初は誰も分からなかったが、授業者が「丸くて赤いそして栄養があるものはなんですか」と助言した。1人の子どもが「トマト」と答えた。女子児童は「正解です」と言い、「1、○はトマトの形です。2、トマトは赤くて、栄養があって、土から育っていて食べ物です。3、このような漢字にしました」と説明した。(図15)

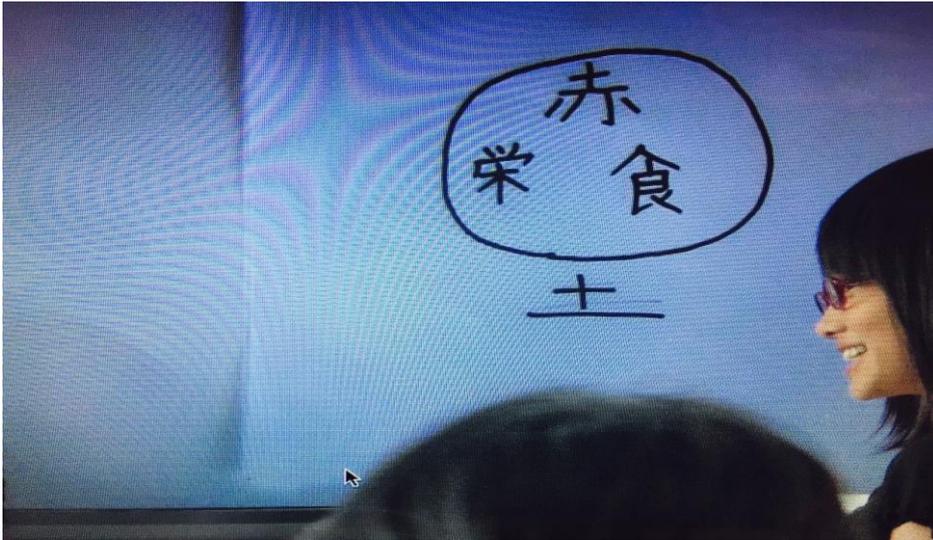


図 15 作成した漢字「トマト」の発表

各班が皆熱心に取り組んでいた。子どもたちが考えたカタカナ言葉を漢字にしたものは秀作揃いであった。作品の一部を図 16 に示す。たとえば、1 班のカタカナ言葉は「カレンダー」である。「カレンダー」を表す漢字は、一から十を組み合わせた新しい漢字であった。「①一から十は日付です。②それをあわせれば、31 日までの日づけになる。③月と日で何月何日ということがわかります」という説明には、他の班の子どもたちも感心していた。「シーソー」(右上)や「ステーキ」(右下)「チョコレート」(左下)等の秀作ができていた。子どもたちの創造力のすばらしさに驚かされた。

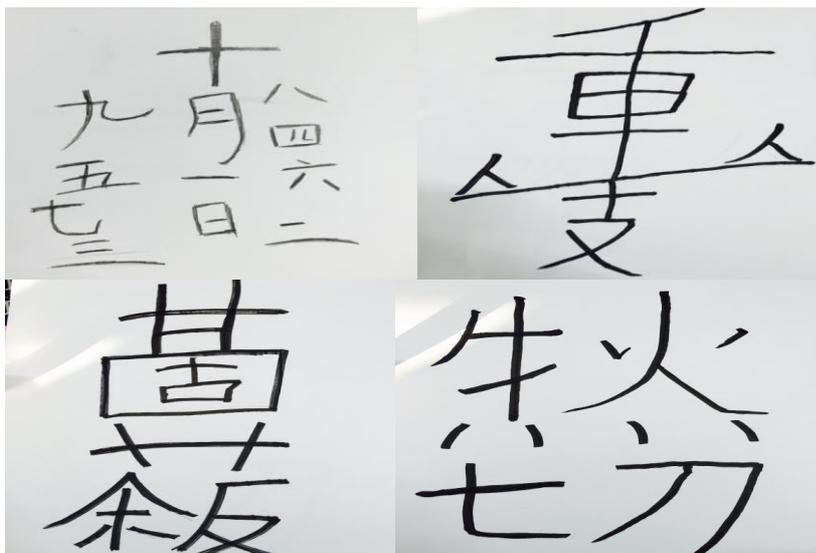


図 16 子どもたちが作った漢字 (左上→右下)「カレンダー」、「シーソー」、「チョコレート」、「ステーキ」

各班が発表した後、時間となり、授業が終了した。

## (2)授業の考察

授業の目標である「漢字を調べたり、漢字を作ったりする体験を通して、漢字の魅力を感じられることができ、創造力も発揮することができる」、「相手の国の人を考えながら作る「思いやり」の育成」が達成されたのかを検討したい。まず、授業後のアンケートから見ると、「班で新しい漢字を作ることができましたか？」という問いに対して、「できた」と回答した子どもは、54名中51名（94.4%）であり、「まあまあ」と答えた子どもを含めると全員が、「班で新しい漢字を作ることができた」と回答している。また、「新しい漢字を、また作ってみたいですか」という問いに対して、「はい」と回答した児童は、54名中53名（98.1%）であった。1名は「もう疲れた」という理由で「もう作りたくない」と回答した。また、「自分あるいは他の班が作った漢字についてどう思いますか」という問いに対して、「上手くできた」、「不思議」、「分かりやすい」という回答があったが、「他の班が作った漢字がすごい」、「画数がちょっと多いな」、「難しい」という回答も多かった。

次に、協力者を中心に見ると、半数の班は漢字を作成した後、中国人協力者に「この漢字は中国の子どもたちにわかりますか」と聞いた。半数の子どもが「相手国のことを考える」ことを意識して作成したと判断できるだろう。また、一部の子どもたちが意識しないまま漢字を作成したが、協力者がその子どもに「それは中国の子どもたちがわかる」と言うと、それを聞いた子どもたちが思い出し、自分の漢字を中国人協力者に見せ、「これは中国の子どもたちがわかりますか」と聞いた。ここから、この「相手の国を考える」という目標は十分に達成されたとは言えないが、協力者の提示や助言、授業最初の説明によって子どもたちに意識させることが重要だと考えられる。

自由記述では、ほぼ全員が、「楽しかったからまた作りたい」と書いていた。「いろいろな発想ができてとても楽しかった」と書いた子どもも多かった。また、「中国にカタカナがないことは知りませんでした。また、カタカナ言葉の漢字を作り中国でも読める漢字を作ります」という記述が多く見られ、今回の授業を通して中国との繋がりを意識した子どもが多く見られた。

授業観察者は、「子どもたちが集中していた」「楽しそうだった」「いつもならあきらめる子が最後までがんばっていた」等、授業への姿勢がとてもよかったと評価している。

課題としては、カタカナから漢字を作るのは面白いという子どもの反応が見られた一方、「何を基にして作ったのか分からないと意味不明だった」という感想もあった。確かに、「カタカナ言葉から漢字に変換し、中国の子どもたちがわかるような漢字を作ってみよう」という設定は、中国人と日本人の共通漢字を学習しないとわからない。大きな問題は、中国の子どもが日本の「新字体」に関してどこまで知っているのかがわからないことである。後述するが、逆に中国の子どもが作る時にも「簡体字」、「新字体」という意識が薄いという同じ問題が発生した。子どもの視点から見ると、わかりやすく絵を漢字にし、日中通用の漢字がわかると、新しい漢字をうまく作れる可能性が高い。このように、新しい漢字の作り方および子どもたちへ伝え方という二つの問題については、再検討が必要である。

以上の分析より、課題は残っているが、本時の目標である「漢字を調べたり、漢字を作ったりする体験を通して、漢字の魅力を感じることができ、創造力を発揮することができる」は十分達成されたと判断する。目標達成に加えて、課題を楽しく創造的に解決する学習の可能性を感じさせた授業となった。

#### 8.1.4 第四時間目指導案

(1) 本時の名前 「漢字について交流しよう」(遠隔交流授業)

(2) 指導過程

学習活動	主な発問と予想される児童の反応(・) (発問・指示=○)	ねらいに迫る手だて(・)と期待される児童の姿(○)
1 これまでの学習を振り返る、本時のめあてを知る (5分)	○今まで一、二、三時間目の内容を振り返って見ましょう ○中国の挨拶の言葉を勉強しよう ○これからインターネットを接続します	○交流の関心を持たせる ・本時の目標を押さえる ・教師はインターネットのスカイプに接続する ・接続確認した後、挨拶を行う
2 三時間目の時作成した漢字を発表する (35分)	○まず、発表順番を決めますので、相手の子どもとジャンケンしましょう  ○まずは中国/日本側から発表しましょう ○こちら側のクイズを出した後、向こう側の1~9班を選んで、相手の答えを聞こう、必要の時ヒントを出してください	・子どもを決め、前に連れ、カメラを向いてジャンケンを行う  ・発表の前、「その新しい漢字何ですか」について、相手国の児童たちに推測させて、最後は正解を発表させ、その新しい漢字の成り立ちや意味を解釈する ・発表の内容を通訳する(中国:陳、日本:中国人留学生) ・日本側と中国側は交替で

3 スカイプを切り、まとめる	<ul style="list-style-type: none"> <li>○そろそろ時間ですから、相手に挨拶して終わりにしよう。「ザイジェン（ありがとう）」</li> <li>○相手の作った漢字はどうですか、交流はどうですか</li> <li>・素晴らしい、楽しかった</li> </ul>	<p>発表する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○子どもたちは漢字について楽しく交流することができ、漢字の大切さ、素晴らしさを感じ取ることができる</li> </ul>
----------------	---	---

### (3) 授業の様子

第4回は、インターネット(Skype)を活用した中国の重慶市との交流授業である。重慶とは時差が1時間であり、重慶側には、日本での授業者でもあった陳がいる。陳が通訳をしながら、授業を進めた。授業を行う場所は学校の音楽室である。

まず、担任は、これまでの授業を振り返り確認した。「漢字はどこから来たの」の問いに、全員「中国から」と答えた。また、「日本と中国はお互いに影響し合っている」というこれまでの学習を強調した。復習後、担任は簡単な中国語の挨拶を子どもたちに教え、「漢字を通して中国の5年生と交流しよう」という紙を黒板に貼った。

テーマを確認した後、映像スクリーンを開き、お互いに挨拶を行った。重慶の子どもたちに、カメラに向かって、大きな声で「ダージャアハオ」（日本語で「こんにちは」）と元気に挨拶をした。そして、重慶の子どもたちからは、日本語で「こんにちは」と挨拶し、両国の子どもたちから熱烈な拍手があがった。

その後、交流の中心である「カタカナ言葉を表す新しい漢字」の発表を行った。発表の順番はカメラの前の「ジャンケン」で決めた。その結果、日本側から発表することになった。

まず、日本側の最初の班が発表を行う。発表した子どもは、自分の名前の漢字及びその漢字の意味を紹介した。そして、自分が作った漢字「カレンダー」（図26の左上）を挙げて、「これは何でしょうか。」と出題した。重慶側の子どもたちは、「数字」と答えた。不正解だったので、「どこの家にもあります。」とヒントを出した。すると、ヒントから気付いたらしく、重慶側の子どもたちは盛り上がっている様子が見えた。今度は、見事「カレンダー」と答えた。正解に日本の子どもたちはみんなで拍手した。問題を作った子は、「1 から9は日付です。これを組み合わせれば、31日までの日付になります。月と日は何月何日と表せませう。中国の皆さん分かりましたか？」と、前回の発表よりもわかりやすく説明していた。

次は、重慶側の発表である。重慶側の子どもは、自分が作った「バイク」（図

19の左上)という漢字を挙げて、「これは何でしょうか」と質問した。日本側の子どもたちは相談を始めた。2人の子どもが「レバー」、「車」と答えた。不正解だったので、重慶側は「これは交通関係があるもの」というヒント出した。しかし、正解がでなかった。重慶側が「バイク」という正解を発表すると、千葉側の子どもは、「あ!」と大きい声で反応し、拍手をした。その後、「バイク」の漢字について「①バイクはハンドルがあって、『手へん』を付けました。②バイクは二つの車輪があるから二つの口を書きました。③車体を表したいので、新字体の『車』で書きました。」という三つのポイントを説明した。日本の子どもたちは拍手した。

このようにして、クイズ形式の漢字の交流は楽しく和やかに進み、それぞれ5班が発表した。

別れの時、日本の子どもはウェブカメラに何度も手を振りながら、笑顔で「ざいじえん」（日本語で「さようなら」）と言っていた。

担任は今日の活動を振り返って、「日本と中国のお互いの交流は大切だ」と子どもたちへ伝えた。授業時間は予定より15分ほど延びたが、子どもたちはもっとやりたそうにしていた。



図 17 第四時間授業の風景

#### (4) 授業の考察

子どもたちは授業中の状態から見ると、集中力が高く、こちら側がクイズを出す間にも、積極的に小さい声でヒントを出し、映像スクリーンから目を離さ

ない状態であった。

第四時間目の授業は、日本側の参加人数は56名（3名欠席）であった。事後調査によると、まず「漢字を通して、中国の子どもたちと交流できましたか？」という設問に対して、「よくできた」との回答は92.9%（56名中52名）、他の4人は「まあまあできた」を選択した。全員が肯定的回答であった。また、「中国の漢字でも日本の漢字についてもっと勉強したいですか」という設問に対して、「はい、もっと勉強したいです」との回答は76.8%（56名中43名）、他の13名は「まあまあ勉強したいです」を選択した。理由の記述には、ほぼ全員が「いろいろ漢字を覚えたい」、「とても楽しくて面白い」と書いていた。また、「また時間があれば、このようなスカイプを使った授業をしたいですか」という設問に対して、「またやりたい」を選択した子どもは92.9%（56名中52名）、残りの4名は「やってもいい」を選択した。最後の自由記述には、「色々中国の漢字を知りたい。」「もっと中国のことを知りたい」「中国の漢字の勉強も楽しいので、もっとやりたい。」「中国人の子どもたちとクイズとかもっとやりたかった。」というコメントが多く見られた。

以上のことから、本時の目標である「日本と中国の子どもたちは漢字について楽しく交流することができ、漢字の大切さ、素晴らしさを感じ取ることができる。」は、概ね達成できたと考えられる。子どもたちが意欲的に楽しく交流に取り組んでいた姿が印象的であった。楽しいだけでなく、学びがある交流授業であった。

#### 8.1.5 第五時間目指導案

第五時間目は、日本側のみで設定する授業である

- (1) 主題名 つながりあう日本と中国
- (2) 資料名 鑑真和上（光文書院）と中国のニュース（2011youtube）
- (3) 主題について

##### ①ねらいとする価値

現在は、国際化の時代であり、この傾向は今後ますます拡充していくであろう。それは日本人が海外に進出するだけでなく、来日する外国人と「共に生きる」時代でもある。このような時代であるからこそ、日本の伝統文化を知って大切にしようとする気持ちを持つと同時に、現在の日本の文化が外国との交流によって構築されてきたことにも気づかせたい。文化は国同士の交流によって互いに影響を受け合い、発展する。「漢字」もその一つである。これまでの授業で漢字の成り立ちを知り、漢字を創造し、伝えあう楽しさを味わったからこそ、それらの体験

をもとに「交流する意味」を考えてほしい。交流とは、「物や人が異文化間の国々で行き来すること」(大辞林)である。ここではさらに「心の交流」も加え、高めあう関係を目指す心を育てたい。

## ②児童の実態

A小学校は約4分の1が外国にルーツを持つ子どもたち(9カ国)である。子どもたち同士は日常生活では、国の隔てなく活動し、学習している。まさに、国際化の最先端を行く学校環境である。

だからこそ、これまでの学習を通して「交流」し、高め合おうとする意識を持ってほしい。また、今回の主題を自分なりに受け取り、どうありたいかを考えほしいと願う。

## ③資料について

鑑真が正しい仏教を伝えるために、盲目になりながらも6回目の挑戦で日本にやってくる話である。なぜ危険を冒してまで日本にきたのか、その理由を考えさせることを通して「日本に対する思い」を考えさせる。続いて、中国に渡り、中国で活躍し、日本に戻れなかった阿倍仲麻呂と李白らとの「心の交流(友情)」をとりあげ、「物」ではないつながりの大切さにも気づかせたい。補助資料として、交流の核となった当時の遣唐使の状況がわかるようにYouTubeの映像を活用する。併せて、遣唐使として日中の文化交流の橋渡しをした吉備真備についても紹介する。物と人の交流により、中国と日本が発展してきた歴史をや人の思いを学ぶことにより、自ら世界の人々と交流し、高め合おうとする気持ちをもたせたい。

### (4) 本時の目的と指導

- ・鑑真や阿倍仲麻呂・吉備真備の生き方を知ることを通して、日中がお互いに交流し、発展してきたことに気づく。
- ・交流の意味を考え、自分も中国をはじめとする世界の国々の人とつながっていこうとする気持ちをもつ。

学習活動	主な発問と予想される児童の反応(・) (発問・指示=○)	ねらいに迫る手だて(・)と期待される児童の姿(○)
1これまでの学習の振り返る(5分)	○漢字を通じた中国の友達との交流はどうでしたか?(覚えている漢字は?) ・楽しかった・またやりたい ・作った漢字が伝わってうれしい ・中国の人たちと漢字で仲良くなれた	・パワーポイントで活動を簡単に振り返り、漢字は日中双方で影響し合っていることを確認する ・交流授業での中国側の様子を陳氏が伝え、交流の意義に関心を持たせる

<p>2学習課題 をつかむ (3分) ・ワークシートに記入する</p>	<p>○中国の子どもたちはどうだったのか陳さんに聞いてみましょう ・中国の子たちも喜んでくれてうれしい</p> <p>○今日は「交流」とは何か考えていきましょう ○今考える「交流」とは何かをワークシートに簡単に記入しましょう ○さて、中国から伝わったのは漢字だけかな 他にどんなものがあるかな ・仏教も。お墓参りのときに唱える ・たくさんある</p>	<p>・本時の課題を押さえる ・ワークシートを配布する ・これまでのかかわりの中で考えた「交流」の意味を言語化して簡単に整理させる ・「仏教」が伝わったことも押さえる</p>
<p>3資料「鑑真和上」を読んで話し合う (12分)</p>	<p>○今日は中国から日本に仏教を教えた鑑真というお坊さんのお話です。なぜ日本にきたのか考えながらお話を読みましょう ◎鑑真はなぜ、危険を冒してまで、日本に来たのでしょうか ・日本の僧と約束したから ・日本に正しい仏教を伝えることが役目だ ・日本に私を待っている人たちがいる。 ○鑑真が日本に伝えたのは仏教だけだったのだろうか。仏教以外のものは ・医者のような技術や薬 ・仏具・仏像・工芸品など</p>	<p>・写真を見せ、考える視点を持たせて、教師が範読する ・資料を配付する ・話の流れを写真やカードで確認し、歴史的背景を補足説明する ・「死の危険」「6回目」「目が見えなくなる」などのキーワードを押さえる ・日本文化の発展には遣唐使が重要な役割を果たしたと鑑真が日本で亡くなったことを押さえる</p>
<p>4「阿倍仲麻呂と吉備真備」の業績を知る (15分)</p>	<p>○遣唐使が中国と日本の交流には重要な役割を果たしました。しかし、当時はとても大変な航海でした。遣唐使を扱った中国の番組があるので見てください ・遣唐使は大切な役割をした ・阿倍仲麻呂はすごいな 「科挙」に合格して大臣になるなんて ・吉備真備も遣唐使として日本のためにがんばったんだな ・カタカナを作ったなんてびっくりした</p> <p>◎鑑真と阿倍仲麻呂や吉備真備の話を学んでどんなことを考えましたか ・外国で活躍したのがすごいな ・その国の発展に役立っている ・日本と中国は相互に交流して高め合っているんだな</p>	<p>・遣唐使や当時の渡航の困難さを伝える中国の映像を見る。(youtube ・阿倍仲麻呂の業績を写真やカードで紹介する。中国に渡り、唐の役人となって活躍し、そのまま中国で生涯を終えた人であり。「百人一首」の歌人でもあることも紹介する ・中国人から見た仲麻呂について押さえる。特に李白との友情について紹介する ・吉備真備の業績も紹介する。書籍を伝えたほか漢字の一部を使ったカタカナを考えた人であることを紹介する ◎それぞれの発展に寄与して人物であることを押さえない</p>

<p>5 「交流」とはなににかについて考え話し合う。(5分)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシートに記入する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「交流」とは何か、どんな意味があるのだろう。(はじめと変わった点は)</li> <li>・人や物が行き来するもの</li> <li>・文化や技術を伝えるもの</li> <li>・お互いに高めあうもの</li> <li>・自分や相手もためになるもの</li> <li>・物だけでなく、友情など心が伝わるもの</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○鑑真や阿倍仲麻呂などのほか、自分たちもその役割があることにも気づかせたい</li> <li>・物だけではない交流を知り、自分も世界の人たちと関わっていこうとする気持ちをもたせたい</li> </ul>
<p>6 今日学習を振り返って考える。(3分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○今日の学習を振り返って考えたことをワークシートに書きましょう</li> <li>・阿倍仲麻呂や吉備真備のように世界で活躍した日本人もいたんだな</li> <li>・今後も日中で心の交流をしていきたい。</li> <li>・私たちも今、交流しているだ</li> <li>・世界の人たちともっと交流して自分たちを高めていきたい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○中国をはじめとした世界の国との交流の中で日本が今あることを押さえない</li> <li>・さらに「交流」は自分たちの身近にもあること。物ではなく人や心、未来につながる交流であることに気づかせたい</li> </ul>
<p>7 中国人留学生陳さんの話を聞く(2分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○今、日本と中国の間で「交流」をしている陳さんの話を聞きましょう</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○どうしてこの漢字を通じた国際交流学習をしたかったのかも含めて話してもらおう</li> <li>・今後の交流への意識を高める</li> </ul>

(5) 授業の様子

まず、前回の重慶の子どもたちとの交流授業を振り返る。「漢字を通じた中国の友達との交流はどうでしたか？」という質問に子どもたちは口々に「楽しかった」「またやりたい」とつぶやいていた。そして、「覚えている漢字はあるかな？」と聞くと、驚いたことにほとんどのカタカナ言葉を想起することができた。

「中国の子どもたちはどうだったのか陳さんに聞いてみましょう。」という子どもたちは筆者に注目。重慶側の授業者である陳が「中国の子たちはとても喜んでいて」と言うのを聞いてにっこりする子が多かった。

ここで、今日の学習課題を提示。「今日は『交流』とは何か考えていきましょう。」と言って、今考える「交流」についてをワークシートに書かせた。子どもたちの書いた回答には、「話す」「かかわる」「ふれあう」といった内容が多かった。

そこで、「さて、中国から伝わったのは漢字だけかな？他にどんなものがあるかな？」と問いかけると、「他にもたくさんある。」という返答があった。

中国から日本に仏教を伝えた鑑真というお坊さんの話であると説明した上で、

資料を配付した。その後、「なぜ日本にきたのか考えながらお話を読みましょう。」と読むときの視点を持たせた。範読し、場面に合わせて、絵やキーワードを黒板に貼るなどの補助を与えた。

次に鑑真はなぜ、危険を冒してまで、日本に来たのでしょうか。」と発問すると、「日本の僧と約束したから。」「日本に正しい仏教を伝えたかったから」等の意見が出た。鑑真が苦難を乗り越えて日本に仏教を伝えたことやそれが現在に繋がっていることを確認した。

そして、さらに鑑真が日本に伝えた仏教以外のものについて、医者のような技術や薬のほか、仏具・仏像・工芸品なども伝えていたことを資料から確認した。

次に、授業者が遣唐使を扱った中国の番組を基に、困難な航海の様子、阿倍仲麻呂、吉備真備らの功績を説明した。その映像を子どもたちは真剣に見ていた。阿倍仲麻呂と李白との友情の話に興味を持ち、中国でこの二人の評価が高いことに子どもたちは驚いていた。「遣唐使は命がけ」「大切な役割をした」「吉備真備がカタカナを作ったなんてびっくり」等の感想があった。日本と中国は相互に交流して高め合っていることに気付いた子どももいた。

最後にもう一度『交流』とは何か、どんな意味があるか」を考えさせた。特に、初めと変わった点があるかどうかワークシートに書かせた。「文化などを教えあうこと」「お互いのことを思い、何かを残したり伝え合ったりして文化を広めること」等の意見が出た。

全体のプログラムのまとめとして、授業者の陳が「日中交流プログラムへの思い」を話した。子どもたちが仲良くなり、そしてそれが将来の交流発展に繋がってほしいと話すと、子どもたちは真剣に聞いていた。

#### (6) 授業の考察

この授業は、交流プログラムのまとめとしての役割をもつ。「国際親善」の意識を持たせるために、6年生の道徳資料「鑑真和上」(光文書院)を活用した。「困難を乗り越える」だけでなく、「文化交流にも大いに貢献」したことに気付かせる授業を目指したが、内容が全体的にやや難しかったと振り返る。阿倍仲麻呂や吉備真備など遣唐使として中国でも知られる人物を取り上げ、映像資料や写真などの活用により、理解と助けはしたのだが、初めて知ることが多く、子どもたちはやや「難しい」と感じたと推測する。

次に「交流」に対する意識の変化についてワークシートの記述を分析した(図18)。授業の冒頭での「交流とはどんなことか」という問いに対して、「話す・会話」というイメージを持っている児童が半数以上と最も多く、続いて「ふれあう

こと」「かかわり」等であった。(問1) 授業後半のワークシート(問2)の記述には、「文化を広めよう」「教えよう」「伝えよう」等が多くなった。ここで注目したいのが、「～し合う」という双方向の記述が多かったことである。交流は一方的ではなく、双方が高めあうこと、よい影響を与えあうことと捉えた児童が増えたことがわかる。冒頭の記述では「文化」「教えよう」等の記述は0であったことから授業を通して交流の意識が変わったことがわかる。

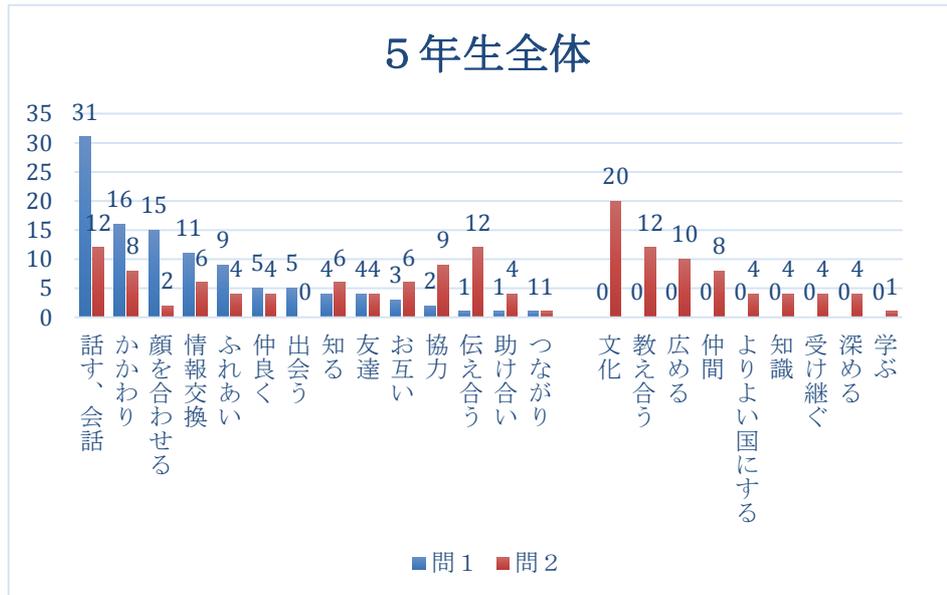


図18 「交流するって何だろう」に対する答え

## 8.2 中国側の実施状況

中国側の基本状況は以下の通りである。

- ①実施時期 平成26年6月
- ②実施校 中国重慶市謝家湾(金茂)小学校
- ③教科 国語、数学、英語の授業から譲る
- ④学年 小学校5年生 1クラス(計47名)

中国側の授業の内容は日本側とほぼ同じだが、日本側の「名前の漢字の意味は？」と第五時間目の「つながりあう日本と中国」という内容は中国側では実施していない。その理由について、実施時期が6月であり、期末試験のために時間が制限されたことがある。また、そのほかの授業の内容は日本側と同じであるため、各時間の指導案を省略する。

## 8.2.1 第一時間目

(1) 本時の名前 「中国の漢字、日本の漢字」(分別授業)

(2) 授業の様子

第一時間目の授業の内容は日本側とほぼ同じである。授業の様子は、主に中国側の子どもの反応や発言を記録する。授業者と子どもの発言はすべて日本語を訳して記す。特別に注目して考察する子どもはD、E、Fである。Tは授業者の発言、Cは子どもの発言を表す。

まず、漢字知識を導入するとき、中国側の子どもたちは「漢字は同じだが、ひらがな、カタカナがあることが中国語と違う」ということに気がついた。

T では、二つの国の言葉で、同じ文字は漢字ですが、違う文字はなんですか？

C 中国語は漢字だけです。(一部の子どもは、「日本語はほかの文字がある」ということを言った)

次に、授業者は漢字について「約 6000 年前～4000 年前」、「中国の漢民族」、「文字」、「表記」、「表意」、「日本語や中国など」という六つのキーワードをパワーポイントで示し、各キーワードを説明した。日本の子どもたちと違う反応が起こった。一つ目は、授業者が「中国の漢民族」について説明した時で、「漢字は誰が発明したのか」という質問に対し、多くの子どもたちがすぐ「蒼頡」と答えたことである。二つ目は、「漢字は文字の一つの種類です、ほかにはどんな文字がありますか」と質問したときで、子どもDが「湖南省の女書<sup>187</sup>(ニューシュ)、女の子同士でお互い交流する文字、ほかの人がわからない文字だ」と言ったことである。この二つの事情から考えると、中国の子どもたちは日本の子どもに比べて、漢字に関して把握している知識が多いことがわかる。また、多くの子どもたちは「表意文字」という意味は授業者が説明しなくても理解できる。しかし、「蒼頡は漢字の発明者」という観点は、それだけでは不十分である。本論文4節で述べた通り、漢字は単一の人物によって創造されたものではなく、考古学の視点から考える必要がある。ここで、授業者は、蒼頡が伝説中の人物であることを説明した。また、ここから見ると、子どもたちには、漢字や文化に関する知識について、より客観的、総合的な観点からの指導が必要と考えられる。

そして、漢字の起源と発展の説明に入った。授業者は「漢字の起源についてどのくらい知っていますか」と子どもたちに質問した。子どもたち全体は最初沈黙

---

<sup>187</sup>中国南部の湖南省江永県などの地域において、専らヤオ(瑶)族の女性により用いられた文字であり、絶滅の危機に瀕している。以下のアドレスを参考にした、  
<http://www.weblio.jp/content/%E5%A5%B3%E6%9B%B8> (2016年9月30日最終確認)

し、「たとえば漢字がなかったとき、どう記録しますか」と言うと、子どもたち全員「結縄」と言った。この部分は子どもたちもよくわかるので、簡単に紹介した後、次の内容に入った。漢字の形の変化を紹介し、「馬」と「魚」という二つの漢字の変化を示した。また授業者は「簡体字は中国の内陸部のみで使用し、台湾、香港は繁体字を使い、日本は新字体を使っています」と伝えた。

その後、漢字の影響力を説明するために、漢字を使う国について、子どもたちに「漢字を使ったことのある国、あるいは今でも使用している国はいくつありますか」という選択肢のあるクイズを出した。その結果、日本と異なり、多くの子どもたちは「四つ以上」と正解を答えた。そこで、四つ以上の国があることを紹介するため、アジア地図を示し、子どもたちとともに一つ一つ確認した。そして、「日本と中国のみ、昔も今も漢字を使っている」ということも話した。

続いて、日本における漢字について「5、6世紀に漢字が伝来」、「ひらがな、カタカナ」、「国字」、「新しい言葉の創造」という四つのキーワードに基づいて簡単に紹介した。「新しい言葉の創造」については、日本人が作った漢字語である「警察」を例に取り上げた。「日本で使用しているだけでなく、中国の大陸部、香港、台湾などの地域でも、幅広く使用している」ということを子どもたちに伝えた。

さらに、中国と日本の漢字の共通点と相違点を説明するため、まず「中国、日本、韓国では808個の漢字が共通している」という情報を子どもたちに示した。また、「意味が同じ漢字」、「意味が少し違う漢字」、「意味が全く違う漢字」という部分に入り、日本語と中国語の漢字を比較した。具体的には、授業者はA、B、Cという三つの列を設定し、各列の中に漢字を入れた。「日本語と中国語で意味が同じ列はどれですか？」と質問した。(図13)

その結果、ほぼ全員が正解の「A」を選んだ。そこで、授業者はB列とC列について詳しく説明した。たとえば、B列は日本語の意味と全く異なるので、各言葉の日本語での意味を一つ一つ説明した。具体的には、「手紙」は日本語の意味で「レター」であり、「娘」は日本語の意味で「女の子ども」であった。意味の違いに、子どもたちは驚き、「え？ そんな」と反応し、ショックを受ける様子が見られた。

知識点として漢字の六つのキーワード、蒼頡の画像、日本人の作った言葉「警察」などのポイントを黒板に貼り、授業を振り返った。また、「古代は中国から日本に漢字が輸出され、近代あるいは現代では逆に中国が日本から様々な新しい漢字の言葉を輸入することになった」と伝えた。最後、中国と日本はお互いに良

い影響を与え合うということを説明し、授業が終わった。

### (3) 授業の考察

まず、特別な対象となる D、E、Fの様子から考察する。Dは授業中、ずっと自信をもち、真面目に聞き、質問するときもよく手を挙げ、答えたいという気持ちが見られた。そして、今回の授業の内容はDにとって簡単で、たとえば、「漢字の発明者」、「現在漢字を使用する国の数」など、Dの答えはほぼ正しかった。Dの感想には、「日本の漢字や漢字知識をもっと勉強したい」という日本への学習意欲が見られた。Eは授業中ずっと微笑んでいて、自分が答えるより周りの子どもたちの話を聞いている様子であった。授業者は日本の漢字に関するキーワードを説明したとき、Eにはメモする様子が見られた。Fは窓に近い席で、授業中、たまに授業以外のことをしたり、もしくは外を見たりする様子が見られた。その上、手をほとんど挙げず、隣の子どもたちとも話さない。しかし、手を挙げなくても、質問に対して考えてはおり、答えも出す。たとえば、授業者の「漢字って何ですか」という質問に対して、Fは「漢字は交流の手段」と言った。

次に、授業アンケートから授業全体を通して、授業の目標である「漢字についての学習を通して、漢字の面白さを感じ取ること」と「日本と中国の漢字を理解すること」が達成されたのかを検討したい。まず、「今日の授業は楽しかったですか」という質問について、89.4%（47名中42名）の子どもは「とても楽しかった」という選択肢を選んだ。また、自由記述には、32人が「日本と中国の漢字の知識を知った」と書いていた。次に、『日本と中国の漢字がお互いに影響し合っている』ことがよくわかりましたか」という質問については、87.3%（47名中41名）が「よくわかりました」と答えた。そして、「日中の漢字についてもっと興味をもち、学習したくなりましたか」という質問については、97.9%（47名中46名）の子どもが「もっと学習したいです」を選んだ。理由についての記述を見ると、「日中漢字の違いが面白い」と回答した子どもは17名、「知識を増やしたい」と回答した子どもは15名、「学習すれば日本の子どもと交流できる」と回答した子どもは10名であった。

最後に、子どもたちの自由記述から考察する。「授業が面白い、楽しかった」と書いた子どもは7名、「日中漢字について学習した」と書いた子どもは14名、「日本語も学習した」と書いた子どもは6名であった。「日中文化は他に何か違う所がありますか」という質問をした子どもが1名いた。また、2名の子どものコメントは第一時間目の課題について問題点があることを認識させる記述を含むものであった。1名は、「日本の漢字の発音が分からない」と書いていた。今

回は漢字の字形のみを紹介したので、今回は発音までは紹介していない。日本における漢字の発音も紹介する場合、どのようにすればよいか、今後工夫が必要となるだろう。もう1名は、「日本の漢字の形の変化がまだわからない」と書いていた。授業者は今回のように日本の漢字を紹介する前に、日本における漢字の形や発音について細かい内容を学習しておく必要がある。そうすることにより、子どもたちに理解されやすい方法を考えることができ、ひいては授業プランを改善することにも繋がると思われる。そのほか、中国の子どもは漢字についての知識の把握状況が日本と違っているので、授業の内容を国ごとに調整する必要があると考えられる。

### 8.2.2 第二時間目

(1) 本時の名前 「新しい漢字をつくろう」(分別授業)

(2) 授業の様子

第二時間目の授業の最初に、授業者は第一時間目の内容を簡単に振り返り、その中で日本と中国がどちらも漢字を使っていることを強調し、授業を始める。

以下は、授業の様子である。Tは授業者の発言、Cは子どもの発言、○は子どもや授業者の行動を表している。

T 中国語の言葉は漢字だけでできていますね。

C そうです。

T はい。実は、日本の人は中国に行くと、中国語が分からなくても、漢字の意味が大体分かります。しかし、全然分からない漢字もあります。それは、中国語の中の表音文字です。

C 漢字は表音文字？

T そうですね、第一時間目で「漢字は表意文字」と言いましたね。しかし、現在の中国語には、西洋文明を受けた新しい名詞が生まれています。中国語に翻訳する時、直接英文とほぼ同じ発音の漢字にしたのです。だから、その時の漢字は、表意文字ではなく、表音になりました。

○ 授業者は、黒板で「問題：日本の人は中国の表音文字が分からない」と書いた。

T 日本の人は、表音文字が分からない場合、どうすればいいのでしょうか？

○ 子どもたちほぼ全員が黙っている。その時、1人の子どもは「漢字にする」と答えた。

T そうですね。「漢字にする」ですね。だから、今日は皆さんにお願いしたいことがあります。

○ 授業者は、黒板で「使命:新しい漢字を作ろう」と書いた。

T 難しいですか？

C 分からないです。難しくありません。

T え？ すごい。難しくないと考えていますね。では、今日は、日本の子どもたちで字を作りました。

その後、日本側と同じように、授業者は「アイスクリーム」という漢字について説明した。また、全部の説明が終わった後、各班の代表者が授業者から一つの言葉が書かれたカードを受け取り、漢字を作り始めた。

ここまでは中国側の子どもたちは、日本の子どもたちに比べて反応が弱かった。たとえば、授業者が「私が作った漢字はどうですか」と聞いても、半数の子どもたちは黙っており、ほかの子どもたちは「まあまあ」と答えた。授業者は、「そうですが、では、みんなの大作を期待します」と言ったが、子どもたちはまだ無反応である。そのとき、授業者は「皆さんで、良い漢字を三つ選んでください。選ばれた三つの作品を作った人には、私からプレゼントを差し上げます」と言った途端、子どもたちは「すごい」と反応し、興奮気味であった。表情も一変した。

ここから、班で漢字を作る活動が始まった。第5班の様子を考察する。5班では以下の場面が確認された。5班が選んだ言葉は「ソファー」であった。この班は、それぞれ作った後に相談するのではなく、最初からメンバー全員が相談しながら作成していた。その班にはEがいる。Eの隣の女子児童は班の皆の意見を聞きながら、1人で作成した。その後、その漢字を他のメンバーの中で回して、「これどうですか」と聞いた。メンバーには全員考える様子が見られた。「それは見るとわかりますが、書くには複雑です」ということをEが言った。ほかのメンバーはほぼEの意見に賛成し、女子児童は笑顔で書いた紙を回収して漢字を直した。直している間、メンバー全員が注目し、全体的に協力的な雰囲気生まれているようだった。また、5班はほかの班より早めに完成し、1人のメンバーが周りを見回すと、後ろの6班の1人に気づかれ、「ちょっと見ないで」と大声で責められた。

全体的に各班の漢字の作成状況を見ると、各班ともに大声を出し、騒々しい雰囲気で行っていた。特に隣の班との対話や喧嘩がよく聞こえた。授業者が大声で注意しても、クラス全体を静かにさせることは困難である。ほかの協力者

と一緒に「静かにしてください」と叫ぶと、子どもたちの声はだんだん小さくなった。その後、授業者が、各班の代表者を確認した後、1班から9班まで順番に発表を行った。5班の発表者 E の隣の女子児童は、紙を持ち、クラスメートの前に立ち、「ソファー」（図 19）という漢字の紙をスクリーンに映しながら「この字は何でしょうか」と聞いた。作った漢字は分かりやすく、1人の子どもが「ソファー」と答えた。その時、女子児童に少しがっかりした表情が見られた。それで、授業者は「それはいいことですよ、すぐ分かると、日本の子どもも分かりやすいかもしれません」と言った。その後、女の子は「ソファー」の漢字について「二つの人は、2人を表しています。軟という字はソファーが柔らかいことを表しています。下の形はソファーの形です」と説明した。授業者は「皆分かりましたか」と聞いて、クラス全員が「分かりました」と言い、拍手した。

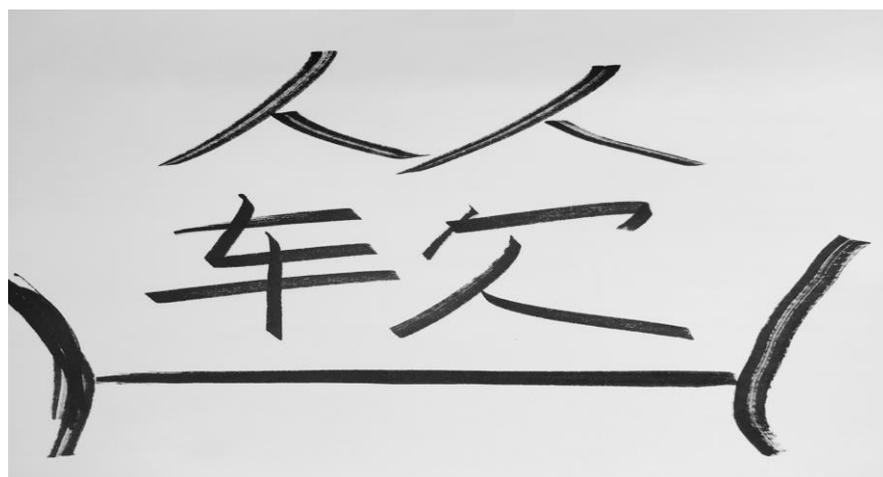


図 19 5班が作った漢字「ソファー」

以下の図 20 は、ほかの班が作った漢字である。左上から右下の順に、「バイク、ビール、マイク、チョコレート」である。



図 20 中国側の子どもたちが作った漢字（一部）

各班が発表した後、子どもたちは自分が好きな漢字に投票した。票数が一番多かった三つの班（バイク、ビール、チョコレート）にはプレゼント（日本のハガキ）が渡された。特に、中でも「バイク」の班は、日本側の子どもたちには「車」の簡体字がわからないので、新字体の「車」にし、日本の子どもたちのことを考えながら作成したため、票数が一番多かったものである。「チョコレート」の班も、「甘」という漢字は日本語でも中国語でも「甘い」という意味があるから、この字を使用した。従って、票数が多かった。この後、子どもたちは授業後のアンケートに記入し、授業が終了した。

### (3) 授業の考察

授業全体を通し、授業の目標である「漢字を創造する体験を通して、漢字の魅力を感じることができ、創造力も発揮することができる」という点が達成されたのかどうかを検討したい。まず、授業アンケートから見ると、「班で新しい漢字を作ることができましたか？」という質問に対して、66.0%（47名中31名）の子どもが「できました」と回答し、29.8%（47名中14名）の子どもが「まあまあできました」と回答した。また、「自分の班が作った漢字をどう思いますか」という質問については、ほぼ全員が「良い漢字です」、「分かりやすい」と書いていた。「他の班の作った漢字についてどう思いますか」という質問について、「良くできていました」と回答した子どもは25名、「ある班の漢字が好きです」が6

名、「良い漢字もあるし、良くない漢字もある」が6名、「あまり良くない」が6名であった。子どもたちの多くは、自分で作った漢字について自信を持っていたといえるだろう。また、「新しい漢字をまた作ってみたいですか」という質問について、83.0%（47名中39名）の子どもが「はい、また作りたいです」と回答した。

しかし、「今日の授業は楽しかったですか」という質問について、51.1%（47名中24名）の子どもが「とても楽しかった」を選択していたが、「あまり楽しくなかった」と「楽しくなかった」を選択した子どもも19.1%（47名中9名）いた。その理由を見ると、「自分の班の票数が少ない、プレゼントをもらってない」と多くの子どもたちが書いていた。自由記述でも、「なぜ試合をするのですか」と書いた子どもも1名いた。授業者は各班を励ますために、プレゼントを用意した。しかし、今回の授業では、一部の子どもにのみプレゼントを配布することとなり、彼らの残念な気持ちにつながってしまった。子どもたちは、ほぼ全員が努力して漢字を作成していたため、子どもたちの「まじめにやったのにプレゼントをもらえなかった」という気持ちは理解できる。今後、授業者は平等性を考えながら、授業の実施方法を工夫する必要があると考えられる。

また、作成した漢字を見ると、相手（日本側の子どもたち）を考えながら作成されたものは、日本側と比べて少ない。半数以上の班は「新字体」、「簡体字」の違いを意識せず、簡体字のまま漢字を作成した。この点について、授業者は漢字を作る前には、簡体字と新字体の区別を教える必要があったと反省した。

### 8.2.3 第三時間目

(1) 本時の名前 「漢字について交流しよう」（遠隔交流授業）

(2) 授業の様子

第三時間目の授業は、多機能教室で実施した。授業者は日本側の授業者とのインターネット接続を確認した後、授業を始めた。

まず、授業者は、第一、二時間目の授業に関する知識と活動を振り返った。漢字の知識を復習した後、授業者は簡単な日本語の挨拶を子どもたちに教え、「漢字を通して日本の5年生と交流しよう」という紙を黒板に貼った。

これを受けて、子どもたちは、日本の子どもたちに挨拶した。中国の子どもたちにはカメラの向こうから、大きな声で「こんにちは」と元気な声が聞こえてきた。そして、日本の子どもたちにも中国から「ニーハオ」という声を送った。その時、すべての子どもたちから熱烈な拍手があがった。

その後、新しい漢字の発表が行われた。たとえば、中国側の発表では、自分たちが作った「ビール」(図 20 の右上) という漢字を挙げて、「この字は何でしょうか」と日本側の子どもたちに質問した。日本側の子どもたちの中で相談が始まった。日本側の子どもたちは班に分かれるのではなく、手を挙げた人を担任の先生が指名するというやり方をとった。その後、担任の先生は 2 名を指名し、子どもたちはカメラの前に来て、「お酒」と答えた。答えは間違っていたので、中国側は「お酒の一つの種類です」というヒントを出した。すると、日本側の子どもたちは、すぐわかり、1 人が「ビール」という正解を言った。中国側の子どもは、ほぼ全員が「すごい」と大きい声で反応し、拍手した。その後、「ビール」を意味する創作漢字について説明した。「①『口』という形は、ビール用のカップを示します。②中にある『人』と『酔(日本語の酔)』という字は『人はビールを飲むと酔っ払いになる』ということを表します。③上の気(日本語の気)の意味は、お酒の種類はいっぱいありますが、ビールだけ泡がありますから『気』をつけました」と三つのポイントを説明した。日本の子どもたちは手で丸という形をして、「わかりました」「しぇしぇ」(中国の「ありがとうございました」の意味)と返事した。そのほかの発表の内容は日本側の様子と同じであり、ここでは省略する。



図 21 第三時間目授業の様子

このような順序で日本側と中国側、それぞれ 5 班分の発表があった。時間がオーバーしていたので、日本側の担任の先生は、ここで授業を終えることを皆に伝

えた。別れの際、日本の子どもはカメラのレンズに向かって何度も手を振りながら、笑顔で「ざいじえん」(中国の「さようなら」の意味)と言った。最後に Skype を切って、授業を終えた。

授業者は中国の子どもたちに、今日の活動を振り返って、「日本の子どもたちの作った漢字はどうでしたか」と聞いた。子どもたちは「すばらしい」や「面白い」などといった感想を述べた。授業者は、「日本と中国のお互いの交流は大切です」と子どもたちに伝えた。授業時間は予定より 15 分ほど延長された。

## (2) 授業の考察

まず、特別な対象である D、E、F の様子から考察する。その 3 名は、第三時間目の姿が第一、二時間目の時とまったく違っていた。D は第一、二時間目の時、周りの子どもたちと活発に交流する様子が見えた。しかし、第三時間目は、日本側の子どもとの交流に集中し、周りの子どもと交流しない姿に変わった。その上、日本の子どもの状況を真面目に観察し、周りの子どもたちによく「喋らないでください」と言い、授業を静かに聞くようになった。逆に、E と F からはとても積極的な姿勢が窺えた。特に F は、第一、二時間目には、ほとんど手をあげず、隣の子どもたちと話さなかったが、第三時間目は、日本側が作った漢字の意味を考え、自分の班の子どもたちと相談し、また手を挙げ、積極的に答えたいという意欲が感じられた。

次に、授業の目標である「漢字について楽しく交流することができ、漢字の大切さを感じられる。お互いに理解できる」という点が達成されたのかどうかを検討したい。まず、「漢字を通して、日本の子どもたちと交流できましたか」という質問に対して、97.2% (47 名中 46 名) の子どもが「良く交流した」と回答した。そして、「日本の子どもたちが作った漢字はどうでしたか」という質問については、85.1% (47 名中 40 名) が「とても良かった」と回答した。理由の記述を見ると、「とても分かりやすい」や「発想がいい」という内容が多かった。また、「中国の漢字や日本の漢字についてもっと学習したいですか」という質問に対して、97.9% (47 名中 46 名) が「はい、もっと学習したい」を選択した。さらに、「日本についてもっと知りたいですか」という質問に対しては、97.9% の子どもが「もっと知りたい」と答えた。最後の「また時間があれば、このようなスカイプを使って、授業をしたいですか」という質問については、「またやりたい」と回答した子どもは 97.9% に上った。この結果から見ると、授業の目標は達成することができたといえるだろう。

## 9 授業全体の考察

### 9.1 授業の前後での相手に関する意識

#### (1) 授業前

授業前、筆者は日本側と中国側の授業前における相手国の印象について調査した。日本側は全部で 59 人、中国側は全部で 47 人であり、複数回答が可能である。日本側と中国側の結果を、それぞれ以下の図 22 と図 23 に示す。

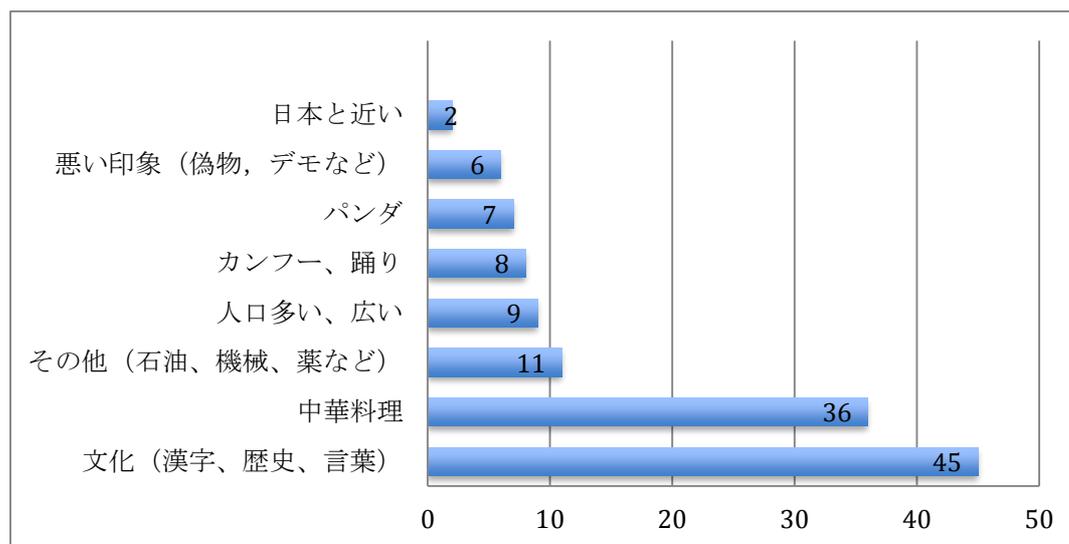


図 22 「中国 (中国人) に対する印象 (単位:人)」 (日本側)

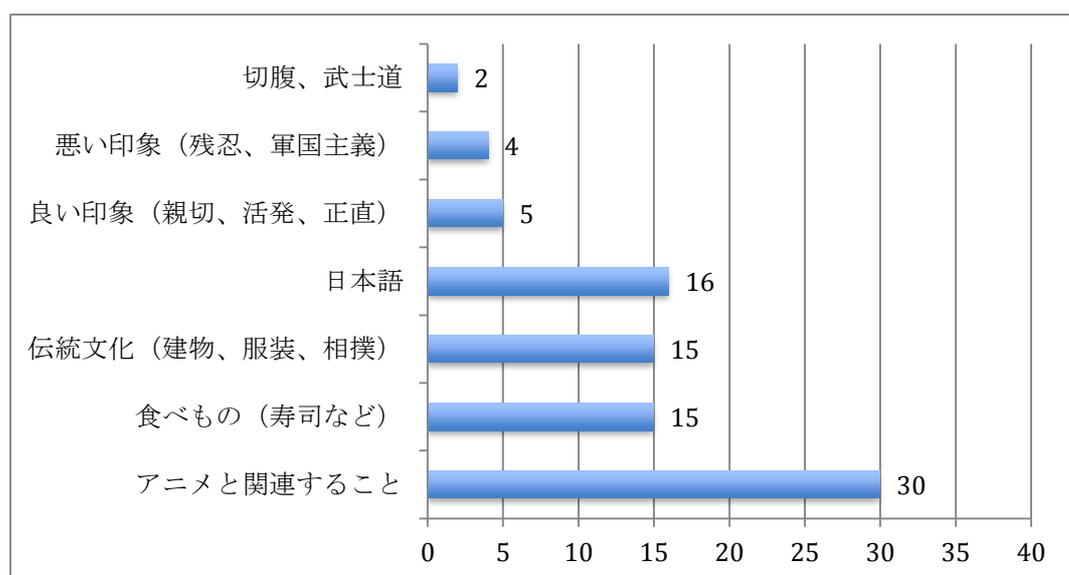


図 23 「日本 (日本人) に対する印象 (単位:人)」 (中国側)

以上の結果から、筆者は日本と中国の子どもたちの意識について、3 点にまと

めた。

- ① 中国側の子どもたちより、日本の子どもたちの方が相手の知識は多様である。中国の子どもたちの日本についての知識は、たとえば主にアニメ、伝統文化、食べものであるが、日本側の子どもたちは中国の文化や食べもの以外、地理（人口が多い、広い）、動物（パンダ）、資源（石油）など、多方面のキーワードに及んだ。そして、「相手のことはどこで知っているか」という質問について、中国側でも日本側でも、80%以上の子どもたちは『テレビ』から知った」と答えた。
- ② 日本のアニメは中国の子どもたちに多大な影響を与えている。中国側の結果から見ると、63.8%の子どもが（47名中30名）は日本のアニメに言及している。その中で、日本のアニメの名前（「名探偵コナン」、「ワンピース」）、有名なキャラクター（「ドラえもん」など）、子どもたちが知っている日本のアニメ作品は多数存在する。一部の子どもと話をしたが、子どもたちは日本のアニメによって、日本の神社、寿司、和服、生活の習慣などを知ったようだ。また、日本について良い印象を持っている5名の子どもは、「日本のアニメを見たため、日本人に良い印象を残った」と言った。  
日本のアニメは、日本の文化輸出を体現している。
- ③ 日本側の子どもは、中国側より相手への良い印象が極端に少ない。日本側の結果を見ると、中国への印象はマイナス印象の他、全て客観的な叙述である。中国側の子どもたちは、日本のアニメから良い印象を受けることができるが、逆に日本側の子どもの良い印象は、「中華料理が美味しい」と「パンダが可愛い」という回答のみだった。特に中国人に対する印象は、多くの子どもたちは「印象なし」や「あまり良くない印象」ということを言った。
- ④ 相手に対する悪い印象の割合はほぼ同じである。日本側の10.1%（59名中6名）、中国側の8.5%（47名中4名）の子どもたちは相手について悪い印象を持っていた。中国側の子どもの持つ悪い印象は、たとえば、残忍、南京大虐殺、軍国主義であり、ほぼ歴史的要因により残ったものである。その悪い印象の情報源は、日本でも中国でもやはり「テレビのニュース」だった。しかし、異なるのは中国側の子どもはニュースだけでなく、歴史のドキュメンタリーやドラマ作品からも知っていた。ここから見ると、相手国に対する印象は、教育（先生や教材）に影響を受けることはほとんどないと考えられる。

(2) 授業後

授業後は、日本と中国両方、「相手の国や人の印象について何か変わったことがあるのか」ということを調査した。日本側は全部で 57 人、中国側は全部で 47 人である。その結果を、以下の図 24、図 25、図 26 に示す。

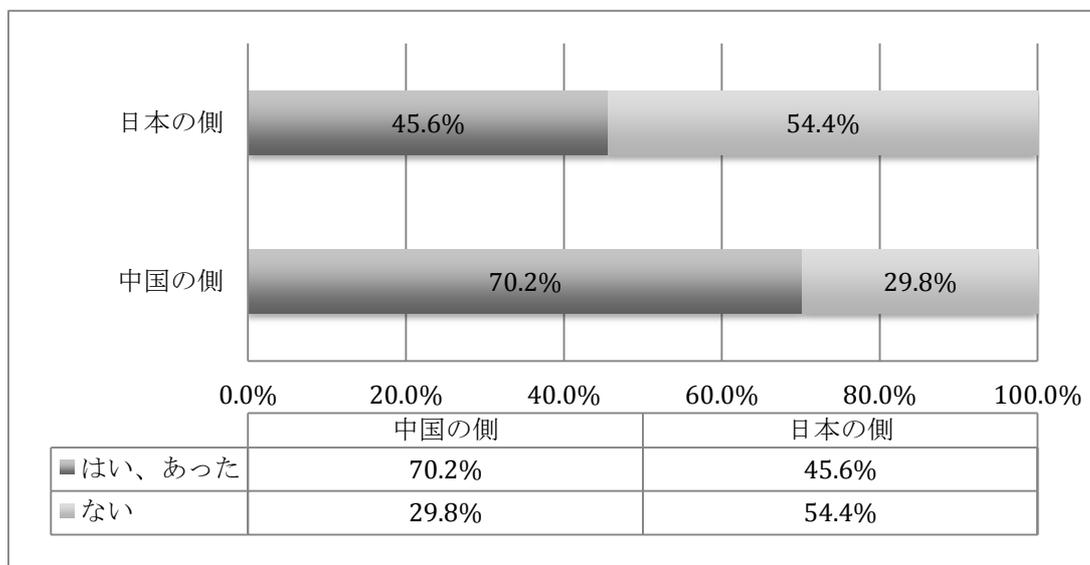


図 24 「相手の国の印象について、なにかかわったことがあったのか(単位:人)」

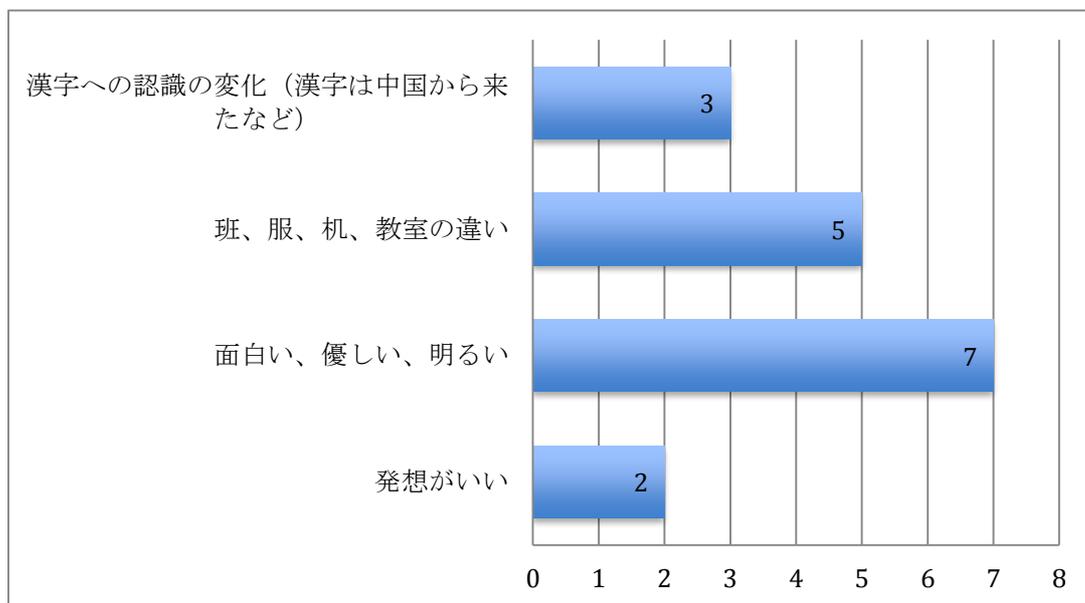


図 25 「どこが変わりましたか (単位:人)」 (日本側)

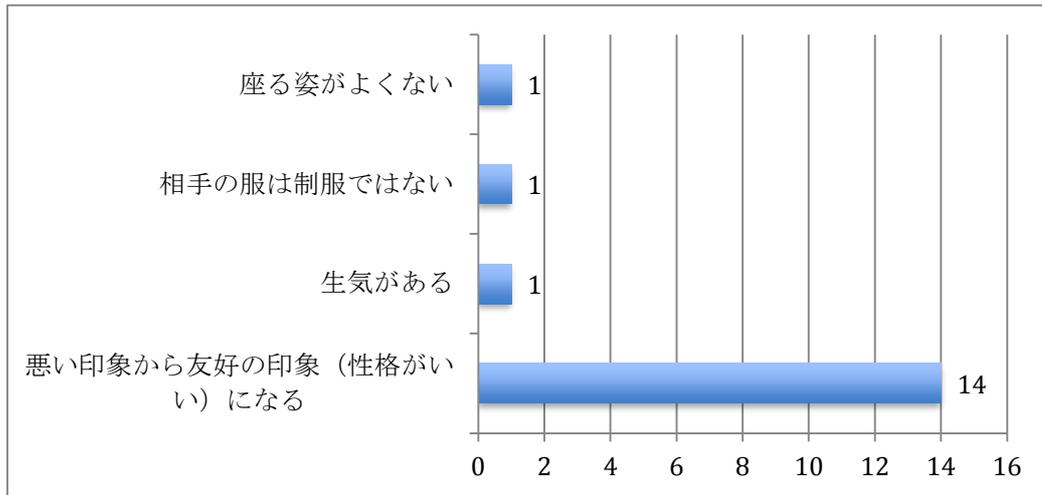


図 26 「どこが変わりましたか (単位:人)」 (中国側)

以下の例は、子どもたちの変わったことについての感想である。

日本側：○そんなに良い国じゃないのかなと思いましたが、良い人たちです。

○中国の人がすごく面白い人という印象が変わりました。

中国側：○最初は、日本人について悪い印象を持っていたが、交流した後、日本人は優しい、明るい、友好的であるといった印象を残した。

○最初は堅苦しいと思ったが、ぜんぜん堅苦しくなかったです。

以上の調査からわかることを、筆者は以下の3点にまとめた。

- ①「相手への印象が変わった」という子どもは、日本側より、中国側の子どもの方が多い。そして、変わったことについて、中国側はほぼ非友好的から友好的なイメージが変わった。その逆に、日本側の子どもたちは、「相手への印象」が変わった子どもの人数が少ない。その感想の記述から見ると、多くの子どもたちは「中国は思い通りです」、「想像と同じように明るい性格です」と書いていた。
- ②中国でも日本でも、相手に対する印象が変わったことの中で、「相手の人の性格や人への認識」についての変化が一番多い。「漢字」の交流による「人」への認識の変化は、今回の授業プログラムが求める一つの重要な効果である。子どもたちが自分自身で感じた相手の国の人の性格や印象は、テレビなどによる間接的接触ではなく、直接交流することで得られたものなので、遥かに価値がある。自分の目で見たり、自分の耳で聞いたりすることは、子どもたちの異文化あるいは外国への自らの認識や態度を育成することができる。それは外からの影響を受けて考え方を形成するのではなく、自ら体験したことである。その経験によって、子どもの「個性」、「正しい価値観」などを育成することが非常

に重要だと考えられる。

- ③中国側には、相手がよくない印象に変化した子どももいる。中国側の1名は「相手の座る姿勢が良くない」という理由で、相手が良くない印象に変わった。これも今後の課題である。相手のことを受け入れると同時に「良い」、「悪い」という判断の基準ではなく、客観的、友好的、寛容的態度で接する子どもを育成することを今後の課題として考える必要がある。

## 9.2 漢字への意識の変化

「中国と日本の漢字（歴史・文化など）について知りたいですか」という設問について、授業前と授業後の変化を以下の図 27、図 28 で示した。

授業前の漢字への意識が本プログラムを通してよい方向に変化したことがわかる。

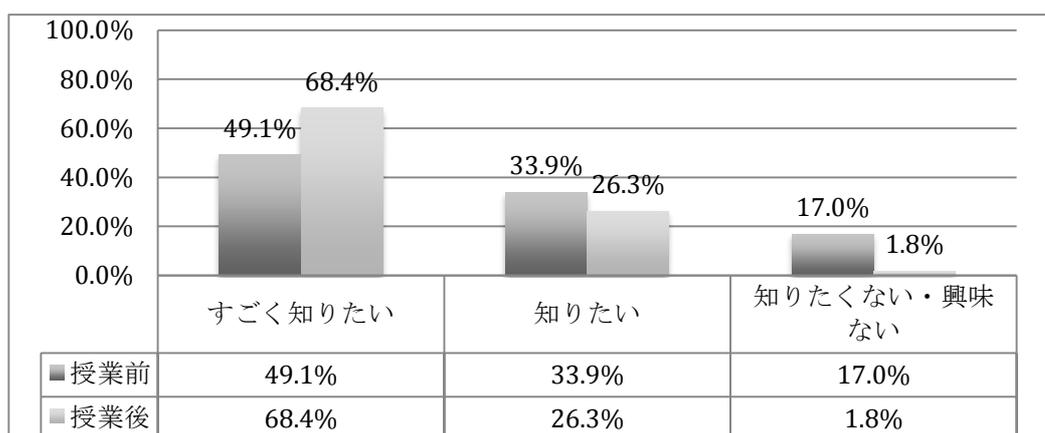


図 27 日本側の結果

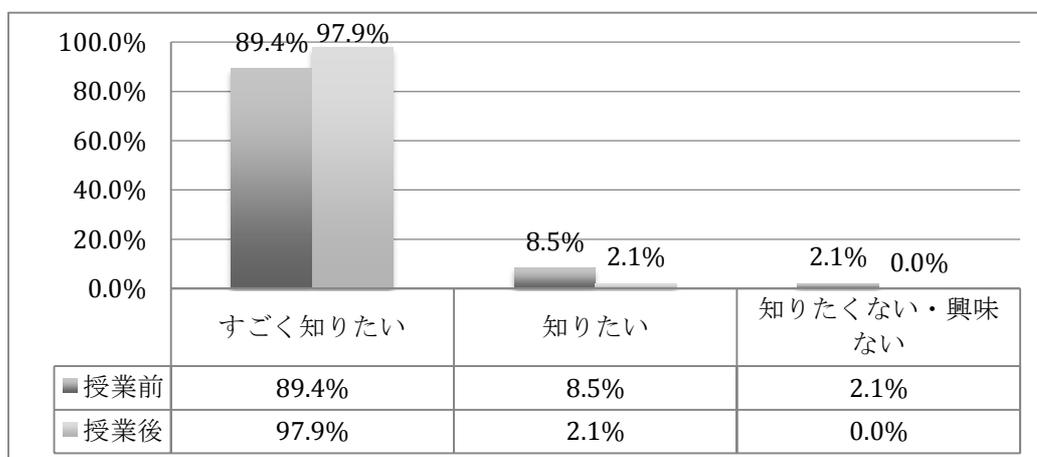


図 28 中国側の結果

以上の結果から、授業後は、日本側でも中国側でも漢字への学習意欲が増加していることからわかる。特に中国側は授業後「漢字について知りたくない、興味ない」子どもはゼロになった。それは、「知識」と「創造体験」と「交流の実際」があったからこそであり、当初の漢字へのイメージが、「よりよいもの」へと変化したと分析する。そして、授業実践の1ヶ月後、授業者である筆者は、中国側の子どもたちと連絡先を交換して、インターネットで交流できるようにした。そして、Dにインタビューを行った。このインタビューの結果、次のことが分かった。Dは今まで以上に、漢字の学習に対する興味が増したという。また、新しい漢字を学習する時、漢字の歴史や文化を考えながら覚えたと言っていた。さらに、日本語や日本の漢字に興味を持っているため、日本の人と直接交流したい、といった答えもあった。

### 9.3 文化間の「相互作用」の教育活動の有効性

本授業プログラムは文化間「相互作用」の実践的な視点から有効と判断できる。本授業プログラムは、単なる交流ではなく、「漢字の成り立ち・歴史」等を含めた「漢字の学習」や意味を相互に伝えあうものであり、「カタカナ言葉を表す創作漢字作り」の活動も交流の意識を変える活動であった。単に挨拶をしたり質問したりするだけの交流ではなく、そこに学びがあり、新たなかかわりの意欲となる創作活動があったことも大きな意味をもつ。さらに、日本側で交流のとらえ方をさらに深めるために最後に位置づけた時間も、交流の意識を変える時間となったと考えられる。「楽しい交流」が「より深くたくさん学べて楽しい交流」となったのではないだろうか。

漢字を通して、日本と中国「相互影響」、「相互作用」についての気づきがあったと言える。たとえば、日本側の第五時間目、「交流」への意識から見ると、子どもたちは、ほとんど二つの国の「相互作用」を認識することができ、たとえば、授業後の「～し合う」という双方向の記述が多いことから、文化的影響は一方的ではなく、二つの国ともよい作用を与えあうことと捉えた子どもが増えたことがわかる。特に授業前、「協力」「伝えあう」「受け継ぐ」「助け合い」「文化」「教えあう」等の記述は0であったことから授業を通して「相互作用」への認識が深まっている。

つまり、日本と中国の子どもたちは単純に相手のことなどをよくわかっただけではなく、相手のことを知りながら自分たちにも関わりのある漢字について改め

て考え直すことができる。また、表面的にしか相手の国のこと、民族のことを考えたことがなかったが、実は深いところで、日頃の思考とかコミュニケーションのレベルを支える漢字という文化によって、非常に深いところでたくさん関わっていたことを理解することができる。そうすると、自分たちの基本である言語について、捉え方が変わってくる。それは相互作用で、相手のことを学ぶことによって、自分たちについても理解を深めることができるのである。

このように、漢字を題材にすることによって、小学校レベルでの相互作用を図ることができる。これは国際理解教育において、相手のことを理解し、自分たちのものが変わらないのと違い、あるいは帰国子女のような特別な立場の子どもたちの学習とも違う。これは、日頃は外国人と交流できない子どもたちにとっても、全体を見てみると他の文化とのかかわりがある。その中で、自分たちで捉え直すことができるような重要な実践ではないかと考えられる。

#### 9.4 課題

課題としては以下のことが考えられる。

##### (1) 漢字知識や文化における授業内容の再検討

今回の授業では、漢字に関する内容をほぼ子どもたちに伝えたが、細かい点を解決しなければならない。たとえば、漢字の起源について、日本の子どもたちはあまり知らないが、中国側の子どもたちは蒼頡を知っており、漢字の創造者と信じられた。実は、蒼頡は単なる伝説の人であり、真実性に乏しい。低学年の学習者でも高学年の学習者でも、考古学的な視点から漢字の起源を認識する必要がある。しかし、今回の第一時間目の授業で、子どもたちの興味という観点から考え、考古学的な視点から漢字を紹介することではなく、蒼頡と結繩という伝説から紹介した。「結繩や蒼頡造字点説はさておき、実際に漢字がどのようにして生まれてきたかを考えるには、考古学的発掘の成果によらねばならない」<sup>188</sup>という観点があり、本研究も同意する。半坡遺跡や大汶口遺跡など遺跡から出土した、符号が刻まれた土器という客観的証拠の存在に基づき、漢字の起源や形成を知識として子どもたちに伝えるのは、日本側でも中国側でももっと「説得力」を持つ授業実践である。今後は、古書から記載された伝説と考古学的な発見を結びつけ、漢字の起源を子どもたちに紹介することを工夫しなければならない。

<sup>188</sup>阿辻哲次・一海知義・森博達（編）『何でもわかる漢字の知識百科』三省堂、2002年、p. 30。

もう一つの漢字に関する問題点は、簡体字と新字体に関することである。この点について、確かに第一時間目のとき「簡体字と新字体」について簡単に紹介したが、第三時間目で「新しい漢字を作る」という活動を行ったとき、中国側の子どもたちは簡体字を加えたまま字を作成した。筆者が協力した班はきちんと簡体字から新字体に変えていた。しかし、協力していない班は、そのまま簡体字を使って新しい漢字を作った。この結果として、日本側の人は簡体字がわからなかった可能性がある。したがって、今後、第一時間目を行うとき、日本の新字体を中国側の子どもたちに詳しく紹介しなければならない。中国の簡体字も日本側の子どもたちに詳しく紹介することが必要である。

一例として、中国語と日本語の字体を、次の3種類<sup>189</sup>に分類した。

1.中国では簡体字、日本では新字体が使用されている。

機/机 習/习 義/义 愛/爱 為/为 園/园

2.中日両国の字体がそれぞれ違う。

伝/传 図/图 訳/译 栄/荣 桜/櫻 残/残

3.日本語において中国語にはない和製漢字が多く用いられている。

込、峠、畑、働、井、偲、辻、亡、凧、悌、躰、榊、嘶

以上の分類を子どもに教える必要がある。また、「車」「東」「気」など、使う頻度が高い漢字の繁体の形と簡体の形を両国の子どもたちに教えることなども必要である。そして、中国と日本の子どもたちが新しい漢字を通して交流する前提として、新しい漢字を作るという活動が重要である。そのため、中国と日本の漢字の「意味」を比較するだけでなく「字体」にも注目し、「字体」は重要であるので一時間目に紹介する必要がある。

## (2) 興味をもつ段階から次のステップへ

今回の授業プログラムにおいて、日本と中国における漢字を通じた理解は進み、興味をもたせることができた。今後は、漢字に関する歴史的・文化的な影響などの理解や日本と中国の相互理解・交流についても考えさせたい。すなわち、互いに興味を持つことだけで終わらせずに、お互いに理解、勉強し、国々の価値観・人生観を分析・思考、深めて理解でき、積極的な共存を図ることができるようにしたいのである。そのための新たな授業プログラムを生み出して行く必要がある。

<sup>189</sup>崔釜『日本語通論』大連理工大学出版社、2003年、pp. 70-71。

### (3) インターネット接続状況の不安定

第四時間目の授業では、インターネットに接続して互いに交流することができたが、インターネットの接続状態がかなり不安定であった。たとえば、発表の順番を決めるとき、インターネットに突然問題が起き、画面は見えたが、音声は接続できなくなった。数分後、音声は聞こえたが、時間が不足したために日中双方が発表予定者を1人ずつ減らした。交流の時間と画面や音声を保つため、授業者が両国の学校のインターネット接続状況を事前に確認しておく必要がある。また、授業者は授業で使用する通信技術及び関連ソフトウェアの知識を学び、インターネットの安定的な接続を担保するための知識を得て、接続しやすいインターネットの環境を作っていく必要がある。

### (4) 汎用性の高い教材・プログラムに

「発展させるプログラム」も重要であるが、今回のプログラムが有効であったことから、より汎用性の高いプログラムを開発することも検討課題となる。「ここでしかできない」のではなく、より多くの学校で、「これならできる」というものを開発したい。「漢字の歴史や理解」(一時間目)、「名前の漢字の意味」(二時間目)、「カタカナ言葉を創作漢字で表現」(三時間目)は、通常の国語の授業と関連があり、汎用性を考えた教材化をすれば、多くの学校で実施可能である。さらに、汎用性を高めるため、漢字文化圏以外の国に適応できる教材開発も必要である。漢字を素材とした学習・交流は大いに成果があったが、今後は「漢字圏以外」の文化や知識を題材とした授業の可能性も検討していく必要がある。

### (5) その他

そのほかに、個別児童の問題や経費の問題もある。まず、個別児童について、日本側の一人の子どもが、「また時間があれば、この国際交流学習を続けたいですか」「日本についてもっと知りたいと思いますか」という質問に対して、「続けたくない」「外国について知りたい」と回答した点である。その児童に授業を続けたくない理由を聞くと、「外国語を喋りたくない、日本語や英語は面倒」と言っていた。その後の、担任の先生からの聞き取りによって、「外国語を勉強したくない」子どもたちについて、理由を尋ねたところ、この問題を解決するためには、子どもたちの個人的な情報を把握しなければならないということがわかった。個別に児童の興味を確かめる手立てを講じながら授業を展開していく必要があると思われる。

最後に、経費については、両国とも交流するための予算が少なく、実際の交流経費が不足している現状にある。

## 10 漢字の活用の在り方

### 10.1 漢字とアンチバイアス教育

今回の授業プログラムのアンケートの結果の一つとして、日本側と中国側の一部の子どもたちは授業前後における相手国の印象が変わったということがある。たとえば、授業前の中国の子どもたちの一部は、日本に対する印象として「残忍」、「悪い人たち」という偏見を持っていたが、授業後はこうした子どもたちはすべて態度が変わり、日本人について「よい人たち」との印象が残った。このような「漢字」の交流による「人」への認識の変化は、アンチバイアス教育が求める一つの重要な効果だと考えられる。

アンチバイアス教育は、多民族国家アメリカで誕生した。アンチバイアス教育の内容について、山田（2003）は、「アンチバイアス教育においては、単に異文化に触れるだけというツーリストアプローチではなく、人間の考え方の根幹に迫るものである。文化的多様性だけではなく、ジェンダーの問題や身体的な障害の問題も扱い、子どもたちの自己認識（identity）の形成および態度形成の発達課題を取り扱う」<sup>190</sup>と述べている。そして、身の回りにある固定観念、不正確なもの、偏見にとらわれているものを取り除き、公平なものに置き換えることが重要とされる。特に偏見の形成について、中村（1996）は「子どもは、親や周囲の大人たち、あるいはマスメディアなどが特定の集団に対してとったそのような態度を次第に学習し、それを自らの思考・行動の枠組みとして確立する」<sup>191</sup>と述べている。つまり、子ども時代に偏見を捨て、よい価値観や世界観を育成する教育活動が必要である。

アメリカの場合、人種の違いのような可視的差異が問題とされるのに対し、日本と中国のような二つの国の間においては、外部から見ると異なることがあまりないので、不可視的な差異を持っている。このため、日中間の偏見は、しばしば内部（言語、生活習慣、性格）から生み出されている。今回の授業実践の前のアンケートから見ると、日中の子どもたちは互いに多少の偏見を持っていた。たとえば、中国側の子どもたちは日本人について「堅苦しい」という考え方を持っており、日本側の子どもたちは中国について「良い国じゃない」という考え方を持っていた。しかし、今回の授業実践においては、交流を通して、相手の姿勢、表情から相手国の人を直接に感じることができ、漢字について興味を持つと同時に、

<sup>190</sup>山田千明「韓国における多文化保育とアンチバイアス教育—ソウル市およびその近郊の保育機関における調査より—」共栄学園短期大学『共栄学園短期大学研究紀要』第19号、2003年、p.139。

<sup>191</sup>中村真「『偏見』に関する社会心理学的研究の動向」川村学園女子大学『川村学園女子大学研究紀要』第7巻第1号、1996年、p.68。

以前には存在した中国人・日本人への偏見も解消される可能性がある。中国の子どもたちにとって、それは外部から教えられる日本ではなく、自ら感じる日本である。日本側でも同じである。このため、共有文化の共通点と相違点の学習を通して、相手の国及び相手国の文化を改めて認識することができ、さらに自分自分に対する認識も修正することが可能である。こうしたことは二つの国に関するアンチバイアス教育を行うための試行的な観点である。

## 10.2 漢字を作る活動と創造

異文化間教育学の一つ重要な課題は、「異文化間教育学は、多文化的な状況の中で、『共生』のための新しい価値創造という役割を担う必要がある」<sup>192</sup>というものである。従来の異文化間教育では、異なった文化をもつ人たちのお互い理解・共生を目標として研究を行い、一定の成果を得た。しかし、新しい価値創造という部分の研究は不十分だったと考えられる。そもそも新しい価値創造というのはどんなものかという点について究明しなければならない。

新しい価値創造は、字面から考えると、これまでなかった価値を創るという意味である。また、日本の教育基本法には「(前略)豊かな人間性と創造性を備えた人間の育成を期するとともに、伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す教育を推進する」<sup>193</sup>とある。価値創造という言葉は高等学校教育の工学領域およびそれと関連する教育で扱われている。たとえば、高等学校学習指導要領では、工業科の目標として「工業と社会の発展を図る創造的な能力と実践的な態度を育てる」<sup>194</sup>とある。また、実践現場から見ると、異文化接触場面でコミュニケーション能力などの対応能力が必要とされ、「異文化間能力」と呼ばれる。このことについて、加藤(2009)は「異なる文化であれ、異質性であれ、違いを相対的にとらえる世界観、新たな価値観を創造する力などの、全人的な資質および人間性に関わる能力を有することが、異文化間能力の定義となるといえる」<sup>195</sup>と述べている。

今回の研究実践の中で、「新しい漢字を作る」という活動を設定した。中国側は、中国語に現存している「表音文字の言葉」を、日本側は日本語の「カタカナ

---

<sup>192</sup>前出、佐藤『異文化間教育—文化間移動と子どもの教育』p.36。

<sup>193</sup>文部科学省「教育基本法」、[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houan/an/06042712/003.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houan/an/06042712/003.htm) (2016年9月30日最終確認)

<sup>194</sup>文部科学省「専門高校における職業教育の現状と課題、改善の方向性(検討素案)」、[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/031/siryu/07071318/002.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/031/siryu/07071318/002.htm) (2016年9月30日最終確認)

<sup>195</sup>加藤優子「異文化間能力を育む異文化トレーニングの研究：高等教育における異文化トレーニング実践の問題と改善に関する一考察」仁愛大学『仁愛大学研究紀要、人間学部篇』第8号、2009年、p.15。

言葉」を漢字化し、互いに理解できる「表意文字」を作ること为目标として、その新しい価値創造を具体化した。本研究では、文字の発展や変容する唯一の理由は、交流や表記などがもっと理解・把握しやすく、もっと便利・有効になることであると考え、こうした取り組みを行った。

人間の文化が便利・有効になる代表的な例として、現代社会で広く使われているさまざまな標識がある。たとえば、日本の空港には、様々な施設を指示する看板がある。こうした看板の表記は、日本語と英語を併記するだけでなく、必ず絵を付けている。レストランではフォークとナイフの絵があり、荷物受け取りの場所には、スーツケースの絵がある。このような標識は誰でも読むことができ、非常に便利である。このため、グローバル化の時代において、最も適応する伝達手段は伝統的な文字ではないかもしれない。人類はこれから「図を読む」という時代に入ると考えられる。本来、我々は事実が直接体现された視覚に最も依存している。確かに、標識や絵などの記号の表現力は、文字よりやはり弱くて限界があるが、これらには発展の傾向が見える。しかも、絵や標識のような事象の本質を直接に表すことは、「象形」という根拠に基づいて見分けることである。

漢字は「表意文字」という特徴を持つ。表意文字は一つ一つの字が一定の意味をもっている文字であり、漢字の他には古代エジプトの象形文字なども表意文字に属する。また、漢字以外で現存するものとして、トンパ文字と呼ばれる象形文字がある。これは、中国のチベット東部や雲南省北部に住む少数民族のナシ族が使い、独自の表意文字だけを使っている珍しいケースである。

世界で流通している文字の中で、漢字は数少ない表意文字であり、そのほかは主に表音文字である。現在、漢字は主に日本語と中国語に存在しているが、漢字の「表音」という特徴が、中国語でますます混乱を引き起こしている。外来文化の影響を受け、英語や外国語に対応する中国語がないため、新しい言葉を作らなければならない。外来語も通常は漢字で表記される。その新しい中国語の言葉は、英語の音と同じ中国語漢字ことばであり、字面から意味を見る「表意文字」ではない。英語の発音と似ている漢字ことばにすぎない。たとえば、「カラ（カーラー）OK」（カラオケ）などの音訳がだんだん増えている。このような漢語には漢字がもっているはずの「表意」という特徴がない。しかも、グローバル化に伴い、これから音訳語が増加する可能性もある。

日本語は、ひらかな、カタカナが表音文字で、漢字が表意文字であり、表音文字と表意文字の両方が併存する言語となっている。外来文明を受けるためには、新しい日本語の言葉を作らなければならない。以前の外来語は漢字で表記するも

のが多く、日本だけではなく中国や漢字圏でも使えるようになっていた。しかし、現在日本語の外来語はほぼカタカナで書き表されている。文部科学省によると、「現代の外来語は片仮名で書き表すのが一般的であるが、外来語表記の歴史を見ると、この傾向はそれほど古いものではない。欧米系の外来語が流入し始めた室町末期から江戸初期の国語の文献では、外国語や外来語の表記は、漢字であったり、平仮名であったり、時には片仮名であったりして、一定していなかった。外来語を漢字で書くことは明治以後も続き、語によっては戦後まで残った」<sup>196</sup>しかし、「明治期の外来語急増に伴って、外来語を片仮名で書く習慣が確立した。(中略)その後、大正から昭和にかけて、新しい外来語が増加し、戦後の外来語急増期に外来語の片仮名表記が決定的となった」<sup>197</sup>ということである。

そして、日本語には多くのカタカナ英語が取り込まれているため、英語を勉強する前から英単語に触れる機会に恵まれているが、このことのデメリットもかなり多い。例としてカタカナ英語は「カタカナ発音の弊害」を引き起こす。すなわち、たとえば英語のLab（研究室、実験室）、Love（愛）、Rub（擦る）などは英語としての発音はすべて異なるが、日本語で発音すると全部「ラブ」になり、外国人には理解が困難である。このようなカタカナ発音の弊害は、外国人の筆者から見ても深刻な問題の一つだと考えられる。

もう一つの問題点は、和製英語である。和製英語について須部（2013）は「『存在さえも確認されていない奇妙な動物』を意味する『ユーマ』（日本人が考え出した、an unidentified mysterious animal という英語からできた和製英語で実際の英語はcryptid）などであり思わず英語として使用してしまいそうである」<sup>198</sup>と説明している。

中国における「表音」漢字という特徴による音訳語や、日本におけるカタカナ英語や和製英語が増加すると、二つの国の交流にとってますます不便になってくる。二つの言語のシステムもますます混乱をきたす可能性がある。しかも現代社会は人間のライフスタイルが変わっており、毎日新しい技術や知識が発生している。つまり、我々が学ばなければならないものは昔より多く、我々は日々さまざまな情報を処理しなければならない。必然的に、我々は忙しくなり、時間的にかなり厳しくなる。この時、我々は新しい情報を獲得する方式を必要とする。その

<sup>196</sup>文部科学省「外来語の表記（答申）（抄）」、[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/nc/t19910207001/t19910207001.html](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19910207001/t19910207001.html)（2016年9月30日最終確認）

<sup>197</sup>同上。

<sup>198</sup>須部宗生「カタカナ英語と和製英語—最近の傾向を中心として—」静岡産業大学『環境と経営』第19巻第2号、2014年、p.135。

方式は以前より早く、わかりやすい説明であることが求められる。日中両国の人は現代社会において、互いの言語や文字を学習するだけでなく、できればより互いに理解しやすくするために、新しい方法を見つけて言語や文字を変えることができる意識や思考力を獲得する必要がある。これは、異文化間教育学領域における「価値創造」の一つである。

このような教育は「価値創造」という能力を早く育成させることにあると考えられる。しかし、「価値創造」という意識や能力を育成するためには、「創造力」を育成しなければならない。創造力を育成することは、教育の各領域においても非常に重要である。しかし、小学校における創造力の扱いは、中国でも日本でもそれほど重視されていない。このことについて、日本側を中心として考察しよう。

日本の小学校段階を見ると、社会科、図画工作、美術、技術、家庭科などの教科に「創造」という語がある。たとえば、小学校学習指導要領・第2章・第7節図画工作の目標は「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う」<sup>199</sup>ということである。しかし、「創造」を定義し、どのようにすれば創造的になるかという説明は、学習指導要領には見られない。また、教科以外の領域では、目標において「創造」という表記が出てくるのは、「総合的な学習の時間」においてである。小学校学習指導要領・第5章「総合的な学習の時間」の目標は「横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする」<sup>200</sup>である。総合的な学習の時間の目標には「創造的」という表記が登場するが、その定義や具現化する方策が学習指導要領における「総合的な学習の時間」に関する記述の中には見られない。

また、齋藤（2012）は学習指導要領、学校教育目標、保護者、教師という四つの方面を踏まえ、質問紙調査という調査方法を用い、日本の学校教育における創造力の育成に関する状況について調査した。たとえば、保護者の意向に対して、齋藤（2012）は「小中学校の保護者は子どもに創造力を獲得させることに、そ

---

<sup>199</sup>文部科学省『小学校学習指導要領』第2章第7節図画工作

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/zu.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/zu.htm) (2016年9月30日最終確認)

<sup>200</sup>文部科学省『学習指導要領』資料6 道徳関係抜粋、

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/096/shiryo/attach/1333174.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/096/shiryo/attach/1333174.htm) (2016年9月30日最終確認)

れほど強い必要性を感じていないことが分かる。ということは、子どもの担任教師や学校に対して、創造力の更なる獲得を要望するようなことがあったとしても、希少であろう」<sup>201</sup>と述べている。教師自身の創造性の程度について、齋藤(2012)は「教師自身の力量不足に加え、教師の教育観や教育理念に影響を与えると考えられる諸条件が、創造力の育成を重視していない以上、子どもたちに創造力が身に付くことなど、とうてい期待できない」<sup>202</sup>と述べている。こうしたことにより、学習指導要領の記述、保護者の意識や教師の指導能力から見ると、日本の学校教育は「創造力」の育成を重視しているとは思えない。

一方、漢字創造は実際の生活と密接に関係しており、子どもたちが中国語と日本語、それぞれにおける外来語の問題を意識しながら、外来語を漢字化し、相手に理解できる漢字を作成するという過程は、創造力を育成することだと考えられる。また、子どもたちの感想から、作った漢字を相手の国に発表するというような活動を通して、日中両国の社会に大いに貢献できるという実感を得ることができた。もちろん今回の漢字を作る方法について、細かく調整する必要がある。たとえば、日中漢字の専門家および関連の機関と連携し、漢字を作る専門授業プログラムや教材を開発する必要がある。

---

<sup>201</sup>前出、齋藤「学校教育が創造力の育成を軽視する要因：社会人基礎力獲得の観点から」p.85。

<sup>202</sup>前出、齋藤「学校教育が創造力の育成を軽視する要因：社会人基礎力獲得の観点から」p.88。

## 11 研究の課題

### 11.1 文化間「相互作用」の限界

今回の実践授業を通し、漢字を用いることで大きな成果を得られたが、このような文化間「相互作用」という観点から、ほかの地域にとって通用できるかどうか、以下で検討する。

今回の漢字の交流活動は、中国（台湾、香港含む）と日本の間でのみ実施が可能である。東アジア文化圏における他の国、たとえば韓国、ベトナム、北朝鮮の国々では、漢字の習得率が非常に低いので、漢字の相互作用に対して深い理解を到達できないと考えられる。

しかし、東アジア文化圏においては、漢字以外の共通文化もある。たとえば、食文化、儒家文化などの生活・言語文化や思想儀礼の領域の文化項目を選定し、新しい授業プログラムを開発し、実施することが可能である。同様の授業プログラムは、他の文化圏や地域で実施することができるかどうか検討する。

たとえば、「欧州連合」(European Union、以下、EU)には、複数の国家があり、それらの国々は、国家連合の形をとり、互いの相互理解と異文化共存能力の育成が各国の大きな課題となっている。その能力を育成するためには、国境を越えた外国語能力が非常重要である。簡単に言語運用力の育成だけでなく、杉谷ら(2005)は「また学校教育では、従来の『言語中心』の方法から、『内容指向の言語学習』(Content based Language Learning、Content-and-Language-Integrated-Learning、以下 CLIL)へと、科目横断的に外国語学習を促す教授方法が拡大している」<sup>203</sup>と述べている。これは教科の学習と外国語の学習を統合する教育方法であり、母語と外国語を使用し教科目の学習を進める方法である。このような「2言語使用教育」の一つの主要目標としては、複眼的に思考する能力の育成がある。その具体例として、ドイツは隣国との相互理解を深めるため、歴史科目を2言語使用で教えはじめている。杉谷ら(2005)はドイツの歴史教育について、「その際テーマとして、フランス革命やナチス占領時代のフランスにおけるレジスタンス運動などが選ばれている。英語・ドイツ語での歴史教育では、ルネッサンスと近代、産業革命、第二次世界大戦、戦後史、現代では欧州統合の他、国際紛争、ラディカリズムなど複数の国家や地域に関わる国際問題などの題材が選択される傾向にある」<sup>204</sup>と述べている。このような教

<sup>203</sup>杉谷眞佐子・高橋秀彰・伊藤啓太郎「EUにおける『多言語・多文化』主義 —複数言語教育の観点から言語と文化の総合教育の可能性をさぐる—」関西大学外国語教育研究機構『関西大学外国語教育研究』第10号、2005年、p.36。

<sup>204</sup>同上、p.48-49。

育方法は、杉谷ら（2005）によれば「2言語資料の対比による複眼的思考力の育成を促す教育は、単に言語運用の技能面のみでなく、価値観の相違に気づかせ、異文化や自文化を省察する能力、即ち、異文化理解や異文化対応能力の育成にも貢献できる可能性を内包しており、ドイツでは2言語教育の重要な目標とされていることを再度強調しておきたい」<sup>205</sup>とされる。たしかに、興味深い近現代史の諸事象の学習を通して言語能力の向上を期待することができる。

しかし、このような学習が互いの国に関する各方面の認識、あるいは「異文化理解や異文化対応能力」についてどれだけ寄与するのか、未だ不明である。実際に、EUの各国では、近隣諸国への認識が十分足りているわけではない。次の事例から互いの認識の不足を説明することができる。

EU加盟国の一つの英国は2016年6月23日に行われた国民投票でEU離脱を選んだ。本来、このような重要な投票においては、EUに関する問題や互いの影響を認識した上で、投票すべきだと考える。しかし、その投票結果について、「投票後悔」の声が非常に多い、毎日新聞に「ツイッターでは『離脱への投票を後悔している』という書き込みがあふれ、英政府に2度目の国民投票を求める署名は350万人を突破した」<sup>206</sup>という記事があり、また、海外のネットサイトINQUISITR<sup>207</sup>によれば、投票結果が出た後にグーグルの検索でEUに関する質問が出た。たとえば「EU離脱が意味することは?」「EUとは?」「EUの加盟国は?」「EUを去ると何が起こるのか?」「EU加盟国の数は?」となった。英国国民の多くは一体EUが何だったのか分からずに「離脱」に投票した可能性があり、イメージで投票していたという可能性も高い。そのため、EUや加盟国に関する認識について再教育が必要だと考えられる。そして、英国側だけでなく、EU各国も英国に対して互いの認識・理解を促進する必要がある。

現在のEU各国では政治・経済共同体の必要性を認識しており、政治面、経済面の「相互作用」を重視している。一般的に、EU各国は共通文化を基盤とした意識も持っている。たとえば、キリスト教という宗教文化、民主主義、立憲国家という政治文化などである。しかし、強大な政治面、経済面の影響を受けながらも、教育面を見れば、互いの認識・理解を促進する科目はほとんど外国語教育の

---

<sup>205</sup>同上、p.49。

<sup>206</sup>毎日新聞「英EU離脱 公約『うそ』認める幹部『投票後悔』の声も」、<http://mainichi.jp/articles/20160627/k00/00e/030/145000c>（2016年9月20日最終確認）

<sup>207</sup>Voters' Remorse: Brits Regret Vote To Leave EU, Claim They Didn't Know Their Votes Would Count; Millennials Especially Upset By Brexit Vote、<http://www.inquisitr.com/3242585/voters-remorse-brits-regret-vote-to-leave-eu-claim-they-didnt-know-their-votes-would-count-millennials-especially-upset-by-brexit-vote/>（原文は英語、翻訳者が翻訳した）（2016年9月30日最終確認）

みである。

文化間の「相互作用」は、長い時間をかけて行われるものである。東アジア文化圏やヨーロッパ文化圏などの地域は、千年以上の歴史をもっている。長い時間をかけた近隣諸国の文化交流を通して、互いに影響し合っている。このような文化圏において、一つの文化事象を選定し、授業プログラムを開発し、文化間の「相互作用」の教育活動を実施することは容易であると考えられる。

一方で、アメリカやカナダなどの移民国家は、新しい国家であり、国民の出身地や民族構成が複雑である。たとえばカナダでは、イギリス、スコットランド、アイルランド、先住民族、アジア、アフリカなど、200以上の民族が生活している。隣のアメリカもほぼ同じ状況である。国と国の間の文化交流の歴史があまりないため、近隣諸国としてのアメリカとカナダは、文化間の相互作用、相互影響があまり見えてこないと考えられる。このような移民国は、むしろ国内で文化の多様性を尊重・理解する教育活動を実施することが、有効であると考えられる。つまり、近隣諸国における文化間の「相互作用」教育活動は、アメリカやカナダのような国において、適切とされるわけではない。これは、近隣諸国における文化間相互作用の限界だと考えられる。

## 11.2 その他

### (1) 授業プログラムの普及

本研究は、授業プログラムの構想や実践を通じた実験的な研究にとどまっている。今後は、授業プログラムを継続し、さらにより幅広く実施し、交流授業を行うことができるような授業プログラムの内容を再検討しながら、二つの国の小学校段階の教育交流事情や政策および項目を分析していきたいと考えている。そのためには、日本と中国の小学校において長期的にお互いに交流できる方法を探求する必要がある。その他、国際授業を行う機関や大学の関連するプロジェクトの協力や資金・技術提供を受けることや、日本と中国の交流に関する戦略を立て、学校との連携関係を作成することも必要となるだろう。

### (2) 漢字の限界

漢字を素材とした学習・交流は大いに成果があったが、今後は「漢字圏以外」の文化や知識題材とした授業の可能性も検討していく必要がある。漢字という題材は主に日本と中国、およびシンガポールの小学校段階で用いることができる。しかし、「漢字圏」を離脱した国（北朝鮮、韓国、ベトナムなど）や漢字圏以外の国に対して、どんな素材によって国家間の文化の絆を体現するさせるのかとい

うことに関して、子どもたちが理解できるように、これから国ごとに詳細に研究していかねばならない。

## 12 終章

### 12.1 これまでの道のりと本研究の成果

本研究では、異文化間教育の構造類型・理念及び国際交流の意義と目的、各国の異文化間教育の発展について考察した。異文化間教育の「相互作用」という構造から教育活動を検討した。さらに、中国と日本の小学生児童を対象とし、漢字を題材として互いに交流・理解できる方法や実践を行った。

本研究は異文化間教育をこれまでの特殊な対象を中心とした教育からより一般の子どもたちを対象とすることについて、重要な実例を与えることができた研究である。さらに国際理解教育のあり方を問い直し、国際理解教育から相互作用型の異文化間教育へと、今後求められる教育の在り方について問題提起を行っている研究である。

具体的な成果について「教育的成果」と「社会的成果」とに分け、以下で簡潔に説明する。

まず、「教育的成果」の具体的な内容について、「文献研究の成果」「実践研究の成果」を分けて説明する。

#### (1) 「文献研究の成果」

① 日本とドイツにおける異文化間教育の研究対象について検討し、これまでの異文化間教育は、基本的に複数の文化を経験した子どもたちと、多民族・多文化社会における子どもたちを対象としていることが明らかにした。異文化間教育の研究対象には一般の子どもたちも含まれているが、異文化間教育構造類型（「文化転換型」「文化交差型」「文化分離型（異文化回避型）」「相互作用型」）などの視点から見ると、異文化間教育の教育の対象は少数民族、移民、留学生、帰国子女、多文化社会の子どもたちとなっており、多文化社会以外の地域の子どものたちは対象外となってきた。発展途上国や多文化社会がまだ形成されていない地域の子どものたちに最も近い構造類型は「相互作用型」と考えられ、その地域の子どものたちも適用される新しい「相互作用型」という理論的枠組みを再構築することを提案した。

② 異文化間教育における相互作用の在り方について詳細に検討し、さらに、具体的にそれと近隣諸国における文化間の「相互作用」について検討した。その視点の下で教育活動を実施する可能性を見出した。

③ 異文化間教育における小中学校の国際交流活動は、日本では様々な形で行われているが、中国ではまだ様々な課題がある。そして、中国における国際交流の回数、実施状況、内容から考察した結果、中国の国際交流活動について「国際交流活動の回数が少ない、地域によって国際交流活動の格差が激しい、交流内容が

『表面的』レベルに留まっている」という三つの特徴をまとめた。

## (2) 「実践研究の成果」

① 異文化間教育の視点から、日中関係や漢字という内容に基づく日中の小学校段階における異文化間教育の授業設計を提案し、授業プログラムを実施した。その結果、子どもたちの相手に対する態度は変化し、互いの漢字を理解するようになった。この事実によって、本プログラムの有効性を明らかにした。

② 異文化間教育について再検討し、漢字と異文化間教育の関連性を述べ、異なる文化・共通文化に基づいて文化を再創造する活動は、異文化間教育の「価値創造」の有効な実践方法の一つである。さらに、多文化共生や国際理解教育の視点から、異文化間教育への新たな提言を行った。

そして、本研究の「社会的成果」は、交流授業を通して、日本と中国の間で長期間存在している偏見をある程度解消できたことである。また、相手の国との関係を改善することに対し、一つの有効な方法を示すことができたと考えられる。

第三章で述べたように、世論調査によれば、日本人は中国に対して、現在、これまでで最も悪い印象を持っている。中国人も 2013 年時点で日本の印象は最も悪く、現在も依然として厳しい状況だと考えられる。さらに、「反日」の風潮に伴い、中国各地において、日系企業の工場や中国人所有の日本車への大規模な破壊が引き起こされる事態が生じた。こうした事件は、平和な社会を構築することに対して非常に大きな障害になると考えられる。平和な生活環境を作るため、人間は小さいから広い視野を持ち、お互いに尊重する能力を育成することが重要である。

今回の実践授業の現場を見ると、両国の子どもたちは、姿勢や表情から相手国の人のことを直接に感じることができている。また、授業後のアンケートを見ると、漢字について興味を持つと同時に、相手国に対する印象も多少変わり、以前には存在した相手国の人への偏見もある程度解消した。中国の子どもたちにとって、授業で交流した対象は、外部から教えられる日本ではなく、自ら感じる日本である。日本側でも同じである。こうした授業を通して子どもたちは、ある国やある文化形態などを改めて認識することができ、さらに自分自分に対する認識も修正することができるのであり、このような授業が広くなされることにより国際社会はより平和になり、共に発展することができると考えられる。

## 12.2 展望

### (1) 中国の異文化間教育の始め

国際化・グローバル化の進展にともない、中国の多文化的状況が加速度的に広まり、地域や学校の多文化化が進んでいる。こうした状況の中で、中国では、学校教育における国際理解教育の推進と国際理解教育に関する研究が一層重要視されるようになってきている。今後、中国の国際理解や異文化理解の研究が進むにつれ、異文化間教育は確実に中国でも求められるようになる。現在、異文化間教育という概念はまだ中国で普及していないが、中国の経済発展に伴い、中国に在住する外国人もますます増えている。それと同時に、中国を離れて海外に移住する中国人も増加してきた。中国は遅かれ早かれ、日本やドイツのように「第二言語としての中国語」「海外子女教育」「外国人教育」などの問題と直面しなければならない。異文化間教育は、各国の状況（政治体制、宗教、経済的レベルなど）に合わせて互いに知り、それぞれ現実的に理念の実現を目指すことも必要であろう。では、現代中国に合った異文化間教育とは、どのようなものか。本研究が明らかにした異文化間教育の実態が、中国の異文化間研究において、その問いを追求するための出発点となれば幸いである。

## (2) 異文化間教育の再構築

現在、異文化間教育の視点から授業を開発するという実践研究は多いわけではない。その理由は、おそらく今までの異文化間研究の重心は移民や少数民族、留学生など社会の中で少数派と考えられる。異なる文化の狭間で成長・発達する人間の形成などに対して関心を持つことが重要だと考えられるが、単一の文化の下で成長していることへの関心をもつべきである。理論上は、江淵（2007）によると、異文化間教育の研究の主な対象としてすべての子どもたちも対象となるが、異文化間の構造類型から見ると、すべての子どもたちを対象とする構造類型は見えない。国際理解教育はすべての子どもたちを対象とするが、その構造類型など理論的な部分が不足である。本研究の観点は、異文化間教育の研究の進展とともに、すべての子どもたちに適応する理論構造を再構築する必要がある。さらに新しい理論価値を創造した上で、異文化間教育内部のシステムの規範化を実現することを期待される。

## (3) 日本と中国の未来の関係は子どもに

「はじめに」で述べた通り、「日中関係を改善する」という動機が、本研究を始めたきっかけであった。本研究の中で日本と中国の漢字について整理し、授業を開発した。今回の授業を受けた日本と中国全部 106 名の子どもは、未来の生活の中でどんな価値観・人生観をもち、相手の国や人にどんな態度をとるのだろうか、想像もできない。

現在日中関係は楽観的状況にはない。しかし、両国が切っても切れない関係だということは両国がともに認めている。今後、筆者は二つの国の関係を改善するための教育、互いの絆を理解する教育方法や実践活動に期待し、日中両国が真の意味で「共に生き、発展する」ようになることを望んでいる。

## 謝辞

本論を作成するにあたり、多く皆様にお世話になりましたので、ここで謝辞を述べさせていただきます。

本研究を進めるにあたり終始あたたかいご指導と激励を賜りました千葉大学教育学部藤川大祐教授に心から感謝の意を表します。長い間でも、お忙しい中でも何度も論文についてご指導いただき、研究のヒントをくださいました。千葉大学教育学部鈴木隆司教授、吉田雅巳教授、文学部尾形隆彰教授には研究に向かう姿勢や研究に関する困難克服のための具体的な方策までていねいに教えていただきました。心からお礼申し上げます。

敬愛大学国際学部子ども学科の阿部学講師は、千葉大学大学院人文社会科学研究所公共研究専攻の先輩として、研究の進め方や悩みについて親身になって相談にのっていただきました。深くお礼申し上げます。

千葉大学教育学部教育実践総合センターの土田雄一教授には、授業開発および研究における多大なご協力とご支援をいただきました。深く感謝いたします。

今回実践をさせていただいた中国重慶市の小学校と日本千葉県の小学校の先生方、研究授業の実践を引き受けてくださりありがとうございます。また、学校の5年生の担任峰島先生、千葉大学の中国人留学生の皆様には授業を実践するにあたりご協力いただいただけでなく、さまざまな貴重な意見を出していただきました。厚く御礼申し上げます。

最後に、千葉大学教育学部藤川研究室の先輩、同輩、後輩の皆様にも大変お世話になりました。論文の推敲などお忙しい中でも様々なことを協力していただきました。皆様のご協力のおかげで論文を完成させることができました。ありがとうございました。

2016年9月 陳卓君

## 資料・参考文献

a. 日本語文献（五十音順、同一著者の場合は年号順）

- ・阿辻哲次・一海知義・森博達（編）『何でもわかる漢字の知識百科』三省堂、2002年
- ・生田周二「ドイツにおける異文化間教育の諸相—多文化社会への不安と展望—」、鳥取大学教育学部附属教育実践研究指導センター『鳥取大学教育学部教育実践研究指導センター研究年報』第5号、pp.11-18、1996年
- ・石井敏・久米昭元『異文化コミュニケーション研究法テーマの着想から論文の書き方まで』有斐閣ブックス、2013年
- ・江原武一『多文化教育の国際比較—エスニシティへの教育の対応』玉川大学出版部、2000年
- ・江淵一公「多文化教育の概念と実践的展開—アメリカの場合を中心として—」、日本教育学会『教育学研究』第61巻第3号、pp.222-232、1994年
- ・江淵一公『異文化間教育学序説—移民・在留民の比較教育民族誌的分析（第2版）』九州大学出版会、1997年
- ・江淵一公『異文化間教育研究入門』玉川大学出版部、2007年
- ・大河内康憲「日本語と中国語の同形語」、『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版、1997年
- ・楠山研「中国における大学入試改革の動向:地方・大学への権限委譲に関する一考察」、京都大学大学院教育学研究科『京都大学大学院教育学研究科紀要』第51号、pp.128-141、2005年
- ・黒田明雄「学校間の国際交流に関する研究—姉妹都市提携と姉妹校提携を中心に」、加計学園倉敷芸術科学大学『倉敷芸術科学大学紀要』第12期、pp.245-258、2007年
- ・蔡秋英「中国における国際理解教育の現状と課題—小学校教科『品德と社会』を中心として—」、広島大学大学院『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部第59号、pp.87-96、2010年
- ・斎藤ひろみ・佐藤郡衛・野山広・浜田麻里・見世千賀子・南浦涼介「実践をまなざし、現場を動かす異文化間教育学とは—テーマ設定の趣旨と成果・課題—」、異文化間教育学会『異文化間教育』41、2015年
- ・佐藤郡衛『国際化と教育—異文化間教育学の視点から—』放送大学教育振興会、2003年

- ・佐藤郡衛『異文化間教育—文化間移動と子どもの教育』明石書店、2014年
- ・諏訪共香「異文化コミュニケーション:漢字の発達と社会文化的遺伝子」、龍谷大学『龍谷大学国際センター研究年報』第15号、pp.179-192、2006年
- ・蘇于君「中国における農村教育の発展とその課題」、鶴山論叢刊行会『鶴山論叢』第11号、pp.1-21、2011年
- ・園屋高志・米盛徳市・仲間正浩・藤木卓・寺嶋浩介・森田裕介・関山徹「テレビ会議システムを用いた学校間交流学习の研究:鴨池小学校(鹿児島市)一勝連小学校(沖縄県うるま市)の二校間での実践事例」、鹿児島大学『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』特別号3、pp.1-8、2007年
- ・竹田治美「『日中同形類義語』について」、奈良女子大学『人間文化研究科年報』第20号、pp.335-342、2005年
- ・田淵五十生・大幸府西小学校国際交流委員会「小学校における国際交流の重要性と成立条件—太宰府西小学校の日韓姉妹交流の実践から—」、奈良教育大学教育研究所『奈良教育大学教育研究所紀要』第27巻、pp.13-25、1991年
- ・陳卓君「中国の重慶における国際交流の開発—情報通信技術を利用した試行的な取り組み—」千葉大学大学院教育学研究科修士論文、2013年
- ・陳卓君「中国の重慶における国際交流の授業開発—情報通信技術を利用した試行的な取り組み—」、千葉大学教育学部授業実践開発研究室『授業実践開発研究6』、pp.17-24、2013年
- ・中山あおい・山田容子「ドイツ—異文化間教育の背景と実践」、天野正治・村田翼夫『多文化共生社会の教育』玉川大学出版部、pp.244-260、2001年
- ・西谷まり「社会科学分野で使われる日中同形異義語」、一橋大学留学生センター『一橋大学留学生センター紀要』第7号、pp.15-28、2004年
- ・文楚雄「中国のことばと文化・社会(一)」、立命館大学産業社会学会『立命館産業社会論集』第39巻第2号、pp.115-134、2003年
- ・山口修『日中交渉史—文化交流の二千年』東方書店、1996年
- ・山田千明「韓国における多文化保育とアンチバイアス教育—ソウル市およびその近郊の保育機関における調査より—」、共栄学園短期大学『共栄学園短期大学研究紀要』第19号、pp.135-148、2003年
- ・李軍「中国における建国後の漢字教育政策の変容—『教学大綱』から『課程標準』へ—」、早稲田大学教育・総合科学学術院教育会『学術研究:人文科学・社会科学編』第60号第3巻、pp.165-185、2012年
- ・廖麗菲「日中交流における漢字の働き:文章理解度の測定調査をもとに」、図書館情

b. 中国語文献（アルファベット順）

以下の中国語文献の漢字は、日本語漢字に直して表記する。ただし、日本語にない漢字については、そのまま表記しておく。

- ・陳愛苾「我国青少年国際理解教育的実施策略」、北京教育学院『北京教育学院学報:社会科学版』第24卷第2期、pp.54-57、2010年
- ・崔釜『日本語通論』大連理工大学出版社、2003年
- ・崔世広「中日相互認識的現状、特徴与問題」、中国社科院日本研究所『日本学刊』第6期、pp.56-70、2011年
- ・郭雯霞「試述德国異文化間教育的展開」、『山西大学師範学院学報』第3期（総第48期）、pp.61-64、1999年
- ・劉洪文「国際理解教育的定義内涵初探」、江西青年職業学院『江西青年職業学院学報』第16卷第2期、pp.16-17、2006年
- ・劉芸「小学開展国際理解教育的探索和实践」、山東出版集團『新校園:學習』第4期(総第240期)、pp.41-44、2012年
- ・史有為『漢語外来詞』商務印書館、2000年
- ・王愛雲「中国共産党与新中国文字改革(1949-1958)」、中共福建省委党校福建行政学院『党史研究与教学』第6期（総第212期）、pp.11-24、2009年
- ・王晨筱「浅論中国応試教育存在的問題、原因及对策」、長春出版社『考試週刊』第47期、pp.1-4、2013年
- ・王遠美・李晶「北京市实施国際理解教育的回顧与思考」、北京教育学院『北京教育学院学報:社会科学版』第24卷第2期、pp.49-53、2010年
- ・徐輝・王静「国際理解教育研究」、西南大学『西南師範大学学報(人文社会科学版)』第29卷第6期、pp.85-89、2003年
- ・張明・劉宇梅「网络電話 skype 中国用戶状况研究」、廣東通信学会『廣東通信技術』第4期、pp.26-30、2006年
- ・鄭彩華・呂傑昕「我国中小学国際理解教育实践研究概述」、上海教育科研出版社『上海教育科研』、pp.51-52、2010年

c. 英文・ドイツ語文献（アルファベット順）

- ・Barrett, Martyn & Short, Janis. Images of European people in a group of 5-10-year-old English schoolchildren. British Journal of Developmental

Psychology 10(4), 1992:339-363

・ Banks, J.A.& Banks, C.A.M. Curriculum Theory and Multicultural Education, Handbook of Research on Multicultural Education, NewYork: Macmillan, 1995

・ Helga, Marburger. Von der Ausländerpädagogik zur Interkulturellen Erziehung. In Schule in der multikulturellen Gesellschaft: Ziele, Aufgaben und Wege interkultureller Erziehung, Frankfurt am Main: IKO-Verl. f. Interkulturelle Kommunikation, 1991, pp.19-34

d. その他資料（五十音順）

・ ITpro 「5 億人を超えた中国インターネットの実情『中国インターネット発展状況統計報告』最新版から」（2012/06/08）

<http://itpro.nikkeibp.co.jp/article/COLUMN/20120525/399067/?rt=ocnt>（2016 年 9 月 30 日最終確認）

・ 異文化間教育学会 「異文化間教育学会の趣旨」

<http://www.intercultural.jp/about/index.html>（2016 年 9 月 30 日最終確認）

・ 外務省 「日本国政府と中華人民共和国政府の共同声明」（1972/09/29）

[http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/china/nc\\_seimei.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/china/nc_seimei.html)（2016 年 9 月 30 日最終確認）

・ 厚生労働省 「『外国人雇用状況』の届出状況まとめ（平成 26 年 10 月末現在）」（2015/01/30）

<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000072426.html>（2016 年 9 月 30 日最終確認）

・ 国学網「解蔽篇第二十一」<http://www.guoxue123.com/zhibu/0101/01xzf/020.htm>（2016 年 9 月 30 日最終確認）

・ 国学網「呂氏春秋審分覽第五」<http://www.guoxue.com/book/lscq/0017.htm>（2016 年 9 月 30 日最終確認）

・ SciencePortal China 「中国の基礎教育課程改革の現状と課題—PISA 調査結果を踏まえながら—」日暮トモ子（2011/04/26）

[http://www.spc.jst.go.jp/hottopics/1105elem\\_sec\\_education/r1105\\_higurashi.html](http://www.spc.jst.go.jp/hottopics/1105elem_sec_education/r1105_higurashi.html)（2016 年 9 月 30 日最終確認）

・ JEARN 国際教育ネットワーク

[http://www.jearn.jp/japan/about\\_jearn.html](http://www.jearn.jp/japan/about_jearn.html)（2016 年 9 月 30 日最終確認）

・ 重慶市人民政府 「重慶概況」

<http://jp.cq.gov.cn/aboutchongqing/>（2016 年 9 月 30 日最終確認）

- ・ 人民中国「漢字が現す二つの世界」 李兆忠  
<http://www.peoplechina.com.cn/maindoc/html/200303/fangtan.htm> (2016年9月30日最終確認)
- ・ 人民網日本語版「中日韓の共通常用漢字 800 字、選定草案が発表」(2013/07/10)  
<http://j.people.com.cn/94473/8319095.html> (2016年9月30日最終確認)
- ・ 総務省「教育分野における ICT 利活用推進のための情報通信技術面に関するガイドライン(手引書) 2011」(2011/04/08)  
[http://www.soumu.go.jp/menu\\_news/s-news/01ryutsu05\\_01000007.html](http://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01ryutsu05_01000007.html) (2016年9月30日最終確認)
- ・ 中華人民共和国教育部「中国教育改革和發展綱要」(1993/02/13)  
[http://www.moe.gov.cn/jyb\\_sjzl/moe\\_177/tnull\\_2484.html](http://www.moe.gov.cn/jyb_sjzl/moe_177/tnull_2484.html) (2016年9月30日最終確認)
- ・ 中国 WEB マーケティング関連用語集 (2008/08/05)  
<http://www.china-webby.com/cnnic/> (2016年9月30日最終確認)
- ・ 張進山「戦後の中日民間交流の軌跡と特徴」中国社会科学院日本研究所 (2002)  
<http://japanese.china.org.cn/japanese/30827.htm> (2016年9月30日最終確認)
- ・ 日本言論 NPO 『第 10 回日中共同世論調査』結果」(2014/09/10)  
<http://www.genron-npo.net/world/genre/tokyobeijing/10-7.html> (2016年9月30日最終確認)
- ・ 東アジア共同体評議会「平成 25 年度日中研究交流支援事業『未来志向の関係構築における日中青年交流のあり方』報告書」(2014/02)  
<http://www.ceac.jp/j/pdf/study2/201402.pdf> (2016年9月30日最終確認)
- ・ 毎日新聞「英 EU 離脱 公約『うそ』認める幹部『投票後悔』の声も」(2016/06/27)  
<http://mainichi.jp/articles/20160627/k00/00e/030/145000c> (2016年9月30日最終確認)
- ・ 文部科学省「子どもの徳育の関する懇談会『審議の概要』概要」(2009/08)  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/053/gaiyou/attach/1283161.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/053/gaiyou/attach/1283161.htm) (2016年9月30日最終確認)
- ・ 文部科学省「外来語の表記(答申)(抄)」国語審議会(1991/02/07)  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/nc/t19910207001/t19910207001.html](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19910207001/t19910207001.html)  
(2016年9月30日最終確認)
- ・ 文部科学省「専門高校における職業教育の現状と課題、改善の方向性(検討素案)」教育課程部会 産業教育専門部会(第9回)配付資料(2007/09/07)

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/031/siryo/1212823.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/031/siryo/1212823.htm)

(2016年9月30日最終確認)

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/031/siryo/07071318/002.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/031/siryo/07071318/002.htm)

m (2016年9月30日最終確認)

付録1 実践授業のアンケート調査表（中国側）

第一份调查问卷「课程开始前」

\_\_月\_\_日

姓名 \_\_\_\_\_ 性别 男·女

「关于汉字」

1 你喜欢汉字吗？

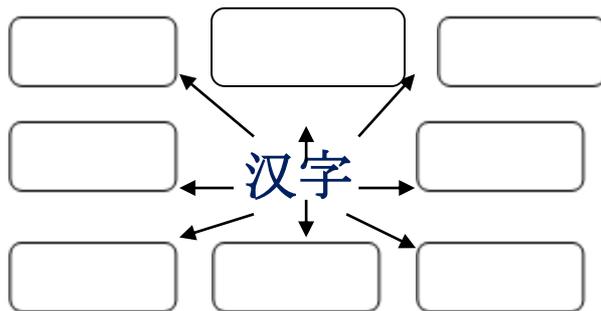
- A 非常喜欢
- B 一般喜欢
- C 不是很喜欢
- D 不喜欢

把你选择「A,B,C,D」其中一项的理由写下来，写一点也没关系

2 对于汉字的学习，你是乐在其中吗？

- A 是的，非常乐在其中
- B 一般有乐趣
- C 乐趣不大
- D 没有乐趣

3 关于汉字，你能想到一些什么样的关键字呢？试着写一下吧



4 下面的汉字或者汉语词汇在日语当中是什么意思呢？猜一下吧

- 娘 →
- 汽车 →
- 切手 →

5 你想要了解一下日本汉字的文化以及历史吗？

A 是的，非常想了解

B 想了解

C 不是很想了解

D 不想了解

「关于和日本的交流」

6 到现在为止，你有和外国的朋友交流过或者玩耍过吗？ ？

A 是的，有过      B 从来没有过

7 即将要和日本的小朋友视频交流，你期待吗？

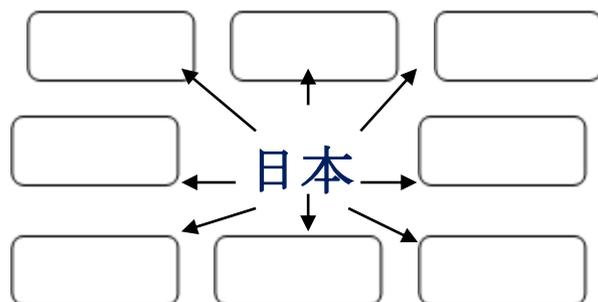
A 是的，非常期待

B 期待

C 不是很期待

D 不期待

8 一说到日本，你脑海中会浮现什么样的词语呢？根据你的了解，写一下你对于日本的印象吧。



9 你通过什么手段了解日本的（可多选）

A 书      B 电视      C 网络      D 朋友或者家人      E 老师      其他\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

10 你想要和日本的小朋友做朋友吗

A 是的，非常想做朋友

B 想做朋友

C 不是很想做朋友

D 不想做朋友

11 和日本小朋友交流的时候,你有什么担心的事情吗?如果有就写下来吧。



非常感谢你的回答!

第二份调查问卷「第一节课后」

\_\_月\_\_日

姓名 \_\_\_\_\_ 性别 男·女

1 今天的课程让你觉得开心吗

A 是的, 非常开心

B 开心

C 不是很开心

D 不开心

理由\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

2 通过今天的课, 你知道一些关于汉字的历史和文化了吗?

A 知道了 B 知道了一点 C 不知道

3 通过今天的课, 你知道中国的汉字和日本的汉字的相同点和不同点了吗?

A 知道了 B 知道了一点 C 不知道

4 通过今天的课, 你知道日本和中国的汉字是相互影响的了吗?

A 知道了 B 知道了一点 C 不知道

5 关于中国和日本的汉字, 你想要更多地了解和学习吗?

A 是的, 想要更多地学习 B 不是很想要更多地学习 C 不想学习

理由\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

6 如果你有关于本节课的感想或者疑问, 就写在下面吧。

非常感谢你的回答

姓名 \_\_\_\_\_ 性别 男·女

1 今天的课程让你觉得开心吗

A 是的，非常开心

B 开心

C 不是很开心

D 不开心

理由\_\_\_\_\_

—

2 你知道自己名字里汉字的含义了吗？

A 是的，知道了 B 知道了一点 C 不知道

理由\_\_\_\_\_

—

3 除了自己名字的汉字的含义，你也想了解别的汉字的含义吗？

A 是的 非常想了解 B 不是很想了解 C 不想了解

理由\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

4 你和你的组员成功地创造了新的汉字了吗？

A 是的，创造出来了 B 创造出来了，但有待改进 C 没有创造出来

3 你觉得你们组做的汉字怎么样呢？写一下你的感受吧

4 其他组做的汉字怎么样呢？写一下你的感受吧

5 你还想创造更多的汉字吗

A 是的，还想创造更多汉字    B 不是很想创造汉字    C 不想创造汉字了

理由\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

6 如果你有关于本节课的感想或者疑问，就写在下面吧

非常感谢你的回答！

姓名 \_\_\_\_\_ 性别 男·女

1 今天的课程让你觉得开心吗

A 是的, 非常开心

B 开心

C 不是很开心

D 不开心

理由\_\_\_\_\_

—

2 你觉得中国学生的表现如何呢?

A 非常好

B 一般

C 不是很好

D 不好

理由\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

3 你觉得日本学生的表现如何呢?

A 非常好

B 一般

C 不是很好

D 不好

理由\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

4 你对日本学生的印象如何呢? 请写下来吧

5 你对日本或者日本的学生的印象有发生变化吗？

A 有变化

B 没有变化

选「A」的同学，是哪些地方让你对日本或者日本的学生的印象发生改变了呢？写下来吧。

6 通过汉字，和日本的学生友好交流了吗？

A 是的 成功交流了 B 交流了 C 没有很好的交流

7 你想要更多学习关于日本和中国的汉字文化吗？

A 是的，非常想更多地学习 B 不是很想更多地学习 C 不想更多地学习

理由\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

8 如果有机会，你还愿意进行这样的视频交流吗？

A 是的，非常愿意 B 不是很愿意 C 不愿意

理由\_\_\_\_\_

—

9 关于日本，你还想了解得更多吗？

A 是的，想了解更多 B 不是很想了解 C 不想更多地了解

10 如果你有关于本节课的感想或者疑问，就写在下面吧

辛苦了，非常感谢你的回答！

付録2 実践授業のアンケート調査表（日本側）

子ども向けのアンケート「授業前」

\_\_月\_\_日

名前 \_\_\_\_\_ 性別 男・女

「漢字について」

1 漢字がどこの国から伝わったか知っていますか？

ア：知っています      イ：知りません      ウ：考えたことがないです

「ア」を選んだ方は国の名前を書いて下さい 国名\_\_\_\_\_

2 あなたは、漢字が好きですか？

ア：とても好きです

イ：まあまあ好きです

ウ：あまり好きではありません

エ：きらいです

「ア、イ、ウ、エ、オ」を選んだ理由を書いて下さい、少しでも大丈夫です。

3 漢字の勉強は面白いですか

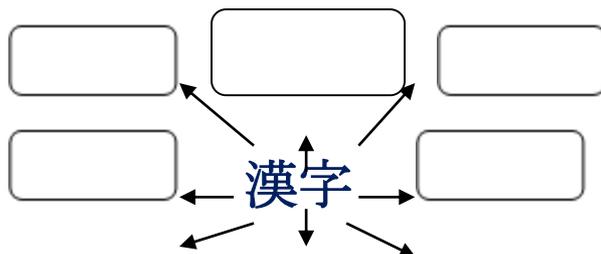
ア：とても面白いです。

イ：まあまあ面白いです。

ウ：あまり面白くないです。

エ：全然面白くないです。

4 「漢字」という言葉から思いうかぶことばをかいて下さい。



5 次の言葉は中国ではどんな意味だと思いますか？

娘 →

汽車 →

切手 →

6 中国の漢字（歴史・文化など）について知りたいですか？

ア：はい、すごく知りたいです

イ：まあまあ知りたいです

ウ：あまり知りたくないです

エ：ぜんぜん関心がないです

「中国と交流の事項について」

7 いままで、外国の子どもたちと話した、遊んだことの経験がありますか？

ア：あります

イ：あまりないです

ウ：ぜんぜんないです

8 インターネットで中国の子どもたちと一緒に授業をやるのは楽しみですか？

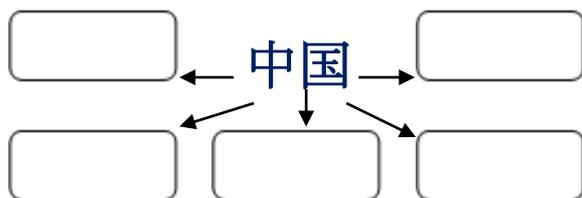
ア：はい、すごく楽しみです

イ：まあまあです

ウ：あまり楽しみではないです

エ：ぜんぜん関心がないです

9 中国といえば、あなたはどんな印象がありますか？あなた知る限り、キーワードを書いて下さい。



10 中国について、どこで知りましたか？（複数可）

ア：本    イ：テレビ    ウ：インターネット    エ：友達あるいは家族

オ：学校の先生    その他\_\_\_\_\_

11 中国の子どもたちと友達になりたいですか？

ア：とてもなりたいです

イ：できればなりたいです

ウ：あまり興味がないです

エ：全然なりたくないです

12 中国の子どもと交流する時、心配なことは何ですか？自由に書いて下さい。

ご協力ありがとうございました！

名前 \_\_\_\_\_ 性別 男・女

1 今日の授業は楽しかったですか？

ア：とても楽しかった イ：楽しかった ウ：あまり楽しくなかった

エ：ぜんぜん楽しくなかった

わけ \_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

2 漢字の歴史についてわかりましたか？

ア：よくわかりました イ：だいたいわかりました ウ：あまりわかりませんでした

3 日本と中国の漢字の同じところと違うところがわかりましたか？

ア：よくわかりました イ：あまりわかりませんでした

4 「日本と中国の漢字がお互いに影響している」ということがよくわかりましたか？

ア：よくわかりました イ：あまりわかりませんでした

5 中国と日本の漢字についてもっと興味を持ち、もっと勉強したいですか？

ア：もっと勉強したいです イ：勉強したいです ウ：もう勉強したくないです

わけ \_\_\_\_\_

6 授業の感想や考えたこと、聞きたいことを自由に書いてください

ご協力ありがとうございました！

名前 \_\_\_\_\_ 性別 男・女

1 今日の授業は楽しかったですか？

ア：とても楽しかった    イ：楽しかった    ウ：あまり楽しくなかった  
エ：楽しくなかった

わけ \_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_

2 自分の名前の漢字の意味について分かりましたか？

ア：よくわかりました    イ：まあまあわかりました    ウ：あまりわかりませんでした

エ：わかりませんでした

わけ \_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_

3 自分の名前（好き）の漢字だけでなく、他の漢字についてもっと興味を持ち、もっと勉強したいですか？

ア：もっと勉強したいです    イ：まあまあ勉強したいです    ウ：もう勉強したくないです。

わけ \_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_

4 授業の感想や考えたこと、聞きたいことを自由に書いてください

ご協力ありがとうございました。

名前 \_\_\_\_\_ 性別 男・女

1 今日の授業は楽しかったですか？

ア：とても楽しかった イ：楽しかった ウ：あまり楽しくなかった

エ：楽しくなかった

わけ \_\_\_\_\_

—

2 班で新しい漢字を作ることができましたか？

ア：はい、できました イ：まあまあできました ウ：あまりよくできま

せませんでした エ：できませんでした

3 作った漢字についてどう思いますか？自由に書いて下さい

4 他の班の作った漢字についてどう思いますか？

5 新しい漢字を、また作ってみたいですか？

ア：はい、また作りたいです イ：まあ作りたいです ウ：もう作り

たくないです。

わけ \_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

6 授業の感想や考えたこと、聞きたいことを自由に書いてください

ご協力ありがとうございました！



6 漢字を通して、中国の子どもたちと交流できましたか？

ア：よくできた    イ：まあまあできた    ウ：あまりできなかった

7 中国の漢字でも日本の漢字についてもっと勉強したいですか？

ア：はい、もっと勉強したいです    イ：まあまあ勉強したいです    ウ：もう勉強したくないです。

わけ \_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_

8 また時間があれば、このようなスカイプを使って、授業をしたいですか？。

ア：またやりたい    イ：やってもいい    ウ：やりたくない

(わけ) \_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_

9 中国のほかのことについてもっと知りたいと思いませんか。

ア：とても知りたい    イ：知りたい    ウ：あまり知りたくない    エ：知りたくない

10 授業の感想や考えたこと、聞きたいことを自由に書いてください

お疲れ様でした！ご協力ありがとうございました。